
魔法少女リリカルなのはEternal

来栖翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはEternal

【Nコード】

N2930H

【作者名】

来栖翔

【あらすじ】

『闇の書事件』から四年……。中学生になったなのは達に起こる事件。事件の背後に見え隠れする影。そして犯人は……。『魔法少女リリカルなのはEternal』……始まります……。

プロローグ（前書き）

二次創作がダメな人はBACK

プロローグ

海鳴市の山あいにある湖。

その湖畔にたたずむコテージ。

そこには二つの石が存在していた……………。

いや、二つの石が一つに組み合わせられていた。

組み合わせられた色は橙と藍色を組み合わせた黄昏の色。

持ち主が見つかるまで離れない石……………。

……………ロストロギア「エターナル」……………

プロローグ（後書き）

はじめまして、こんにちは。来栖翔といます。なのは達が中学生になったときの話を二次で書いてみようかなと軽く書いてみようと思い、文才がない身で、ガンバってみようと思います。 応援、質問、改善点、感想などを待っています。 > (| |) <

第一話〜始まり〜その一（前書き）

なのはの目線です

第一話　始まり　その一

こんにちは。高町なのはです。現在中学一年生をしながら管理局魔導師として戦技教導をしています。

今日は久しぶりみんなと一緒に学校です。

「おーい、なのはー。」

「なのはちゃん、おはよう。」

「あつアリサちゃん、すずかちゃん。おはよー。」

後ろから来た二人、幼なじみで親友のアリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんです。

二人と他愛のない会話をしながら歩いていると、

「なのはー。」

「なのはちゃん。」

前から金髪のストレートと茶髪のショートカットの子、幼なじみでもちろん親友であるフェイト・T・ハラウンちゃんと八神はやてちゃんです。

「フェイトちゃん、はやてちゃん、おはよー。」

そんな朝の一場面。そこに、

~~~~~

フェイトちゃんの携帯の着信音が響く。

「はい。フェイトです。……………はい。……………なのは達と今一緒に。」

……………わかりました、すぐ向かいます。」

「誰からだったの?」

「母さんから。何でも、ロストロギア運搬中に事故で流されたみたいで、その調査に当たってって。」

「そっか……………」

ロストロギア関係なら、執務官のフェイトちゃんに回ってくる。

「たぶん、なのはやはやてにも、応援の要請が来ると思うよ。」

「そうかなあ。」

「なのはちゃん、フェイトちゃんもそう言ってるから。」  
「そうだよ。」

「まあこっちは、いつものバカップルが片方しかいなくてちょうどいいけど。」

「バカップル!?!」

私達が!

「そやけど、それを言ったらアリサちゃんとすずかちゃんも……。」

「は、はやて!」

「はやてちゃん!」

?アリサちゃん達、どうしたんだろう?

~~~~~

~~~~~

今度は私とはやてちゃんの携帯がなった。

「はい、なのはですが……。」

「ああ、なのはさん。」

「リンディさん!」

相手はフェイトちゃんのお義母さん、リンディ・ハラオウンさん。

「フェイトから聞いていると思うけど、ロストログア関連で手伝ってほしいの。」

「わかりました。」

「じゃあ、これからミッドに来て。そこで話しましょう。」

「はい!」

電話を切ると、はやてちゃんも話が終わったようで、

「二人とも、誰からだった?」

「私はリンディさん。」

「うちはレティ提督から。フェイトちゃんの手伝いや。」それからアリサちゃんとすずかちゃんの方を向いて、

「というわけで、アリサちゃん、すずかちゃん。これから仕事があるから……。」

「ノートを……。」

「たのむ。この通りや。」  
「OK」。任せなさい。」  
「わかりやすくまとめてるね。」

こうして私たちはミッドの管理局地上本部に向かった。

「みんな、久しぶり。」  
「レテイ提督。」  
「お久しぶりです。」

私とフェイトちゃんはレテイ提督に挨拶をし、「遅いよ、はやて。」  
「お待ちしております、主ははやて。」

「待たせたな、シグナム、ヴィータ。」  
はやてちゃんはヴォルケンリッター守護騎士のシグナムさんとヴィータちゃんと話していた。

「母さん、ロストロギアは？」  
「はいはい。まったく、クロノもフェイトもなんでこう仕事熱心なのかしら。もう少しゆっくりでもいいと思うけどなあ……。」  
「母さん!!!」

「リンディさん。そろそろ……。」  
「フェイトちゃんイジるのはええけど、なあ……。」  
「そうね。エイミー。」

リンディさんの後ろに映像とエイミーさんが映った。

《はいはい、艦長。今回、事故でなくなったのはロストロギア「エターナル」。二つの石が引っ付いていて、ミッドとベルカの有効の証らしいよ。橙のがベルカで、藍色がミッド。》  
後ろに映像がスライドしていく。

《ただ、途中で改変にあつたみたい。その影響でロストロギア指定になつたみたい。》

「改変つてどんなの、エイミー?」

《その辺はまだ不明。でもこれからユーノ君に調べてもらう予定。》

「そうですか……。」

「今つべこべ言ってもだめやん。それで発見者と運搬は誰や？」

《発見はその近辺を発掘に行っていた考古学の一団。ユーノ君に聞いてみたら結構有名なところみたい。運搬は今のところ不明。事故の衝撃が激しかったのか、移動中に起こったのか誰が運んだのかは……。》

うーん……。

「その人が盗んだって可能性は……。」

《今のところはないよ。第一、逃げ場がない。それに……。》

《それに、自身を危険に晒してまで盗む代物ではない。》

「「クロノ君!!」」

「クロノ!どうしたの?」

《ああ。ちょうど今、知らせが二つ入った。一つはロストロギアの運搬者の発見。もう一つは現在エターナルがある場所だ。》

その言葉のすぐ後で新たな写真が現れた。厳つい顔をした男の人で、そこそこ肌が焼けている。

《名前はユウサ・トワイライト。十中八九偽名だ。調べてみても、なにも出てこない。》

「まあ、偽名なら当たり前や。」

《そうだ。ただ……。》

「ただ、何?」

《いや、どことなく知り合いに似ているな、と……。》

「それよりも、クロノ。場所は?」

「そうだけ。さっさと終わらそう。」

《ああ。場所は……》

第九七管理外世界、『地球』の日本、海鳴市だ。》

第一話〜始まり〜その一（後書き）

どうだったでしょうか？質問、感想、改善点などございましたら、  
どうぞ（ ） ・ ・ （ ） つ

## 第一話〜始まり〜その二（前書き）

第一話が終わります。前回に比べると短いです……。途中で若干百合っぽいがあるので、苦手な方は……。

## 第一話〜始まり〜その二

「海鳴市！！」

私、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人は驚いた。

《……多いね》

《全くだ。何の因果か海鳴でロストロギア関連の事件が多い》

「それだけこつちの負担が大きくなるが……」

「まあ、やるだけやるか。早く帰ってはやての飯、食べてーし」

クロノ君とエイミィさんは事件発生の多さを指摘している。シグナムさんとヴィータちゃんはマイペースというか自分本位というか……。

「あの、場所とかは……」

《今のところはまだわかっていない。けどわかり次第連絡する》

「ということだ」

リンディさん、レティ提督が改まった感じで、

「これから、ロストロギア「エターナル」の搜索および盗難の犯人の逮捕を行います」

「広域の搜索はアーススタッフと私。現地スタッフはリンディ、クロノ・ハラオウン執務官、エイミィ・リミエツタ執務官補佐、高町なのは一等空位、フェイト・T・ハラオウン執務官、八神はやて捜査官とその個人戦力ヴォルケンリッター」

「待機場所は各の自宅つてところかしら」

「それじゃあガンバっていきましょ〜」

《……》

最後のレティ提督の言葉で私たちは気が抜けてしまった。

「……レティ、締まらないわ……」

「……はい」

長いつきあいのリンディさんとよく絡まれるシグナムさんが小さくつぶやいたのが、部屋に響いた。

その後、いろいろとエターナルに関する簡単な資料を読み、簡単に体を動かしてから家に帰った。

次の日

土曜日。

フェイトちゃんとはやてちゃんと一緒に町の中にエターナルがないか探し回っていた。

「それにしてもどこにあるんだろ？」

「そうだね。だけど私はなのはと一緒にいられるからいいかな」

「フェイトちゃん／＼／」

「はいはい。それくらいでええやる。まさか人前でキスとかせーへんやる？」

はやてちゃんが冗談みたいに言う。

「／＼／＼／＼／」

私は顔が真っ赤になるのを感じながら俯いて、フェイトちゃんは真っ赤になりながらも小さく頷いた。

「まさかの凶星か！」

はやてちゃんの顔がいたづらっ子の笑みから驚きに変わっている。

「変……かなあ？」

「変じゃないよ。おかしいのははやての方だよ」

「ちょお待て！！フェイトちゃんの方がめっちゃおかしいやる！！

「！

「じゃははは」  
私はフェイトちゃんとはやてちゃんの口論を見ながら笑っているし  
かできなかった。

その日の夜。

事件は起こった。

次回予告

「平和はすぐに終わって、戦いがまた始まる」

「強大な力が近づくのも知らずに、私たちはただ、待つことしかできなくて……」  
「魔法少女リリカルなのはEternal 第二話」衝突」  
「ドライブイグニッション!!!」

## 第一話〜始まり〜その二（後書き）

えー先に言います。ごめんなさい>「――」< なんか書いている内に「こうすれば面白いんじゃない？」「的な感じで一人でなってます、苦手な方、ダメな方がいると思うのですが書いてしまいました。すいません（；、；）

…えー気を取り直して、質問や意見、感想、改善点などをお待ちしております>「――」<

## 第二話〈衝突〉（前書き）

タイトルがあわない……。敵が一人です。えー、前回書いた後に気づきましたが、十三歳のときはなのは二等空位、はやては特別捜査官でした。（漫画より）感想などをよろしくお願いします。

## 第二話　衝突

夜。

海鳴市の一部に結界が張られた。ミッド式とベルカ式をあわせた結界が。

「……!!!!」

「結界!!フェイトちゃん!」

「うん。なのは、大丈夫?」

結界内で、なのは達は連絡を取る。

「私は大丈夫。今からそっちに行くから」

「わかった」

簡単に連絡をし、レイジングハートを取り出して、

「レイジングハート、セットアップ!!」

>スタンバイレディ!<

バリアジャケットを着て空を飛んだ。ちょうどそのとき、少し離れたところから魔力反応!フェイトとは逆の方向。はやて達が未確認、ロストロギアのどれかになる。

「なのは!」

「フェイトちゃん!」

「……向こうから、……来る!」

>フラッシュムーブ<

>ソニックムーブ<

レイジングハートとバルディッシュが高速移動系魔法であるフラッシュムーブとソニックムーブを発動。すぐ後に、魔力弾が三個、さつきまでいた場所を通り過ぎた。

発射されたところを見ると、金髪のポニーテールで右目が深い青、左目が緑のなのはたちと同じ年だと思ふ少女が一人、そこにいた。

「あなたは誰です?」

「何でこんなことをするんですか？」

「……………我が名はアリス。……………エターナル」

>OK。ブレイズ、フローズンスタートアップ！<  
するとステッキと刀が出てきた。どちらにもカートリッジシステムがついている。

>>ロードカートリッジ<<

次の瞬間、魔力弾が五十個出てきた。色は……………、

「うそ！？」

「……………っ！！」

魔力弾の色はオレンジに近い黄色と深い藍色の二つがあった。

魔力弾が発射されなのはたちに向かってきた。

「アクセルシューター！」

魔力弾がぶつかる。

「……………今日は顔見せ……………」

魔力弾が二つ止まり、勢いよくぶつかった。

すると辺り一帯に水蒸気が充満し、視界を悪くさせた。

「見えない！！」

「……………じゃあね」

「……………！！」

攻撃が来ることを予想して、防御の体制に入る。しかしいつこうに衝撃がこない。なのは達が不思議に思っていると、霧が晴れた。

そこには誰もいなかった。ちょうどそこに

《二人とも大丈夫！》

エイミーからの通信が入った。

「エイミーさん！」

「エイミー。こっちは大丈夫」

《よかった。じゃあ、二人とも家に来てくれない？いろいろと襲撃者の情報がほしいし》

「わかった。じゃあ行く、なのは」

「うん！」

なのはが満面の笑みでフェイトの手を掴んだ。フェイトはなのはの笑顔にノックアウトしてさらに手を握っているので、嬉しかったそうです。

## フェイトの家

なのはとフェイトがリンディ達に説明をしていた。

「魔力が二種類……！」

「うん。魔力光が黄色とディープブルーの二つあった」

「デバイスはエターナルって言っていたよ」

「エターナル……！」

「また戦闘になるのか……！」

「クロノ君……！」

「今は悩んだって仕方ないわ。クロノ」

「はい…」

「エイミィ、このことをはやてさん達とアースラに」

「了解しました」

ピピッ

エイミィが情報を送っている間、なのはとフェイトはアリスのことを考えていた。

「フェイトちゃん」

「なのは…。どうしたの？」

「アリスちゃんんだけど……、どこかでみた気がしない？」

「なのはも！」

「ってフェイトちゃんも！」

「うん」

そう、二人はアリスがどことなく誰かに似ていることが気になっていた。

そして正体に気づく日が近づいていく……………。

〈次回予告〉

「正体の分からない敵、アリスちゃんと戦うことになった私たち」

「エターナルとアリスの関係、そして正体とは」

「『魔法少女リリカルなのはEternal 第三話』clear  
and no clear」

「『ドライブグニッション!』」

## 第二話〜衝突〜（後書き）

次回、アリスの正体やなんかを書いていこうと思います。  
いただき、ありがとうございます（＾o＾）  
読んで

### 第三話〜clear and no clear〜(前書き)

タイトルとあわないです。あと文がオカシくなっています。次回にそのことを書いていく予定です。

それではどうぞ)・(つ

### 第三話〈clear and no clear〉

なのは達がアリスのことを話していたとき…。

海鳴市の山あいにあるコテージ。そこには今、三人の人がいた。金髪のショートカットの女の子、金髪の子と同じくらいの歳の紫色のウェーブがかつた髪の女の子、そして白髪の少女である。

「はあはあ……アリサちゃん、大丈夫？」

「はあ……私は平気。すずかは？」

「私も、大丈夫」

「……………ちよつと」

「……………てすか何、サラ（さん）？」

そう。ここにはなのは達の幼なじみ、アリサ・バニングスと月村すずか、そして管理局から逃げているサラ・トライデントがいた。

サラの簡単な説明

サラ・トライデント

十五歳で泥棒。魔導師ランクはA A。現実的で策士。白髪を気にしている。  
以上。

「私のはけ者ですか？」

「えつと……」

すずかは迷っている感じ。

「そつよ……」

アリサははつきりと答えた。

「なんで！？私が転移させなきゃあの管理局の悪魔と死神とバトっていたよね？バトっていたでしょ！！止めて御礼もないわけ？」

「ハイハイ。アリガトウゴザイマシタ（棒読み）」

「片言でしかも棒読み！」

「アリサちゃん、ちゃんとお礼を言わなきゃダメだよ。サラさん、ありがとうございます」

「うっ……すずかはいいい子だねえ。それに比べて……」

「ん？私？」

「そうですね。何でこんなに乱暴なんだろう？」

「ほく、喧嘩売ってるの？」

「ごめんなさい！」

「早！！！」

と漫才みたいな会話をしているが、一応なのは達の敵なわけで…。

「たく……。特訓用の結界、ちゃんと作ってよね、サラ」

「そっちだつて威力とコントロールをちゃんとしてよ、アリサ」

「なんですってー！！！」

「なによー！！！」

「二人とも落ちついて」

アリサとサラが口論になる前にすずかが何とか止めることに成功した。

ちなみに今現在の二人の魔力は推定AAA+。なのは達よりは低いもののそこそこ高い。

結界が張られ、アリサとすずかは手に握られていたデバイス「エターナルブレイズ」と「エターナルフローズン」を構え、

「エターナルブレイズ！！！」

「エターナルフローズン！」

「セツト・アップ！！！」

>>スタンバイレディ！！<<

アリサはベルカ式、すずかはミッド式の魔法陣を展開。バリアジャケットになり、武器を構えた。

アリサは緑を基調とした制服に黒いコート、手には白刃煌めくカートリッジ式の刀があった。

すずかは黒を基調とした制服に青のリングをし、手に短いステッキを持っている。

さらに二人はお互いに近づき、キスをした。その瞬間、二人の周りを光が覆い、二つの影が一つになった。光が収まり、そこにいたのはアリスであった。

「アリス、すずか」

“なに？”

「大丈夫？」

“平気”

“心配しなくても、大丈夫だよ”

アリスの正体……。それはアリスとすずかがエターナルの力を借りて一つになった姿である。

その頃、八神家。

「グイータ、うまいか？」

「うん！」

「こら、あんまり食べるな。私たちの分がなくなる」

「あらあら……」

「……」

ちようど夕食であった。

結界が張られた。

「結界！！」

「誰だ、せつかくの飯時に！」

「少しは押さえる」

「シヤマル、探査」

「はい」

全員が騎士甲冑になり、シヤマルが探査、後は何があっても大丈夫なように迎撃の構えをしていた。

「……！！北西に巨大な魔力反応！推定SS+！」  
魔力値の高さにシヤマルが驚く。普通であればオーバース魔導師は管理局では名が通るほどであり、あまり人数がいない。シヤマルの探査は高性能なのでSS+というのは確定だろう。これを聞きはやて達は反応があつた地点に向かった。

「あちゃー、失敗」

「あちゃー、じゃない！こっちに来る魔力反応は？」

「複数。一人は夜天の主」

「また面倒な……。アリス、相手していて？」

「いいよ」

「私はその間にいろいろと……」

「エターナル」

>>OK<<

「倒しちゃダメだよ。魔力攻撃のみ」

「やるわよ」

“え？え？”

アリスの方はやる気で、すずかは戸惑っていた。

はやて達はアリスのいるところについた。

「あんたか？結界を張ったのは？」

「うん」

「目的は？」

「うーん、実験？」

「いや、こっちに聞かれても……」

「で、その実験ってなんだ？」

「えっと簡単にいうと……」

ヴィータの質問にアリスが考えながら、

「……………的当て？」

その瞬間、はやて達の下から魔力弾が飛んできた。

「……………!!!」「……………」

全員が何とかかわした。

体勢を立て直したシグナムとヴィータが突っ込んできた。

「はっ！」

「おりゃあ！」

キンツ

シグナムの攻撃はブレイズ、ヴィータはフローズンで防がれた。

「ブレイズはセカンド。フローズンはサード」

>>了承！<<

刀だったブレイズは槍に、ステッキだったフローズンは鎖のついた鎌 フェイトのハーケンと似た状態 となった。

二人は後ろに下がり様子を見ながら、

“ どうする ”

“ しばらく様子を見 ”

そのとき、アリスがハーケンを跳ばした。

シグナムとヴィータはそれを破壊しようとは構えた。すると彼らの目の前でハーケンは五つに分かれた。それぞれの刃がはやて達をとらえていた。

シグナムとヴィータは破壊、はやて・シャマル・ザフィーラは防御をしようとした。

しかし攻撃は目の前で消えた。その瞬間、全員が同時にバインドで捕まった。

「なに！」

「いつの間に！」

そして魔力が吸い出される感じ。フローズンサードフォームの使い方。敵の捕獲と魔力の吸収である。

魔力が吸収され、はやて達は意識を失った。

「……………」

“……………勝っちゃったね”

“……………そう、ね”

実際、彼女らは力の強さに違和感を感じていた。いくら強くても五対一では負けるのではないかと思っていた。それをものの数分で勝つてしまった。

そこへサラが帰ってきた。

「ただいま〜」

「どこに行っていたの？」

「いや〜一応追われる身だから隠れなきゃって思って」

「フローズン」

>カートリッジ作成<

「便利だねえ」

“そう？”

「そうよ。普通は一時間であんまり多く作れないのになんで一回の戦闘で大量生産できるのよ」

“あはは……………”

「それよりも今度は人格はいいとしても魔力操作をちゃんとしてよ？」

「は〜い」

その後、エイミィからの連絡でははやて達は目を覚まし、アリスと戦ったことを語った。

「いや〜あれは反則もんやね。いきなりハーケンが消えたと思った

ら次の瞬間にはバインド。で魔力吸収されておしまいって。相当強いわ、あの子」

《そうか。こっちからもわかり次第連絡するから》

「わかったわ」

ピッ

「さて、と」

はやては敵の能力の予想をしていた。はやてのレアスキル、蒐集はたくさん情報を持っているため、似たようなものがないかを探していた。

「？これは…」

はやての目に留まったのは吸収の項目であった……。

「はやてちゃんが襲われて一日」

「事件は少しずつではあるが進展を見せる」

「『魔法少女リリカルなのはEternal 第四話』始まりの過去」

「『ドライブイグニッション！』」

第三話「clear and no clear」(後書き)

感想、意見、質問など、よろしくお願ひします。

第四話 始まりの過去 一 (前書き)

若干ネタっぽい

## 第四話　始まりの過去　その一

あの日　なのは達が管理局に行った日。

放課後。

「暇ね」

「うん」

なのは達がいないため、アリサとすずかは暇になっていた。

「今日金曜だし、いつものようにコテージ行く？」

「そうだね。たまには息抜きも必要だし」

という会話から郊外にあるコテージに行くことになった。

ちよつとそのころ…

　　コテージ

「ふっ、うまく撒けた」

サラがいた。

管理局からの盗みをしてきたところだ。

「今日の成果はこちら！『エターナル』です」

誰もいないのにしゃべっている。おい、大丈夫かー？

「ぐす。どうせ私は寂しがり屋の盗賊ですよ。作者からもうどうせ雑魚キャラだろと思われるに違いないダメキャラなのです（泣）」  
なぜ私まで！！ちよつと、サラさん？私悪い事しましたか？

「…………寝よ」  
無視かー！ー！！私が無視されるのかー！ー！！  
まあ多少のおふざけ（サラと作者の）はおいといて、サラはベット  
で寝ることにした。

二時間後：

アリサ達がコテージに来た。

「さーで、久々に遊ぶわよ」

「おー」

アリサが鍵を開けようとドアノブに手をかけた。

カチャッ

「へ？」

「あれ？」

ドアが開いた。鍵を開ける前に開いたのだ。

おそろおそろ中にはいると、テーブルの上にきれいな石 エターナ  
ル が置かれていた。

「きれー」

「ほんとね。管理人さんが置いていったのかしら？」  
ちょうどそのとき。

“……………主……………”

「へ？」

何かと呼ばれる声を二人は聞いた。

その声で体の自由が利かなくなった。手がエターナルに触れようと  
している。

パキッ

その音でエターナルが二つに分かれた。そして中からリンカーコア  
が現れた。リンカーコアが二人の体に吸収されるように消えていっ  
た。

ちょうどそのとき、サラが出てきた。

「ん〜よく寝た〜……！」

固まる三人。

「……」

「(えつと……)」

「(不法侵入?)」

「(どうしよう、いいわけが思いつかない。…ん?)」

サラが机の上に置いてあったエターナルが二つに分かれているの  
を見つけた。

「あー！ー！ー！」

アリスは叫ばずにはいられなかった。

「(せつかく盗んだ大事なお宝が…)なんて事してるの!ー！」

「いや、そういわれても……」

「それ言ったらそつちも何しているのよ？」

「そつそれは〜(言えない。泥棒して逃げてるなんて言えない)」

「もしかして、強盗？」

「違うよアリサちゃん。強盗じゃなくて泥棒だよ」

「ギクッ!ー！」

「何、そのあからさまな反応は？」

「え、!ーいや、何でも……ない」

「?まあいいわ。ちなみに聞くけど、これ、何？」

「えつと、きれいな石じゃ、ダメ？」

「ダメよ。なんか魔法って感じだったし……」  
「ギクッ!!」

「……やっぱり……」

「……それはロストロギア『エターナル』といいます」

「ロストロギア!？」

「じゃあはやてちゃん達に連絡しなきゃ!!!」

「やめてー!!!」

「?!?!」

「夜天の主はー」

「じゃあなのはかフェイトに……」

「悪魔と死神はー。どうか命だけは助けてください!?!? (泣)」

泣きながら頼み込んでいるサラ。

「悪魔と死神?」

二人はその異名に疑問を覚えた。

「悪魔と死神ってなのはとフェイトが?」

「何かの間違えよ!」

「いえ、これは管理局では筋の通った話ですよ……。『白い悪魔』と

『金色の死神』と言えば誰かと分かるくらい有名で……。……恐ろ

しいです」

「……」

二つ名が恐ろしいが、普段の生活からは想像しがたい。

「あー信じていませんねー!!!」

「(?!?)」

「(バレた!!!)」

「ホントなんですから……。信じて(うるうる)」

「!!! (その目をやめてー)」

「(かわいいな)。抱きつきたいな)」

そうした会話をしていたときに、エターナルが起動。二人の顔が近づき、

「!?!?」

キスをした。

「「「！！！！」」」

本人達は一応つき合っているため、キスはしていた。だが、さすがに人前ではしないため、驚きはハンパなかった。

すると光が包み込み、一人の少女となって現れた。アリスである。

「マスターに巡り会わせてくれてありがとう、でいいの？」

「えっと、君は？」

「……………」

「……………」

「ないよ」

「は？」

「名前、ない」

「ちよっと、これはいったいどういう事！」

「アリスちゃん、落ち着いて」

アリスとすずかの念話が入った。

「その不法侵入者！どういう事！説明して！！」

### 説明中

“つまり、ロストロギア『エターナル』っていうのを私たちが触つて”

“その何かしらの能力で一緒になってしまった、と”

「ついでに言う魔法少女になってしまいました、てこと」

「あははは……………」

笑って済む事じゃないよ、これ…。

「“それじゃあ……………」”

「へ？」

ガシツと肩を掴まえられたサラ。

「“必殺の〜”」

右手から炎と氷を魔力で作りに出している。

「それ元ネタとか危ないから！」

「“右ストレート！”」

「キヤーー！！！」

ヒューー……

ドアから飛び出し、に激突した。そこでサラは意識を失った。

#### 第四話〈始まりの過去〉その一（後書き）

すいません。」「（〈 〉いつの間にか百合っぽい作品になって  
いっています。意見、改善点、質問、その他諸々、  
お待ちしております。

第四話 始まりの過去 其二 (前書き)

前回の続きです

## 第四話　始まりの過去　その二

サラが目覚めたのは、ストレートをくらって一時間後だった。

「あつ気分はどう？」

「……………最悪です」

ベットから起きながら、サラは自己紹介をした。

「サラ・トワイライトです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

「ちなみに言っておくけど、このコテージは私のだからね、不法侵入者！」

「はい……」

「それはおいといて、あの石って魔法？」

「はい」

「私たちも使えるの？」

「はい」

アリサは、サラがはいしか言わないのをいいことに、

「あなたは強盗？」

と言ってみたが、

「いいえ、泥棒です」

普通の答え（？）が返ってきた。

「……………すずか」

「はい」

「警察に連絡」

「はい」

「ちよっ」

電話しようとしているすずかを止めようと近づく。が、立ちくらみでちゃんとは歩けない。

足が絡まって、すずかに向かってダイブ。押し倒す形になっていた。

「……………」

「えっと……………」

ゴゴゴゴゴ……………」

背後からものすごい殺気。振り向くとアリサが人を呪い殺せそうな目でにらんでいた。

「私のすずかに何しようとしてるの!」

それを聞いたすずかは、

「アリサちゃん…」と頬を染めながら、アリサを見ていた。

「問答……………」

「えっちよっ」

「無用!」

バキッ!

「ぐはっ」

バタッ

「ま……………まだこれしき……………」

「ファイアーナックル!」

「燃える!絶対燃える!」

「そろそろ話戻した方がいいよ、アリサちゃん、サラさん」

「そういえばそうね」

「ははは……………(助かった)(泣)(改めて話すと、私は人に追われています。匿って下さい)」

「いいわよ」

「うん」

「ですよ。いきなり見ず知らずの人間をかくま……………ええ!?ほんと?いいの?」

変なことに、あっさりと了承してくれた二人。だが、

「私の気分次第で立ち位置は変わるから覚悟しておくのよ、サンドバツク!」

「何処にも砂ないから!」

「知ったこっちゃないわ。すずか!縛るものある?」

「麻紐ならあるよ」

「……………何で持っているの?」

「あははは……………」

「じゃあこれで……………」

縛られる!サラは安全よりも自身の貞操の危機を感じていた。

「きゃーー」

「ぐす……………ぐす……………」

縛られて宙づりの状態でサラが泣いていた。

「いつまで泣いているの!しゃんとしなさい!」

「無理でしょ!縛られて動けないんだから!」

「そっだよ、アリサちゃん」

それからサラは降ろされ、魔法を教えようとするが、結界の範囲ミスでなのはとフェイトに気づかれた。サラは顔見せにちょうどいいとアリスを送った。はやてに気づかれたときは、アリスに結界の維持を任せるときに、魔力を多く与えたのが原因である。ただサラは実戦訓練だと言ってアリスに戦わせた。

当然、丸投げしたサラはお仕置きを受けて、コテージの一室に逆さまに宙づり状態。

「あゝたゝまゝに〜ち〜が〜」

こっちは言いながら、

「(何時かあって、戦おうか、龍乾……………)(リウケン)」

そう小さくつぶやき、辺りは静かになった。

こうして、現在に至る……………。

## 第四話〈始まりの過去〉その二（後書き）

次回はまだ考えてないので、簡単なキャラ説明になりそうです。  
感想などをお願いします。

番外くキャラ説明く(前書き)

ネタっぽいところがあります

## 番外くキャラ説明く

ドンドンパフパフ

「初めましてこんにちははアリサ・バニングスです」

「月村すずかです」

「サラ・トライデントです」

作者の来栖翔です

「と改めて言うのもあれなので、ちゃっっちゃかキャラ説明をしていくわ」

「最初は？」

「はっはっはー。じゃあこの」

バキッ

「サラ、黙らないと殴るわよ」

「殴ったよ！注意する前に殴ったよー！！」

「いいじゃない、ね、来栖？」

その立ち位置だからねく

「二人ともひどい！」

「そうだよ」

ちなみに、私に刃向かったりしたら……

「……したら？」

魔力砲撃が飛んできます

「それならまだ……」

「うん……」

「なんとかなるかな？」

バインド＋N&Fの空間攻撃ブラストカラミティーは？（なのは・

フェイトの最強コンビネーション攻撃）

「動けない状態で中距離殲滅魔法……」

「死ぬわね」

「うん」

「わかった？わかったら説明説明

「じゃあ最初にアリサとすずか。こちらです」

アリサ・バニングス

魔導師ランク：AAA

術式：ベルカ式

デバイス：消えぬ炎『エターナルブレイズ』

なのは・フェイト・はやての親友で幼なじみ。それですずかLOVEの人。ツンデレ。魔力変換資質あり（炎）。

デバイス『エターナルブレイズ』は刀型のカートリッジ式。フォームは刀と槍、他にもあるがまだでていない。

月村すずか

魔導師ランク：AAA

術式：ミッド式

デバイス：溶けぬ氷『エターナルフローズン』

なのは・フェイト・はやての親友で幼なじみ。それでアリサLOVEの人。魔力変換資質あり（氷）。

デバイス『エターナルフローズン』は、杖型のカートリッジ式。フォームはステッキとハーケン、他にもあるがまだでていない。

ちなみにバリアジャケット、騎士甲冑はアリサはシナ、すずかはstrawberry picnicを基にしています

「なんかスゴいね」

あなたは二人に少し劣っているもんね

「魔力制御、たまにダメだし……」

「グサツ！」

「泥棒だし」

「グサグサツ！！」

イジられキャラだし

「ははは……燃え尽きたよ、真っ白に……」

ジーーーー！！！！

「髪の色とマツチしたね……」

「作者とサラ、何しているのかしら……。さて、次はサラよ」

サラ・トライデント

魔導師ランク：A A

術式：不明

デバイス：不明

十五歳で魔導師をしながら泥棒をしている。現実的で策士。白髪を気にしている。

「……来栖、イジられキャラって入ってないわよ」

あ、ホントだ。後で直そう

「入れないで！そのままでもいいから！」

チツ！

「舌打ち！ちょっと説明しろよ作者！」

ウルサイなあ。えい！

パシッ

「！バインド！」

全力！全壊！

「いや全開でしょー!!」

スターライト!ブレイカー!!

「きゃーー!!」

ドゴーン

「……派手にやったわねー」

「大丈夫なのかな?」

何もしゃべらない。屍のようだ

「……な」

え?

「勝手に」

えっちよっ

「殺すなー!!」

きゃーー!!

「……」

「?どうしたの、二人と……も?」

チュツ

キラーン

「どーもー!アリスです」

こんにちは、アリス

「来栖さん、こんにちは」

それじゃあ屍、

「誰が屍だ!!」

アリスの説明よろしく(^^)ノ

「ぐっ。わかりました。アリスはアリサとすずかのユニゾン時の姿です。詳しくはこちら!」

アリス

魔導師ランク:SS+

術式：ミッド式・ベルカ式

デバイス：ロストロギア『エターナル』

アリサとすずかのユニゾンした姿。金髪ポニーテールで右目が深い青、左目が緑である。二人の性格に似ているところもあるが、アリス自体にも人格があるため、天然なところもある。

バリアジャケットは現在思案中なのだ

「だから代わりにアリサのを着ていま〜す（ニコッ）」

「バリアジャケット・騎士甲冑でこんなのがいいという考えがあれば、感想にどうぞ！」

そういえば、前回最後にサラが言った龍乾という人物は、まだ出てきていないため、紹介することはできないよ

「ネタバレ禁止です」

「それでは次回をお楽しみに〜」

おまけ

サラ

「ん？」

ディアボリックエミッションー！！

「きゃー、何するのよー！」

いや、なんとなく

「なんとなくて…」

次何か言ったらブラストカラミティー撃つよ

「すいませんでしたー！！」

プ  
シ  
ン

番外くキャラ説明く(後書き)

またするかもしれない  
よろしくお願いします(^^)ノ

感想などを

第五話〜休息〜（前書き）

少し戦闘をしています

あと、新キャラがでます

## 第五話〜休息〜

その日、ハラオウン邸に一人の人物が来ることになっている。だが、「遅い！」

クロノの痺れを切らした声が響く。約束の時間になっても、現れない。

三十分後

「すみません！遅れましたー！」

ひとりの少女がやってきた。

「えっと、太刀形龍乾たちかたりゆうけんさんの代理の方ですか？」

「いえ、本人です」

これにはフェイト、エイミー、クロノは驚いた。明らかに男の名である。

「あははは……。大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

「大丈夫大丈夫……」

「う、うん……」

「いや〜いつも名前と性別が合わないって言われていて……」

「（大変なんだなあ）」

「ちなみに今、何歳？」

「？十四ですよ」

「フェイトちゃんと一歳違いか〜」

「エイミー、いいだろう。それでは太刀形三等空位！」

「はい！！」

「我々は今、ロストロギア『エターナル』の探索をしているのだが……」

「人数的な関係で、少し手伝ってもらいたいなあ、と」

「そういうことでしたら、任しといて下さい！」  
おーどこぞの泥棒とは違って元気な子だ。

一方、八神家。

リビングにはやてと守護騎士が集まっていた。

「今回の敵の攻撃な、最初の魔力弾とハーケンの刃による攻撃、魔力吸収だけやんか」

「はい」

「最初のは設置していたのを動かしただけでええけど、ハーケンから魔力吸収まで流れるようにしたやる？」

「確かに、何かをその間にした訳ではないですね」

「それ以前に、そのようなことをすれば、シグナムがヴィータが見つけているはずだ」

「でや、ここで一つの仮定が生まれる。このハーケンに元々吸収効果が含まれているんじゃないか？、と」

「それなら投げるだけで当たれば吸収ですね」

「でも、あたし等に当たる前に消えた。これはどう説明すんだよ？」  
「そこは、これや」

そう言っつてモニターを展開。ハーケンが消える少し前から再生されている。

「迎撃体制からいきなり対象が消えたら、拍子抜けして、一瞬、油断する。その一瞬に魔力を結合すれば」

「バインドとして捕らえて吸収する、ですか主はやて」

「しかしこのハーケン、我らの動きについてきていた。魔力操作は集中していなければ難しいが、ハーケンはシューターよりも難しいはず」

「確かにテストロッサでさえあれは飛ばすだけだからな」

「その辺は追々考えるとして、後は各自で自由にするで〜」

## ハラオウン邸

二人の少女が対峙している。ひとりにはフェイト・T・ハラオウン。もう一人は太刀形龍乾である。理由は少し前にさかのぼる。

〈数分前〉

高町なのはがハラオウン邸にやって来た。

「フェイトちゃん」

「なのは！」

ソニックムーブでなのはの前に行ったフェイト。

部屋に取り残された三人。

「?どうしたんですか?」

「すまん。あいつの恋人だ」

「恋人って明らかに女の子の声ですよ!」

「それは…だなあ…」

「簡単に言っと、彼女だよ」

「ははあ、なるほど………ってあのフェイトさんってそういう趣味なんですか?」

「(そりゃ驚くよな)」

「ある人にはねえ〜」

「?誰なんですか?」

「今までの言葉を考えてみてくれ」

今までの、言葉…。

彼女……なのは……。なのはなんて珍しい名前、聞いたこと……

……あるわねえ、高町なのは二等空位。まさか、ね。

「もしかして、高町なのは二等空位ですか？」

「そうそう」

こつしちやおれまい！管理局の情報屋（自称）の名が廃る！証拠写真を。

などと心の中で思いながら、龍乾は玄関の方を見てみた。ちょうど運良く（悪く？）二人がキスをしていた。キラーンと龍乾の右目が光り、音速でカメラを取り出し激写した。

写真を撮られたことを知ったフェイトがネガをよこせと言ってくる。なのはは目を白黒させながら、成り行きを見ていた。

「いつそ模擬戦、する？」

「いいですね。では」

「触即発の危機……！」

「ここでやるな。やるなら屋上でやってくれ」

「わかった」

「はい」

## 屋上

「バルディッシュユ！」

「ハーメルン！」

「「セットアップ！」」

>>スタンバイ・レディ？セットアップ！<<  
フェイトはロッド、龍乾は弓を持っている。

先に動いたのはフェイトだ。

「はぁー!」

龍乾は避けながら、

「五月雨!」

矢を三本はなつた。

フェイトは避けたが、その矢自体が追尾するように軌道を変えた。

「(追尾!!それなら...)フォトンランサー!...ファイヤー!」

矢を打ち落とした。しかし、

「フォトンランサー...」

「!」

龍乾がフォトンランサーを発射。

「くっ...!」

それに紛れて矢が飛んでくる。

「(矢が邪魔...。それなら)ザンバー!」

>ザンバーフォーム<

バルディッシュはザンバーとなり、矢を切り落とす。

「ハーメルン...」

>OK、コピーシルフィ!<

弓が変化し、双剣となった。白の剣と黒の剣だ。

>ツインブレイド、作成完了!<

「いつもだけど、何でこれ?」

>楽だからですよ<

「まあいいわ」

そう言った後、右手に持っていた黒剣をフェイトに投げつけた。

「!」

>ソニックムーブ!<

紙一重でかわし、背後から切りかかった。龍乾は、今度は白剣を投げた。予備動作が皆無に近く、突然の投射にギリギリで避けた。すると、

「来い!」

投げた剣が龍乾に刃を向けて戻っていく。ちょうど直線上にフェイ

トがいるので、剣が当たりそうになる。

>ラウンドシールド<

バルディツシユが気がついたため、フェイトに怪我はなく、フェイトも攻撃を軽くいなした。

「やっぱりこれじゃあダメね。ハーメルン、コピー」

>コピーザンバー<

すると今度は形が変わり、バルディツシユと同じ形、ザンバーフォームになった。

ザンバー対ザンバー……。同じ武器での戦いとなり、個人の能力での戦いとなった。

高速戦を得意としているフェイトは不思議に思った。

「（どうして攻撃が当たらない？）」

そう……。攻撃が当たらない。切りかかるタイミングや移動する場所、魔法のレパトリーマで同じである。

「（あゝ楽だなあゝ）」

真剣な顔つきで龍乾は思った。

「（私のレアスキル……反則に近いからなあ）」

龍乾のレアスキル……。複写。コピーと言い換えてもよい。相手の能力・攻撃・思考パターンを真似するスキル。ただ、相手の情報を手に入れていなければ、使えた能力ではない。さらに、同じコピーは使うほど劣化するため、同じコピーは一・二度しか使えない。微妙と言っしかないスキル。

フェイトの攻撃をかわし、移動ポイントを割り出してそこに攻撃しようとした。

「これで……」

「……！」

「とどめ……！」

しかし、

ドカーン……！

「きゃあああああ……！」

龍乾が打ち落とされた。背後からの砲撃で。

「私のフェイトちゃんになにするの。少し…頭、冷やそうか…?」  
魔王になったなのによって。

…というか、それを言うのは撃ち落とす前にした方がよかった。  
龍乾は気絶していた。

所かわってコテージでは。

「うおりゃあああ!」

サラが声を上げていた。おい、どうした?

「なぜかアリサに罰ゲームで湖泳がされることになって…」

「誰と話しているの?」

「あれ?」

ちなみに作者は神の立場にいます。同格に当たるのは、アリスだったりします。

「それより早く泳いで魔法教えてよ」

「待ってアリサ!泳いだ後にやるの!せめて休憩

「ないよ」…すずか、少しは優しくして…」

なぜかサラには味方がいなかった。

「誰か助けてー!」

無情にもサラの声が響いた。

## 第五話〜休息〜（後書き）

いろいろと誤字脱字があつたと思います すいませんでした〜  
| ) < 感想／評価、よろしくお願ひします

第六話 対決と新たな人物 (前書き)

新キャラを出します (笑)

戦闘描写は苦手です (泣)

## 第六話 対決と新たな人物

夜

海鳴市の郊外を二人の人物が飛んでいた。サラとアリスだ。

「なにをするの？」

「派手に挨拶」

「へ？」

言ったすぐ後に結界を展開。

「……………!!!」「……………」

「結界！みんな！場所は海鳴市郊外の森林！半径およそ三キロ！！」  
それぞれが現地に向かった。

「これでよしと」

「いいわけあるかー！！」

「ぐはっ！」

「なにが挨拶だ！ただ単にストレス発散したいだけだろ！」

怒られるサラ。頑張れよ。

「いや、作者。応援いらないから」

そうなの、アリス？じゃあ頑張れ雑魚。

「誰が雑魚だー！」

そうこうしていると、なのは達がやってきた。

「アリス」

「なに、サラ？」

サラは龍乾を見ながら、

「少し本気を出そうかなあ」

「別に良いけど……」

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん」

「了解や」

龍乾はサラを見て、

「サラ…（決着をつけなくちゃ…）」

戦いが始まった

アリスにはなのは、フェイト、はやての三人にヴィータ、ザフィーラの五人。

サラには龍乾とシグナム、シャマルの三人。

「アリスちゃん……」

「な・あ・に？」

「戦わなくちゃ…だめ？」

「だ・め」

「気をつけるよ…。あいつ、強いぞ」

「龍乾……」

「サラ……」

「殺し合おつか」

「拒否権は？」

「あると思っ？」

「でしょうね……」

アリスVSなのは達

アリスはブレイズを剣、フローズンをステッキの状態で待機している。

一方のなのは達は、エクセリオンモードのなのは、ザンバーを構えるフェイト、リインとのユニゾンが終わったはやて、グラーフアイゼンを構えるヴィータに狼状態のザフィーラが周りを囲むようにして体制を整えていた。

「それじゃあぼちぼち、始めますか」

その言葉が引き金になったのか、

「シユート！」

なのはがシユーターを放った。その数三十。

「フローズン、モードセカンド」

>OK！セカンドフォーム<

フローズンセカンドフォーム……。基本的にブレイズは近距離戦での戦いに特化しているため、フローズンは遠距離タイプのデバイスである。形はオートマタイプの銃である。(StSのティアのクロスミラージュに似ている)

アリスがだした魔力弾は二十。黄色の弾がアリスの周りにあつた。数だけみても明らかに少ないため、なのはは当てれると思った。多分、フェイト達もそう思ったのだろう。

魔力弾によると爆風が起きた。

周りは煙で何も見えない。

「やったか？」

「わからない……。当たったと思うけど……」

ヴィータの問いになのはが答えた。そのとき、

「けほ……けほ……」

「失敗したわ……けほ……」

二人の人物の声が聞こえた。なのは達はその声に驚いた。なぜなら、聞いたことのある、いや聞き慣れている声だったから。

煙が晴れて現れたのは、アリサとすすかだった。

一方のサラVS龍乾達は、

「シルフィ、久々だけどお願い」

> 久々だからって遊んだりしないで下さいよ。やるなら全力で<

「……私さ、そうゆう風に戦っている訳じゃないけど……」

> 知りませんよ、そんなこと。それじゃあ始めますよ<

「OK」

サラは刀、妖精の羽シルフィフェザーに言った。

「本日二度目はサラとの対決。ハーメルン、データ撮っておいて」

> わかりました。本気で戦って下さいよ<

「わかってるって。シグナムさん！シャマルさん！」

「なんだ」

「はい」

「あいつと、一対一でやらせて下さい」

「…了解した」

「…わかったわ」

「すみません、ワガママ言って……」

龍乾は弓、神弓ハーメルンを構えた。

二人が戦う構えになった。

「サラ・トライデントと妖精の羽、シルフィフェザー」

「太刀形龍乾と神弓、ハーメルン」

「いざ！／＼押して参る！」

互いに飛びだしていった。

「五月雨！」

サラに矢が放たれる。

「双剣！」

一本から二本へ、刀がかわった。龍乾がフェイトに使った刀と同じである。

「はあ！！」

飛んでくる矢を切る。

「（やはり、五月雨はダメか…。なら、）百足<sup>ムカデ</sup>！」  
五本の矢を放つ。

「せや！！」

矢を切る。が、切った場所から再生し、数を増やしてまた襲いかかる。

「（切るのがダメなら……）シルフィ！」

>モードツヴァイク

すると刀が槍に変わり、刃を龍乾に向けた。

「それ……見たことないわね。新しいの？」

「前からあった。ただ、使わなかっただけ」

「へえー」

サラが矢を切った。しかし再生はしない。シルフィモードツヴァイクは、魔力結合の解除 アンチマギングフィールド 簡単に言うとAMFの発動 を切った部分から行っただ。つまり、

「はあー！！」

龍乾の使う百足は無効化されたことになる。しかし、

「ハーメルン！モードセカンド！」

>セカンドフォーム<

弓だったハーメルンは二つに分かれ、二丁のマシンガンになった。

マシンガンを撃つ。撃つ。撃つ。……………

煙で視界が悪い中、

「モードドライ」

>モードドライ！イグニッション！<

サラは槍から無手になる。何も持っていないわけではない、手には黒いグローブをしていた。

「それで勝てるの？」

「当然！」

すると手にはいつの間にか仮面があった。

「ペルソナ……発動！！」

仮面をつけた。その瞬間、雰囲気が変わった。

「最初に言っておくわ。私はかなり、強いわよ！」

「ゼロ スか！ゼロ スなのか！」

まあ仮面 イダーのことであるが……。

サラが手を前に出した。すると柄から刃の先端まで金色の西洋剣が手にはあった。

「少しは手加減してやる！楽しませてくれよ！！」

剣を上段から振り下ろした。百メートル以上もの間があったのに籠乾は吹っ飛ばされた。

「なんだ？つまんねーな！。それじゃあその剣士のねーちゃん、

「俺」の遊び相手になつてくれね？」

軽いのりではあるが、簡単に言えば、殺し合いをしようと言つただ。

シグナムは構えて、攻撃に備えた。

それを見てサラ（？）は上段に剣を構え、振り下ろそうとした。

「止めとけ、ペルソナ。もういいだろう」

いつの間にはいったのか男がいた。剣を止めて、サラ（？）に男性は話しかけた。

長い薄紫色の髪にとても整った顔立ち、紫の甲冑に白と黒の剣が妙に目立つ男だった。

「なんだよ紫苑しえん！せっかくの戦いだってーのによ！！」「そんなにしたいならば本部で浪醒なみせいとやっっている。食わなくても餓死しないんですから大丈夫でしょう？」

どこの無敵キャラだ。

「わーたよ。で、アリサ達はあしつどうすんの？」

「あなたが決めて下さい。はあ…私はただでさえ忙しいのに…。早く帰ってきて下さいよ」

「了解」

紫苑と呼ばれた男はその答えを聞いて消えた。

「アリサ、すずか」

「何？」「何ですか？」

「後は任せた」

「は？／＼？」

「じゃあそういうことで…。じゃね」

シユン、とサラが消え、後にはなのは達だけが残った。

第七話 戦いの後 (前書き)

ぐだぐだです……

アニメネタが多く短いです

## 第七話　戦いの後

戦闘時、アリスはアリサとすずかに戻って攻撃を避け、相手の背後をとろうとした。しかし、ぶつつけ本番で決めれることなく、結果、避けるまではできたもののそこ止まり。結局なのは達に捕縛された。

今はハラオウン邸で全員集まり、龍乾は気絶していたので別室でシヤマルの治療を受けている。

「……で、サラ・トライデントといったあの子のこと、他に何か知らないか……？」

「はい……」

クロノの質問に対して答えるアリサ。

「あの……すいませんでした！」

「謝ることじゃない。それにもうしないのだろうか？」

「……はい！」

まあこっちは問題解決したみたいだ。

「んで聞きたいんやけどええか、アリサちゃん、すずかちゃん？」

はやてが何か思ったのかアリサ達に質問した。

「何、はやてちゃん」

「どうやってアリスの方になってるんや？」

「……！！！」

その言葉を聞いた瞬間、二人とも茹で蛸のように顔を真っ赤にした。さすがに人前では言えないことなので、耳打ちですが伝えた。

……が、

「うん……！！キスー！！！」

耳打ちは全く意味をなさず、周りにただ漏れ。

「あう／＼／＼／＼／＼／＼」

「はやて、ハズいわ／＼／＼／＼／＼／＼」  
当然二人の顔は真っ赤になった。

周りも周りで似たりよったり。

「もつといろいろとしてそうやから、すずかちゃん」

「え／＼／」

ガシツとすずかの肩をつかむはやて。

「ここで麻雀してうちが勝ったら教えて」

「何で麻雀よ！ていうかはやてできたの！！」

「なんやえらい驚いてるなあ」

「当たり前よ！普通知らないでしょ！」

一般的に中学一年で麻雀をできる人はいません。……多分。

「うちに知らないことはとても少ない。例えば、なのはちゃんやみんなの胸の大きさはもちろん、フェイトちゃんの今思っていること、太刀形さんの意中の相手まで」

「どこで知ったの！！」……特秘事項や」

グツジョブと言うように指を立てるはやて。

「ていうか龍乾さん、復活早いね……」

早い話が自己再生？

「いや、ポ モンやピツ ロじゃないから」

誰につっこむ。

「ポ モンほしいよね」

無理矢理だがすずかが話をそらした。しかし、

「誤魔化そうたってそうはいかんで、すずかちゃん。うちが嶺上開花をおみまいするでー！」

「いろいろとカオスになりすぎだー！」

アリサのつつこみが響いた。

第八話〜組織〜（前書き）

新キャラがでます

## 第八話〜組織〜

ある組織本部

その場にはサラと紫苑、髭面の年齢不詳の男と理知的なスーツ姿の男、黒髪の女が二人いた。

「サラ・トライデント、ただいま帰ってきましたー」  
なぜか敬礼をしているサラ。

「遅かったね〜」

「そうよね〜」

こう話すのは紅麗こうれいと藍姫あまひめ。実質この組織のリーダーと副リーダーだ。  
「確かに遅いですね。…まったく、どこで油売っていたんですか。  
心配しましたよ」

彼はフレイル・アルマーク。スーツ姿の男である。

「いいんじゃない？元気で戻ればそれで」

こう言うのは浪醒なみせい。髭面でがちりとした体をしている。

「うるさいぞ醒。さっきサラが醒なんか余裕で倒せるぜ、とか言うてたぞ」

「ちよつ紫苑！誰が言った！」

普通に紫苑は嘘を言った。

「サラ、帰ってそうそうだがそんなに倒されたいか……」

浪醒の背後が黒く見えるのは気のせいであってほしい。

「えーと…釈明の余地は……」

「ねえよ」

「ですよね〜」

「ははははは……」

弁解の余地すらサラには与えられていない。

少し離れた場所では、

「今回のサラVS浪醒。どうなるのでしょうか、解説の紅麗さん」

「そうですねー、今頃サラの成長には驚かされますが、さすがに浪醒には勝てないでしょう。実況の藍姫さん」

紅麗と藍姫は実況解説をする準備（マイクを持って）をしている。

「行けー醒」

「サラさん……。くっ……。代わってやれるものなら代わってやりたいが、私は応援しかできないなんて……」

紫苑は浪醒の応援、フレイルは己の未熟さを悔いていた。  
ガヤガヤ

いつの間にか観客が増えて、組織内での派閥ができた。とは言っても、元々四つに分かれていたが。

「サラさんが帰ってきたぞー！」

「醒さん！そんな奴、さつさと倒しちゃってください！」

「はあ……。後始末、きつと俺らだぜ……」

「こら！押すな！」

などなど。数人は本当に後始末をさせられたそうです。

「それでは始めたいと思います。司会は藍姫、解説は紅麗でお送りします」

ワーー

「試合は三十分一本勝負。有効打が決まれば終了！武器・攻撃何でもあり！もちろん非殺傷設定です。それでは……。……はじめ！」

ドーン！

と銅鑼の重い音が響いた。

開始早々、お互いに騎士甲冑になり、浪醒はロッド、サラは剣を構えている。いや、浪醒は構えというよりか自然体に近い。

先に仕掛けたのはサラだ。近づき横一閃。しかし浪醒の方が早く、少し体をそらしてかわし、ロッドで突き。

サラは軽くないしてから下がって次に備える。

しかしその隙さえ作らせないので、接近してロッドで突く。的確に、それでいてギリギリ視覚できるくらいのもので攻撃をする。連載に何とかついていくサラであったが、さすがに浪醒の猛攻から逃れる

ために攻撃の薄い左側へ飛んだ。それは罠であったが。サラが着地しようとしたが一步手前でバインドに捕まった。

「これで……………終いだ！」

腹にロッドが当たって吹っ飛ぶ。有効打であった。しかし、サラはまだあきらめていなかった。

「（ここからなら……………決める！）」

魔力砲を放とうとした。そのとき、その場には似つかわしい音楽が流れた。

「この曲は……………！！！」

フレイルは音の発生源に気づき、

「すまん、サラ……………」

紫苑は止めれなかったことをサラに謝った。

「……………誰だ？紅麗さんを怒らせた人は……………」

応援していた人達も気づいてきた。

「総員、後ろに下がれ！」

演奏している人物、紅麗は古い中国系の音楽を奏でていた。

「蒼遙姫、後どれくらい？」

>もつすぐです<

持っていた楽器、破滅の音色『蒼遙姫』は中国の楽器、二胡の形をしたデバイスである。

「勝負決まったんだから……………」

音楽が紡がれ、魔力が結合していく。

「負けを認めろー！」

砲撃が発射。見事に撃ち落とされた。

ちなみに、この組織の幹部にサラは入っていたりする。

「で、肝心のエターナルがないってどういうことー！」  
紅麗のキレる声が響いた。

「ごめんごめん。管理者ごとおいてきた」

「そうじゃなくて……。何でおいてきたのよ……」

「だってさつさと帰って来いって……」

何も言えなくなった紅麗。自分の言った内容ではなくサラの頭の悪さにだ。

「……藍姫、何か言ってるよ」

「紅麗……」

紅麗は壁に手をやってぶつぶつぶやき、藍姫はそれを慰める。

「ならよ。今度は捕まえれば？」

ピタッ

浪醒の一言で三人の動きが止まった。

「そういえば……（助かったー）」

「確かに……（浪醒にしてはナイスアイデア!）」

「（ちつ。……サラを黙らせるチャンスが……）」

それぞれいろいろ（約一名危険）なことを思いながら、その日は過ぎていった。

ミッドチルダの一角にある会社 『FBWM』。  
その地下での出来事であった。

番外く特徴は具体的にわかりやすくく（前書き）

キャラ説明になります

番外く特徴は具体的にわかりやすく

どうも来栖です

「アリス（独）です」

今回はEternalオリキャラの特徴がわかりにくい、と友人に言われたので、具体的、かつわかりやすくを心がけて説明していきます

「おー！」

ちなみにアリス（独）の（独）は、独立した人格の独です

最初はサラです

「順当ですね」

特徴は…

サラ・トライデント

腰くらいまでの白髪ストレート

目は空色

服装は基本的に灰色のシャツとジーパン

騎士甲冑は藍色のシャツに青のズボン

スリーサイズは黒く塗りつぶされている

魔力光は赤

「次は龍乾だね」

サラとは昔からの知り合いみたいだがどのような関係なのか！

「…気になる…」

太刀形龍乾

薄茶色のショートカット（はやてより少し薄い色）

目はエメラルドグリーン

服装はおしゃれよりも機動性能重視（ジャージや体操服など）  
騎士甲冑は薄い水色の半袖シャツに赤のスカート  
スリーサイズは修正テープで消されている

「次は？」

あとはFBWMのメンバーだけだけど…

「どうしたの？」

……面倒

「は？」

いいじゃん、紫苑だけで

「やられるよ」

……わかった

「紫苑は前に出したから……浪醒は？」

ヒゲ？

「マ オじゃないから」

浪醒

深い緑色の髪

目は髪と同じ色

無精ひげを生やしている（剃れば紫苑並の美貌でモテる。が本人はそれが嫌なため生やしている）

服装は緑の上着とアイボリーのズボンが多い

騎士甲冑は黄緑色のシャツとアイボリーに緑のラインが入ったズボン

続いて！

「フレイルです」

フレイル・アルマーク

紫色の髪

目は茶色

服装はスーツ（白・黒）  
バリアジャケットは赤いシャツに黒いジャケット、黒いズボン  
基本丁寧口調のフェミニスト

「あとは紅麗さんと藍姫さんです」

紅麗

髪は黒のストレート

目は黒

服装は赤い服が多い

バリアジャケットは1stは赤いチャイナ服、2ndは赤いドレス  
胸にコンプレックス  
スリーサイズは不明

藍姫

髪・目は紅麗と同じ

服装は青い服が多い

騎士甲冑は1stは青いシャツに白い半ズボン、2ndは黒いボデ  
イスーツ

紅麗と違い、胸はなのはくらいある

スリーサイズは空白

なお、紅麗と藍姫はそっくりさんです

「双子、プロジェクトFなどは関係ありません。親も違います」

こんな感じになっています

「よくここまで考えたね……」

ただ、龍乾の技のアイデアが出てこない……

「それは……」

「ファイト」

肩に手をやってそれを言うか！

「まあまあ」

わかった。スターライトブレイカーで済むかわからないけど…

「なぜ！」

全力！全開！

「サラを召還！」

ピカー

「あれ？さつきまで違つところにいたのに…」

スターライト！

「シールド！」

「へ？」

ブレイカー！

「ぐはっ！」

……

「……助かった」

平和は犠牲のうちにあるのだね…

「……か……勝手に……盾に……する……な」

バタ

「そう言えば」

なになに？

「サラの剣二本って干將と莫夜だよな？」

そうだよ

「紫苑の剣も干將と莫夜なんだよね？白と黒だから」

そうだよ

「違いは？」

サラは F t e s t y n i g h t で士郎が使う夫婦剣（少し曲がっている）で、紫苑はまっすぐで鞘に装飾がしてあります

「へ…」

この説明だとわかりにくいかもしれませんが、許してください！

## 第九話　くのろし

アリサ達がアースラメンバーに保護されて一週間たったある日。

「こんにちはー。郵便です」

ハラオウン邸に一つの小包が届いた。

届け先：フェイト・T・ハラオウン

差出人：サラ・トライデント

運送：FBWM

フェイトは帰宅後、リンディから教えてもらい、箱をあけた。

中には黒い箱と手紙が入っていた。手紙には、

『この黒い箱には通信機があります。』

箱はアリサ、すずか、龍乾、高町なのは、八神はやての五名同席の下であけてください。

逆探知はやるだけ無駄なのでしないでください。

サラ・トライデント』

フェイトは急いで五人を呼び、箱を開けた。目の前に3D映像が流れた。

《お久しぶりです》

「あなたは相変わらずね……」

「少しはしっかりしてほしい……」

《まあまあそんな堅いこと言わないで、アリサ、龍乾》

「ふん！」

「あははは……」

そっぽを向くアリサと龍乾。それを空笑いしていたのはフェイトである。

「気を取り直して、サラさんでいいですか？」  
なのはが話を始めた。

《どうぞ》

「あなたの目的は？」

《うーん…。悪いけど答えられない》

「そう…ですか…」

多少は予想していたのかあまりがっかりはしていない。

《まあ今回はエターナルの管理者、アリサとすずかをうちのアジトに連れて行くつてのが目的だけどね》

笑いながらさらりと（？）目的を言った。

「さらりと目的言うてるやないかい！」

「はやて…落ち着こ、ね？」

さすが関西人のはやてが突っ込んだ。フェイトがそれをなだめる。

「でも、私達がアリサちゃん達を守ります！」

《んなことは百も承知！だから…》

なのは達の足下にミッド式の魔法陣が現れた。

《強制的に》

驚いている五人は、それぞれ違う場所にとばされた。

「きゃー！」

なのははジャングルの中にとばされた。

「ようこそ、高町なのはさん」

声の主、フレイルが声をかけるとなのはは振り向き、

「誰ですか！私をどうする気ですか！」

レイジングハートをフレイルに向けながら言った。

「まあそうカリカリせずに。私はフレイル。フレイル・アルマークといえます。別に私はあなたをどうこうするわけではありませんので心配なく。好きになさってかまいませんよ」

「なにもしない？じゃあどうして！」

「私は女性を傷つけない、言わばフェミニストです。それに後方支援が主な仕事ですから、一対一は自分には向きません。対して他の方は一対一をどちらかと言えば得意にしている方達なので、同じ後衛同士、仲良くしようじゃないですか」

「はあ……」

笑みを浮かべたまま言うフレイルに困惑するなのはであった。

フェイトはシグナムと戦った砂漠に降り立った。

「ようこそ、フェイト・T・ハラオウンさん」

ここには紫苑がいた。

「あなたのことは噂で耳にしています。『金色の閃光』…実にあなたらしい名だ。ここで一勝負していただけますか？」

フェイトは紫苑の方を向き、

「紫苑：さんでよろしかったでしょうか？」

「はい」

「断つたら……」

「無理矢理にでもさせます」…わかりました「フェイトはバルディツシユを構え、

「『金色の閃光』フェイト・T・ハラオウン『閃光の戦斧』バルディツシユ・アサルト！」

「『小旋風』紫苑『夫婦剣』干将・莫夜！」

「『いきます！／参る！』」

はやては雪以外何もない世界にいた。

「お一つ歌を奏でますが、どうしますか？」

女性、藍姫が言った。

「どないな演奏か教えてもらいたいなあ」

誰もいない、ましてや町でもないところにいる藍姫を怪しみつつ、振り向きながら言った。

「タイトルは……そうですねー…」

『夜天の終わり』

ですね」

藍姫は振り返りざまに剣を抜いた。

「！！！！」

すんでのところでシュベロトクロイツで防いだ。

「『惑いの隠れ剣』藍姫『流離の小太刀』螢！夜天の王に一勝負申し込みます！！」

「（うちの苦手な接近戦タイプや。誰か助けてーな…）」  
はやての思いはどこに届くのか…。

龍乾は荒野にいた。

「いったいここは……」

「戦うのにふさわしい場所、じゃねーの？」

龍乾が振り向くと、髭面の怪しい男性、浪醒がいた。

「あなたは？」

「俺？俺は浪醒って言うんだ。あんたの足止め役をすることになっている」

「なぜ？」

思い浮かんだ疑問を投げかける。

「理由ならサラとか他の奴らに聞け。俺はそこまでお人好しじゃないぜ」

互いにデバイスを構えて、

「『神の射手』 太刀形龍乾 『神弓』 ハーメルン！」

「『小棍王』 浪醒 『神鉄』 崔里！」

「『押して参る！！』 / いざ！！」

第十話くそれぞれの戦いくフェイト編（前書き）

戦闘シーンは苦手です

## 第十話くそれぞれの戦いくフェイト編

「バルディッシュ！」

>ハーケンフォーム<

フェイトはハーケン、

「行きますよ、干将、莫夜！」

>OKいつでもどうぞ<

紫苑は双剣を構えた。

砂漠に一陣の風が吹き、

それが合図になった。

>フォトンランサー<

「フォトンランサー！……ファイア！」

フォトンランサーが紫苑に襲いかかる。が、

「ハアアア！！」

それを斬撃で相殺する。

「ハーケンセイバー！」

ハーケンを飛ばし、紫苑に向かって放つ。これは飛んで回避をする。だが、それをフェイトは予想していたのだろう。

>ソニックムーブ<

「！？」

回避した先でフェイトがハーケンを振りかぶった状態でした。

「ハアアア！！」

回避不可能の状態。しかしなぜか紫苑は笑みを浮かべていた。

「なかなかの速さ。ですが……」

ガキッ

と紫苑の蹴りがバルディッシュを押しさえつけた。

この動きはフェイトも予想外らしく、動きが止まる。

「まだまだですね!」

蹴り押されて、距離を離される。体勢を立て直したフェイトだったが、紫苑は近づき、攻撃をくり出す。

「ハアアア!」

「くっ…」

左の剣で上段。

「ハア!」

勢いを利用して右の剣で横になぎ払う。だが

ガキッ

とフェイトはバルディッシュで受け止めた。

「止めるなんてなかなか。ですが」

「…?」

「戦いの最中に動きを止めるのは自殺行為ですよ!」

左の剣、莫夜を逆手に構えて柄で鳩尾を突いた。

「かはっ…」

動きを止めたところで蹴りをくり出し、砂漠の砂に叩きつけられる。

「本気を出してください。金色の閃光」。私は本気のあなたと戦いたい

紫苑の声が響いた。そのとき、

>ジエツトザンバー<

「…!」

金色の魔力刃が紫苑めがけて飛び出した。バルディッシュのフルドライブ、ザンバーフォームである。

紙一重でかわしたが周りに帯びている雷がかする。

「魔力変換資質は雷ですか…。何となくは予想していましたが、厄介ですね」

「余裕なのはいいですが、あまり甘く見ない方がいいですよ」

「私は決してあなたを過小評価していたわけではありません。ですが…まだ私には勝てませんよ」

干将と莫夜、バルディッシュが再び構えられた。

「ハアアア！」

>ソニックドライブ<

高速移動により背後に回ったフェイトはザンバーで横にないだ。しかし、

「この程度では…まだ軽い！」

「なっ…！」

回避からコンマ数秒で攻撃を仕掛けた。フェイトはザンバーを振り切った状態。技後硬直により、防御はおろか、回避すらままならない状態である。しかし、

>ブリッツラッシュ<

身体の動きを強化して、ぎりぎり回避した。前髪が数本切られた。

「あそこで避けることができるなんて驚きです」

決めるつもりだったんですが…、と紫苑は呟いた。

「はあ…はあ…まだ…終われ…ない」

息が切れかけではあるが、フェイトは答えた。

「（このままじゃ勝てない…。真・ソニックフォーム…使わずには無理。だけど…）」

「まだ全力ではなさそうですね…。しかし、それでは…」

その瞬間、紫苑は消えた。

「私には勝てませんよ」

「…！」

フェイトの背後に移動したのだ。

「ハア！」

双剣の刃がフェイトに向かっていった。

第十話くそれぞれの戦いくはやて編(前書き)

遅くなりましたー

はやて対藍姫です

## 第十話くそれぞれの戦いくはやて編

はやてはシュベルトクロイツを構えた。

「リイン！」

「はいです！」

「ユニゾン・イン！」

白い光にはやては包まれた。光が収まると、髪の色が薄くなり、目の色が空色になった。

対する藍姫は小太刀『螢』で素振りをしている。余裕である。

「準備はいいかしら？」

「ええで！」

藍姫も螢を構えた。

白い雪の中…

はやての白い魔力光と

藍姫の青い魔力光が

白い世界に輝いていた

最初に動いたのは藍姫だ。

接近して小太刀を振るおうとする。

「ハアアア！」

しかしはやても近づけまいと、

「刃を持って、血を染めよ。穿て、ブラッディダガー！」

ブラッディダガーを四本放つ。

藍姫はそれを避けたり、小太刀で落としたりして四本すべてを回避する。そして再び接近しようとするが、はやてに今度は八本のブラッディダガーを放ち、接近させない。

ベルカ式のメインである接近戦を主とする藍姫と、同じベルカでも遠距離砲撃が主のはやては、どちらも戦いにおいて優位に立ちたいのだが、間合いが違う分、なかなかうまくいかない。

現在は中距離のためどっちつかずな状態が続く、なかなか勝負に進展がない。

>フォトンランサー・ファランクスシフト<

「ファイア！」

闇の書事件の際、フェイトは蒐集されている。つまり、はやてはフェイトの使用する魔法も使えることになる。

藍姫に五十もの魔力弾が向かう。

「くっ！」

弾の多さに藍姫は回避しようとした。しかし、

「させへんよ、ライン！」

>はいです！凍てつく足枷！フリーレンフェッセルン！<

藍姫の進行方向に設置型凍結魔法であるフリーレンフェッセルンを発動。藍姫もすぐに気がついたのか上空に回避しようとする進路を変えたが、左足が捕まった。

「ちっ！」

そこに追い打ちをかけるかのようにフォトンランサーが迫っていった。

ドーン！

と爆発音が響いた。

「よっしゃー！うまくいったな！」

>はいです<

はやてとリインは喜んでいる。しかし、煙がはれるとその笑みも消えてしまった。

「……」

無傷で立っている藍姫がそこにいた。足には氷が少し残っているものの無傷。小太刀に関しては刃がボロボロで、どうやら無理やり斬っていったのだろう。

「螢、セカンド」

> Yes! <

小太刀が二つに分かれ、小さな両刃の剣二本になった。形は刃が途中から大きく曲がった曲剣である。

それと同時に青いシャツと白い半ズボンの服装は、黒いボディスーツ（Fateのライダーに似ている）に変化した。

「螢、双牙」

小さく藍姫は言った。

刀を二本、上段に構える。カートリッジが二個排出される。

今現在の藍姫とはやての距離は五百メートル。理論上ははやてが有利である。だが、

「流離、絶空！」

藍姫は振り下ろした。しかし、何も起こらない。

キンツと鞘に刀を納める。

するとはやてのシュベルトクロイツが斬られていた。突然のことにはやては驚いた。

「杖のない魔導師は人形と同じ…。ふふふ…。逃げれるなら逃げなさい……」

藍姫の声が響いた。

しかし忘れていた。はやてのデバイスがまだあることに。

「リイン！」

> はいです！凍てつく足枷！フリーレンフェッセルン！<

はやてが使うもう一つのデバイス、夜天の魔導書。そして管制人格にしてユニゾンデバイス、リインフォースツヴァイである。

もう一度、凍てつく足枷を発動して、足止めにかかる。しかし、

「それはもう無駄よ。螢！」

>クラツシュ！<

氷を砕く。地面に亀裂が走る。

「ノってきたわね、螢……」

>当然！暴れていくわよー！<

「（毎度のことながら、カートリッジでここまで変わるかなあ……）  
デバイスの性格の変化……。今の藍姫が抱える数少ない悩みである。

>逝くわよ！<

「漢字違うわよー……」

はあ、とため息をこぼした。

こんなことをしている間、はやてが空に上がり、詠唱を終えようと  
していた。

「遠き地にて、闇に沈め……。ディアボリックエミッション！」

巨大な闇の球体が撃ち出された。

藍姫はすぐに移動を始めたが、二秒もしないうちに地面に着弾。範  
囲を広げていく。

「ちっ！（飛んでいるとはいえ、抜け出せない……。じゃあ……）螢！」

>よっしゃー！カートリッジロード！<

ガシャンガシャンと四つ排夾。

「ブラストル……ソニック！」

>レディ……ゴー！<

右足の部分に小さく足場を展開。そして足にはカートリッジの魔力  
を集中させた。足場を踏み、力を込める。押し出す瞬間、足の魔力  
を放って、フェイトの使うソニックムーブよりも速く飛び出した。  
ディアボリックエミッションの範囲から逃れて、今度は左足に魔力  
を溜める。魔法陣を広げ、

「ブラストルソニック！」

突撃。はやてとの距離は一キロを超えている。

しかし、藍姫はその距離を二十秒で縮めることができる。

十八…

十九…

はやてに藍姫が衝突した。

第十話くそれぞれの戦いくはやて編(後書き)

次回は龍乾対浪醒になります

第十話くそれぞれの戦いく龍乾編

龍乾は弓、浪醒はロッドを構えた状態で動かない。荒野に二人は立っている。

一陣の風が吹いた。

それを合図に龍乾が矢をつがえる。

風がやみ

矢が放たれた。

矢はまっすぐ浪醒にむかつていく。さして驚くことでもないのか、浪醒はロッドを一振りして矢を落とす。

「五月雨！」

今度は三本、矢が放たれる。

「ヒュ」。聞いていたとおり、矢が増えるな」

サラから聞いているのか、簡単に落としていく。ロッドは斬るではなく叩いて攻撃するものである。百足を使うのも手ではあるが、百パーセント折れるわけではない。ここは…。

そう考えた龍乾は弓を構えて、

「極楽鳥！」

>シューティング<

矢に魔力が付加され、鳥を形作る。撃ち出すと龍乾に衝撃がくる。

「（さすがに極楽鳥は強すぎるか…。これじゃあれを出せるかどうか…）」

一方の浪醒。この矢が今までと違うことを感じたようだ。先ほどまで余裕だった顔から表情が消え、真剣な目をしている。

放たれた矢を浪醒は避けた。今までは矢を落としていたが、避けた。矢はそのまま進み、約二百メートル後ろの岩に激突。

岩が割れた。

「（ハンパない威力…。サラからはひびが入るくらいの威力って聞いていたが段違いだぞ、こりゃ…）」

その威力に驚きを隠せない。が、それも一瞬で、とても楽しそうな、例えるなら見たことのない玩具に初めて触れる子どものような笑みを浮かべた。

逆に龍乾はそんな浪醒を見て、寒気がした。

「（極楽鳥を見て怖がらず、逆に楽しそうにしているなんてどんな神経してるの!?!）」  
と思っていた。

浪醒が龍乾に近づいた。

龍乾が矢を放つが、ぎりぎりのところで回避される。

残り数メートルとなったそのとき、浪醒はロッドを地面に突き立てた。

「大地激震！」

その言葉と同時に地面から石の槍が突き出てきた。

「うわっ!!！」

予測不能な槍は浪醒の周り三百メートルに広がった。

このとき、龍乾はあえて浪醒に近づいた。発生源に対しては攻撃ができないと考えたからだ。

「ハーメルン！モードソード！」

>ソードフォーム<

弓は二つに分かれ、トンファーになった。

「せい！」

攻撃が浪醒に振るわれる。しかし、

「あめーな」

「なっ…!!！」

ロッドではなく素手で止められた。

「俺がロッドを使う理由を教えてやる」

「……なぜ？」

教えて得するわけではない。しかし教えようとする浪醒に疑問を感じる。

「理由なんてねーが、おまえとの差を見せつけるのにちょうどいいかなあ、と」

「（……ムカつく。どこに差があるのよ……）」

「俺がロッドを使う理由。それは……」

体が浮くのを龍乾は感じた。

「…手加減するためだ」

パンッ

と音が響いた。

「ぐっ……」

浪醒は龍乾の顔にストレートが決まった。回避不可、防御不可のスピードで。一発しか当たっていないのに倍の威力が全身に響く。

「まだまだ序の序程度の攻撃だが、五割は出した。これで倒れたらそこまで。持ちこたえたら……」

浪醒は後ろを向き、

「……死期が早まるだけだ」

ドスの利いた声が響き、龍乾は倒れた。

第十話くそれぞれの戦いく龍乾編（後書き）

今回は番外を挟みます。感想・評価をよろしくお願いします

番外く戦闘・技についてく(前書き)

番外でくす

## 番外く戦闘・技についてく

番外編、スタート！

ドンドン！パフパフ

さあ始まりました。来栖です。そして！

「アシスタントのアリスです。よろしく」

ではではまず戦闘についてく

「はい。フェイト対紫苑、はやて対藍姫、龍乾対浪醒です」

三つに分けたけど、苦労したなあ…

「というか龍乾気絶ですか…。後の二人は不明ですが…」

なんか流れで気絶させちゃったよ、てへ

「あんたはそういうことするな！」

怒らない怒らない。なのは達の補足説明く

「……話そらした…」

一、なのははエクシード、フェイトは真・ソニックフォームが使えます

二、A・sとStSの間に起こったことなので、大体はStSの技が使えます

三、マンガからの魔法もあります

以上です

「真・ソニックってことはライオットザンバーも使えるね」

ただなのはは、ブラスターシステムリミット2までしかできません

「でも強いよ…。あの白い魔王のは…」

ここでゆっくりしていけばいいよ（本編でないし…）

「不愉快なことを言われた気が…」  
きっきのせいでは？（読心術！？）  
「さて、今回出てきた技・魔法は…」

パラパラ…

「えっと…」

フォトンランサー、凍てつく足枷、ディアボリックエミッション、  
流離絶空、プラスチックソニック、極楽鳥、大地激震…。計七個です  
ね」

原作のは最初の三つ、フォトンランサーと凍てつく足枷、ディアボ  
リックエミッションで後はオリジナルです

「でも聞いたこと無い人いるかもよ…」

だよね。友達はS t sから見始めたもんね…

「まあ気を取り直して、説明どうぞ！」

はい。まずはフォトンランサーです

フォトンランサー

威力：B

射程：B

弾速：A+

アニメ無印の第十一話『思い出は時の彼方なの』Aパートにてなの  
はに撃った魔法。威力はプラズマランサーよりツーランクダウンし  
ている。射程、弾速は変わらない。ファランクスシフトの他にジエ  
ノサイドシフトがある。（ジェノサイドシフトの場合は威力がワン  
ランクアップする）無印時のフェイトの一番強い魔法。

大ざっぱに言えばこんな感じですよ

「四年の月日はスゴいね…」

ちようどそのころだったね…

「次々説明しよー！」  
続いては凍てつく足枷、フリーレンフェッセルン！

凍てつく足枷

発生速度：C

拘束力：B

リインが所持する蒼天の書にある魔法。マンガでは『魔法少女リリカルなのはStrikerS THE COMICS 1』でガジエイト捕獲時に、アニメではStSの第十二話『ナンバーズ』Aパートでアギトとルーテシアを捕獲時（失敗）に発動。分類は設置型凍結魔法。足止めによく使われる。

それからディアボリックエミッション！

ディアボリックエミッション

威力：A

射程：S

発射速度：B

広範囲に放つ空間攻撃魔法。アニメStSの第十二話『ナンバーズ』のBパートにてクアットロとディエチに対してはやてが放った魔法。地面に被弾後、範囲を広げながら敵を飲み込む。

「後はオリジナルだね〜」

流離絶空

威力：S

速度：A -

範囲：半径四百メートル

剣の軌跡を相手にぶつける攻撃。間違っても衝撃波、カマイタチのたぐいとは違う。剣の動きと遅れて攻撃が当たる仕組み。

ブラストルソニック

速度：A A

足に魔力を溜め、蹴り出すときに魔力を爆発させる仕組み。利点は速く移動できること。

一キ口を二十秒で突き抜ける。

難点は小回りが利かないことと発動後、攻撃にすぐに切り替えられないこと。速度に特化しすぎたため直線での加速はフェイトを抜くものの、空気抵抗やその他諸々により遅くなっていく。発動後は停止の反動で三から五秒停止する。これを使った唯一の攻撃は、バリアを前に張って特攻よろしく突撃するしかない。

「剣を外側に向けた状態でブラストルソニックはできないの？」

できないわけではないが空気抵抗とかでスピードは落ちるし、それが何とかなっても風に押されて邪魔になってしまうよ

「へー」

極楽鳥

威力：S +

射程：不明

発射速度：E X

矢に魔力をまとわせ、羽を開いた鳥の形を形成し、放つ技。シグナムのシュトルムファルケンに似た技。くちばし部分が矢で、あとは魔力刃で形成されている。百発百中弓であるハーメルンを使っても外れることがある。

五月雨

威力：B

射程：A A

発射速度：S S

矢を複数放つ技。追加効果でホーミングが付いている。一回の射で最大五本放てる。

百足

威力：B

射程：A A

発射速度：S S

斬られると再生する矢を放つ技。真つ二つに分かれないと再生しない。追加効果はホーミング。

龍乾の技ですね

「ホーミングはズルいかな...」

でも狙いが自分だと知られるから回避できるよ

「撃ち落とせばただけだね...」

大地激震

威力：A A A

速度：B

範囲：半径三百メートル

地面に衝撃を与えて石の槍を作る魔法。地面を揺らして陸を止め、石の槍で空にも攻撃する。

浪醒の技ですね

「スゴいパワー...なのかな?」

よくわからないけど...そうみたいだね...

「そういえば、なのはや私の中の二人は何してるの?」

なのははフレイルとお茶してくつろいでいるよ

「……アリサとすずかは？」  
捕まってるここでの生活指導を受けてるよ〜

〜回想〜

「静かですね〜」

「そうですね〜」

お茶を飲みながらなのはとフレイルは言った。

「お菓子がありますよ、食べます？」

ふと思いついたようにフレイルが言った。

「はい！〜」

満面の笑みでなのはが頷いた。

「あなた達はここで自由に生活していいから。わかった？」

紅麗は説明……と言うより決定事項を言った。

「へ？」

「はい？」

「じゃ、そうゆうことだから、サラにわからないこと聞いてね〜」

じゃね〜、と言ってその場をダッシュで離れた。

「「ちよつと待てー！〜」」

アリサとサラの声が響いた。

〜回想終了〜

みたいな感じ？

「何となくですが、差がありますね……」  
「そう？」  
「そうですね……」

感想を待ってまゝ

番外く戦闘・技についてく(後書き)

感想よろしくお願いします

第十一話 援軍 其の一 (前書き)

フェイトの危機に登場！  
カシイかもです

……なんか文がオ

## 第十一話 援軍 その一

ガキンツ

と紫苑の剣が止まった。

フェイトの前には白を主にした騎士甲冑、ポニーテールにしているピンクの髪。炎の魔剣で紫苑の双剣の刃を止めている。

「すまんテストロッサ。遅くなった」

「……シグナム」

ヴォルケンリッターの剣の騎士、シグナムである。

「エイミイが捜してみたらでんでバラバラなところに転移させられていたな。我々が救援を、とリンディ提督からの指示だ」

「そう……。母さんが」

「そう気にするな。…ただ」

「？何ですか？」

「アリサとすずかの二人だけ反応がない。おそらく拉致された可能性が高い」

「……！」

転移前のサラの声が響く。エターナルの管理者、アリサとすずかをうちのアジトに連れて行く…。その一言を。

「完了したならすぐに待避したいのですが……」

ハツとフェイトは思考を切り替えた。

「（今は目の前の敵に集中しよう……）」

「（テストロッサは大丈夫だろう……。しかし……）」  
対峙する紫苑に目を向ける。

「（あの者、できるな）」

「逃がしてくれるわけではなさそうですね……」

シグナムはレヴァンティンを構えなおして、

「テストロツサは下がっている。私があいつと戦う。なのはには誰も助けには行っていないから、行ってやれ」

「!!!」

フェイトは驚きと心配の入り混じった顔をしていた。が、すぐに頷いてエイミィの下に向かった。

「あなた一人で大丈夫ですか？」

「だてに長年騎士をしてはいないからな…」  
レヴァンティンを構えなおして、

「烈火の将、シグナムだ」

「小旋風、紫苑です」

紫の魔法陣を展開して

カートリッジを排出し

剣が抜かれた。

「ふっ！」

「はっ！」

剣が当たり、衝撃で辺りに風が起る。

「カートリッジロード！」

> エクスプロージョン<

鞘を取り出しレヴァンティンを納める。

「紫電……一閃！」

紫の炎をまとったレヴァンティンで下から斬った。

「これなら……。干将！莫夜！」

>> 共鳴<<

双剣が互いに鳴り出した。その振動は炎を構築する魔力を打ち消していく。

「……………!?!」

威力が少し下がった一閃を放つことになった。少し離れて立ち止まる。

「貴様のそれは一体……………」

「レアスキル……………」というよりはこの剣の特性ですね。共鳴は様々な効果がありますがその一つに魔力結合のジャミングがあるんですよ」

「ふふ……………なるほどな」

鞘に納めてカートリッジをロード。

「では私も……………」

こちらも双剣を鞘に納めてカートリッジをロードした。

「飛龍……………」

「風王……………」

シグナムはレヴァンティンを連結刃にして後ろで回し、紫苑は右手を干將の柄に、左手を莫夜の柄にやり、抜ける体勢になっている。

「一閃!」

「双龍!」

炎をまとった連結刃がふるう一撃と、風をまとった双剣がふるう一撃が衝突する。

威力は同等。

衝撃が砂漠一帯を揺らす。

ガキン

お互いの得物がぶつかり、相殺される。

> シュベントフォーム<

レヴァンティンが連結刃から剣に戻った。

「私の風王双龍を相殺するとは……。ですが、まだ本気ではないの  
でしょう?」

「ふ……。気づいていたか。貴様のような強者に手加減していたこと  
をわびよう」

シグナムが軽く笑いながら言った。

「それにあなたは技を出し惜しんでいます。なぜですか?」

「そこまで気づいていたのか。この技は一对一の戦いには向かない  
技なのでな」

シグナムは少し驚かされた。隠し技はチャージに時間がかかるため、  
こういった単騎での戦いには向かない。だから使わない。

「なら、準備ができるまで、私はアクションを起こしません」

「…それはなぜだ?」

「あなたの実力を知りたいのと、……本気の攻撃を正面から対抗し  
たいからです」

「なるほどな。では…」

そう言っレヴァンティンを右手に、左手に魔力をためていく。さ  
らに魔力変換で炎を作っていく。

炎が圧縮されて一振りの剣になっていく。

「行くぞ！」

「いつでも！」

シグナムは左手に、紫苑は足に力を入れる。

「火龍……」

「一閃！」

炎の剣が紫苑に向かう。

それを受け止めようと双剣を構える紫苑。

双剣と炎の剣がぶつかった瞬間、

炎の剣が爆発した。

「!!!」

これはさすがに予想外だったらしく、回避が間に合わない。

一方のシグナムも、

「（まだ未完成なだけあって、調整が難しいな…）」  
完成しなかった自身の技を悔いていた。

実はこの火龍一閃、完成系はオーバースの技だが、調整の失敗で威力が下がっている。この炎熱に剣が耐えきれないでいるのも一つの要因である。

「（練習でも成功は一割未満であったからな…。そうそう成功する技ではないか…）」

結果としては失敗ではあるが不意打ちに使えた、とシグナムは思った。

「…ふつ。なかなかの一撃です。まさか剣を爆発させるとは…」

一方の紫苑は所々服が破れたり焦げたりしているが目立った怪我をしていない。

「そうでもないさ。まだまだアマいところがある」

「しかしこの威力はなかなかですね…。…ではこちらは連絡がきましたので、これにて失礼を」

足下にベルカ式の魔法陣が展開される。

「近いうちにまた戦うことがあると思います。そのときまで、しばしの休息を」

紫苑は転移してその場を離れた。

シグナムはその場で紫苑について考えていた。

「（奴の太刀筋…。なかなか見事ではあるが、どこかで…）」

その違和感に気づくのはそう遠くない未来だとどこかで感じていた。

第十一話 援軍 その一（後書き）

フェイトの助けにシグナム登場！

残り二人のところ

にも参上します

感想や評価をお願いします

## 第十一話 援軍 その二

はやてに藍姫がブラストルソニックで突撃した瞬間、はやての前に黄緑の楯と白の牙のような刃が斜めに展開された。

そしてはやての目の前には二人の人物が立っていた。

一人は黄緑を基調としたドレスのような騎士甲冑に金髪のシヨート。手にはそれぞれ指輪が二つしている。

もう一人は筋肉質の体に褐色の肌。白い髪に藍色の犬耳と尻尾の奇妙な格好をし、藍色の服に両腕には金属製の籠手を装備している。

湖の騎士シヤマルと盾の守護獣ザフィーラである。

先ほど二人が展開した楯と刃によって軌道がそらされ、地面につっこんでいく。

「遅くなりました、我が主」

「助けにきましたよ、はやてちゃん」

「シヤマル！ザフィーラ！」

突然の登場にははやては驚いた。だがそれを上回る驚きをシヤマルは言った。

「はやてちゃん、落ち着いて聞いてください。アリサちゃんとすずかちゃんが拉致されました」

「！！それ、ほんまか！？」

「ええ、エイミイが探査した結果二人の反応をキャッチできなくなっていました。おそらく拉致されたというのがリンディ提督の見解です」

「さよか…（あの二人が危険な目にあってる……。こんなところでやられるわけにはいかへん!）」  
友人二人の拉致。それははやての心を揺さぶるモノである、がそんなピンチを友達として助けたい。そうはやては固く誓った。

一方の藍姫。ブラストルソニックでの勢いを逸らされて地面に向かっていく。

「（まずいまずいまずい!? 直撃は避けないとー!?） 螢!」  
> やれやれ…、しょうがないですね…。シールド五枚展開<  
直線上にシールドが展開された。

パリーン

と一枚目が破壊された。

さらに二枚三枚とシールドを破壊する。それに従い、速度が落ちていき、四枚目を破壊し通常の飛行速度になった。

「螢、五枚もいらなかったよ」

> その加速の欠点、あるでしょうに…<

「へ?」

> 攻撃に切り替えるのに時間がかかる…。つまり、動きが鈍くなる<

「あ」

五枚目のシールドに当たり、雪の上に落ちた。

> たく…。油断大敵ですよ…<

「いったーい!」

そう言った後、はやて達の方を向いて、

「…あれ? 先まで一人だったよね? て言うか不利じゃない?」

> 先ほどのシールドの出所みたいです<

「ほっ……」

螢の説明に少しの期待を持つ。

「つまりはなかなかの実力者、てどこ?」

>データと照合してみたところ、男性は盾の守護獣ザフィーラ、女性  
は湖の騎士シャマルです。遊撃、足止め、広域魔法で攻めにくい  
ですよ…<

この言葉には考え、

「うーん…。攻めるだけ攻めてみるか」

>ですね…<

小太刀を構える。

お互いに武器を構えた。

先に動いたのはザフィーラである。

「うおおおお！」

拳を突き出す。

>プロテクション<

プロテクションに攻撃が止められる。

「咎人達に、滅びの光よ…！」

はやてが詠唱を始めるのと同時に、ミッド式の桜色の魔法陣、さら  
に同色の魔力が集まっていく。

「星よ集え…。すべてを撃ち抜く光となれ…！」

はやての幼なじみの一人が使う最強の攻撃。

「貫け、閃光…！」

チャージが終わりかけになり、

「ザフィーラ、防御を抜いてくれへん？」

「はい。主」

「シャマルはザフィーラが破壊した後にバインドで縛って」

「わかりました」

指示を出し、ことが終わるのを待つ。

「はああああ！」

ザフィーラの拳がプロテクションにひびを入れる。

「っ！！」

「うおおおお！」

パリン

プロテクションが割れた。

それと同時にシヤマルが黄緑のバインドで藍姫を縛り、

「スターライト…、ブレイカー！」

はやてが砲撃を放った。

直撃。

しかし、

「残念。時間切れみたいです」

ブレイカーが当たっているはずの藍姫の声が響く。攻撃を受けているのに不思議なほど響く声で。

「また会うことがあるので、それでは…」

声が消え、ブレイカーが収まると、そこには誰もいなかった。

第十一話 援軍 (前書き)

気絶した龍乾のところに一人近づいていく…

## 第十一話 援軍

気絶した龍乾を浪醒は捕まえようとしている。

「（なんでこんな小娘を…）」

出撃前…。

二人の人物に言われたこと…。

「龍乾は基本遠距離でバンバン矢を撃つから接近して行く方がいい。だけど、技の大半はホーミング付いてるから、打ち落としていくことと、二三個ホーミング付かない威力重視の技もあるから、気をつけて」

これはサラ。

「今回、サラの幼なじみを捕獲してきてくれない？例のシステムは完成したけど、少し不足しているモノがあるの」

これは紅麗。

全員には内緒よ、と釘を刺された。

その内容がどうであれ、浪醒はそれを守るだけである。

龍乾の服を掴み、連れて行こうとした瞬間。

赤い弾が浪醒めがけて撃ち出された。

「っ！！」

直感で飛ぶと、今までいたところを通り過ぎた弾は、鉄の球を魔力でコーティングされたものである。

撃ち出された方向には、赤いドレスでハンマーを持った少女がいた。

「龍乾から離れる、その男！」

鉄槌の騎士ヴィータである。

龍乾から少し離れたところに着地した浪醒だったが、ヴィータを見るなり、

「おいおい、どうしてこんなガキがここにいるんだ？」  
と言った。

ピクツと肩を揺らし、

「おいテメエ……。今何てつた？」

ヴィータが何かを押し殺すように言った。  
しかし、

「ガキが年上に物聞く態度か、それは？」

浪醒の坎に障ったらしい。

「あたしは……」

ガキじゃねー!!」

> エクスプロージョン<

ガチャコンとカートリッジがロード。

> ラケーテンフォーム<

さらにグラーファイゼンの形が変わり、ラケーテンフォームになった。

「ラケーテン……」

ジェット部から火が吹き出し、その場で回転するヴィータ。そして軌道を変えて浪醒にハンマーを向け、

「ハンマー!!」

勢い良く突撃していった。

それをバリアではね返そうとした浪醒だったが、勢いに乗ったヴィータを止めることができず、バリアが抜かれ、肌を掠った。

「俺に傷つけるたあ……、なかなかやるじゃねえか！さっきのはナシにして……」

「いつちよ派手に暴れるかー！」

そう言つて崔里を構え直した。

“早く帰ってきてくださいよ、浪醒”

するとフレイルから通信がきた。が、

“知らん！だいたい人が暴れようとしたところに連絡するな！気が散る！”

“え……。あつ……。ちよ”

途中で通信を切り、バリバリ戦闘体制の浪醒。

一方のヴィータも、

“ヴィータ、熱くなるな”

“るっせーシグナム！邪魔すんな！”

“ヴィー”

シグナムからの通信を勢いよく切り、浪醒に向かう。

「うおおおー！」

「はあああー！」

ガキッ

とお互いのデバイスが当たる音。さらに衝撃が風を生み出す。

「（このガキ…どこにこんな力があんだよ…）」

驚きと苛立ちが入り交じった思いでいた浪醒。そこへ、

>（データとの照合がとれました。夜天の書の守護騎士の一人、鉄槌の騎士です）<

崔里から通信がきた。

“サンキュー崔里。けどもう少し早くできなかったのか？”

> (二十代の無精ひげ生やしたバカが叩いたりするのに使うからだろ) <

“……すまん”

デバイスに怒られる二十三歳って……。

「(こいつ…強い)」

お互い、攻撃がなかなか入らない状態…。

「(だけど…)」 ヴィータは魔力でコーティングした弾を出し、

「アイゼン！」

> アイゼンズホイル <

グラーフアイゼンで勢いよく弾を叩く。

周りに強力な衝撃と赤い光が包む。

威力はないものの足止めに使われる技である。

それにより浪醒の動きが封じられ、動けなくなった。

「アイゼン！」

> ギガントフォーム <

アイゼンをギガントフォームに変え、浪醒に攻撃を当てる。

「ぶち抜けー！」

近くの岩に飛ばされ、それだけでは止まらずに、向きが変わり、違う岩に当たって止まった。

砂煙が周囲に広がる。

しかし、ヴィータは油断なくアイゼンを構える。

「(今の一撃…。当たった。当たったはずなのに、なんで手ごたえがねえ…)」

激突し、勢いも申し分ないくらいの一撃のはずなのに手ごたえがないのはおかしいことだ。

「いてて…」

浪醒が立ち上がる。実は先ほどの一撃を直感で軽く跳び、岩への激

突も崔里でとつさに方向を変えて、少しでもダメージを減らすようにしたためである。

「こいつは…ちよいとばかり…利いたぜ…。けどな…」  
「ふらつきながらも立ち上がり、

「オレだつて…、柔な鍛え方は…してねー！」

攻撃のためにふらつく足に鞭を打ち、走り出した。

「うおおおお！」

崔里を片手にヴィータに向かっていき、

「百花：碎滅！」

突きの連撃。

「（サラよりは強いが…、まだまだだ！）」

ヴィータも攻撃をよけながら、

「（くっ…！！ムチャクチャだ！！）」

速さだけならまだしも、威力も強いため、一撃当たるだけでも鈍くなる。

現に今も二三発くらっている。

「うおおおお！はあ！」

最後の―撃を当てようと、崔里を後ろに引き、全力で突きを放った。

「…！！」

ヴィータは目をつむった。

しかし、まったく衝撃がこない。目を開けてみると、鎖に手を縛られている浪醒と、その鎖を持つサラがいた。

「……サラ」

「迎えにきた。姫がご執心。後三分」

「言いたいこと言いやがって……、て姫がか！！」

サラはヴィータを助けに来たわけではなく、浪醒を連れ帰るために来たようだ。

「……また今度戦おうぜ。鉄槌の」

二人が転移した後、ヴィータが倒れた。

第十一話 援軍 (後書き)

何とか終わりました三連戦 書く方が疲れた… 次回はできるだけ早く書きたいです

第十二話 過去 (前書き)

PVが3万を超えました。今後もよろしくお願いします

多少百合っぽいシーン(?)があります

## 第十二話　過去

三人との戦闘の後…。

ヴィータと龍乾の所にははやてとシャマル、ザフィーラが、なのはの所には先に行っているフェイトとシグナムが向かった。

「ヴィータ！」

荒野に着いてはやてが最初に見たのは、倒れた鉄槌の騎士だった。

「シャマル！」

「はい！」

この中でただ一人、治療系の魔法が使えるシャマルは、二人をクルールビントでスキャンし、応急処置をした。

「龍乾さんは顔が腫れています、重傷ではないです。たぶん殴られたか何かで気絶したのだと…。ただ、ヴィータちゃんは…」

「大丈夫なんか？」

「…両腕を骨折と肋骨一本にひび、それ以外に目立った外傷はありません。ただ…」

「ヴィータがここまでやられるのだから、弱い者ではなかった、ということでしょう」

今まで黙っていたザフィーラが口を開いた。

「ヴィータは我等の中で最高の破壊力を持っています。相手の実力が上だった、と考えるのが妥当でしょう」

そのとき、ふと気がついたようにシャマルが、

「いったん戻りませんか？二人の治療や今後のことを相談しないといけませんし…」

「せやな」

ベルカ式の魔法陣を展開して、海鳴市に戻っていった。



「あ、待ってフェイトちゃん」  
フェイトは部屋に戻り、なのははそれについて行った。

その日の夜…。

ケガをした二人が目を覚まし、事件についての会議が始まった。

「ユーノからエターナルに関する情報を無限書庫から調べてもらった」

「エターナルはもともと、二つで一つだったみたいだけど、それを偶然見つけたアリサちゃん達が触れたときに分かれてしまった…。

そうだったよね？」

なのはの声に肯定するクロノ。

「ああ…。実際は二つで一つでもあり、デバイスとしては珍しいタイプであつたらしい」

「珍しいタイプ？」

「…ユニゾンデバイス。そやろ、クロノ君？」

「その通りだ、はやて。厳密には擬似リンカーコアを持ったユニゾンデバイスだ」

「擬似リンカーコアって？」

『適合者の魔力資質が低くてもいいように、リンカーコアに似せた偽物を組み込んでおいて、適合者が今回のアリサやすずかみたいな魔法と親しみのない人でも使えるようにした機能のことだよ。これを使うと、ユニゾンデバイスとしての機能がなくなるけど、デバイスとしての機能を使うことができる…』

「タイミングよくできてきたのはいいが、ユーノ。別に今じゃなくてもいい」

元フェレットもどきにぶつぶつ言う執務官。

「さらに言えば、このタイプのデバイスは後三つ…、合計四つになる」

『調べた文献が古くて所々読めないけど、デバイスの名称は、ルイン、デニス、フィーナ、マリヤの四つ…。マリヤはエターナルの名称みたい』

「ユニゾンデバイス自体の効果がわからへんと、こっちもどう動いていいかわからんなあ…」

名称が判明しただけで、まだ何もわからない現状…。

「あの…」

「?どないした、シヤマル?」

「その、疑似リンカーコアがなくなったら、どうなるんですか…?」

「……」

リンカーコアの消滅…。それはすなわち死である。

『疑似リンカーコア自体は後から埋め込まれた物だから…、多分だけど、魔力資質がなくなるだけだと思っ』

「しかし、予測の段階だ。確証があるわけではない」

「そう…ですか…」

確証はないが、最悪の事態にはならないようだ。

「次にこの四人についてだ」

モニターに紫苑達の顔が映し出された。

「フェイト、シグナム、はやて、龍乾、ヴィータ。戦ってみて、どうだった?」

「私は途中でやられるところだったから…。シグナム、あなたは?」

「なかなかの騎士だ。迷いのない、澄んだ太刀筋だった…。だが…」

「?不審なことでもあったのか?」

「いえ…なんでも…。(…あの太刀筋をどこかで見ただ気がしたのだが…)」

言葉を濁すシグナム。若干不思議がりながらもクロノははやての方を向いた。

「?ならいいが…。はやては?」

「ウチのほうは戦い辛い相手やったな。近距離戦は苦手や…」

「あの加速…おそらく瞬間的な速さはフェイトを抜きます」

「それや。だけど…」

モニターにプラスチックノック発動時の様子が流れる。

「直線的や。少しでもズレれば隙だらけや」

「せやけど、あの斬撃はわからんかった…。なんかタネがあったはずやけど…」

「それは後々考えていこう、はやてちゃん」

「そやね…」

その後、ケガが治りかけでギリギリのヴィータと龍乾から話を聞く。

「あたしらはすぐやられた感じだから、何とも言えねーが…」

「相当強いよ。素手なら無敵だと思う」

「素手なら…な…」

こう言つて二人は落胆した。かける言葉もないのでどうしようか迷っている、ふとなのはだけが何も無いことに違和感を感じた。

「ところでなのはは「聞くのはやめて、クロノ！」？…わかった（

何があつたんだ？）」

<sup>フェイト</sup>妹の声に頷くクロノは、気を取り直して、

「エイミィ。アリサとすずかの転移先、わかったか？」

「ごめん…まだわかんない。痕跡が残っているから最大でも一週間  
でわかるよ」

「そうか…。それじゃあ、各自、体を休めて次に備えてくれ」

解散、とクロノが言おうとしたそのとき、

「ちよつといいですか？」

龍乾が口を開いた。

「少し…聞いてもらいたいことが、あります」

「…なぜだ？」

「疑問に思っている人もいるんじゃないですか？私と…サラについて」

そう言われて、友人と敵対する理由が気になった。

F B W M 地下。

アリサとすすかの二人が食事をしていた。

何ら変わらない普通の風景。

全体さえ見なければ。

「浪醒…もう少し、作戦を守って！頭に来たら戦うだけって子供じやない…。だいたい…」

「……」

部屋の隅で姫（紅麗）に怒られている浪醒がいた。

「姫様、こんなゴキブリみたいなバカは放っておくべきですよ」

紫苑が口を挟む。

「…おい紫苑。オレにトドメを刺すつもりか？それとも助けるのか？」

「無論前者だ」

「…てめえ…口悪すぎ！」

「騒がないでね。もう三時間、説教延ばすわよ」

「すみません！」

この様子を見ていた藍姫は、

「だったら、体罰の方がよくない？」

「それは勘弁してー」

ニコニコ顔で言い、浪醒があわている。

「なんか楽しいわね」

「そうだね。ふふ…」

「?どうしたの、すずか?」

ふと微笑んでいるすずかに目を向けるアリサ。

「アリサちゃん、ご飯粒がついてるよ」

「え、どこ?」

「ここ」

と言って、アリサの唇の端に指を近づけ、ついていたご飯粒を食べた。

食べられた瞬間、アリサは動きが止まった。

「ん。取れたよ…?どうしたの、アリサちゃん?」

不思議なものを見るように、すずかは首を傾げた。

アリサの中で何かが壊れた。

「すずか!」

「!?!」

肩をつかまれて目を白黒するすずかと、真っ赤な顔で目が情けないくらいにタレているアリサ。

そして、アリサの顔がすずかの顔に近づき…。

「公衆の面前で何やる気よー!」

普段の立ち位置ではないサラが、手に竹刀を持ってアリサを叩いた。パーンと乾いた音が響いた。

「!?!」

目を白黒したアリサ。

「なんでここにいろの、サラさん?」

とびつきの笑顔をサラに向けているすずかが、サラはそれを見て震えが止まらなかった。

「な…なんでって…。こんなところでアリサが暴走したら困るし…。やるのなら部屋に戻ってでも…」

「それだと私がつまらないんだ…」

キョドったサラはしどろもどろに言って説得力に欠けるが、正論を言う。

「サラさん。だけどね……」

「す、すずか？」

明らかな怒気をサラに向けながらすすかが歩み寄る。

アリサに目を向けると、すすかの怒気に圧倒されて、動けないでいる。

助からない。そう思い、目をつむるサラ。

だが、なかなか衝撃がこない。薄目を開けると、

「ふふふ……」

薄笑いを浮かべている。

「秘密もしくは過去を言えば許すよ……？」

「（そりゃあもちろん）過去！」

「なら三！二！一！どうぞー！」

違う場所、違う世界……。

同じセリフを二人は言った。

「「八年前……」」

第十二話 過去（龍乾編）（前書き）

遅くなりましたが、過去話

龍乾視点

感想などをよろしくお願いします

## 第十二話 過去（龍乾編）

八年前：

私は地球からミッドに引越すことになった。

住み慣れた家や友達と離れるのは辛かったけど、まだ見ぬ新世界に、興奮していた。

「今日からみんなと一緒に勉強する事になった子を紹介するよ」  
担任は、明るく元気な人 シエラ・スーンという女性だった。

「えっと…はじめまして。太刀形龍乾です。よろしくお願ひします」  
慣れない丁寧語でなのか、口元が緩んでしまう。

「太刀形さんの席は、端の列の一番後ろ。トライデントさん、わからないこととか、教えてあげてね」

「はい！」

私は言われた席に向かい、隣の子が声をかけてきた。

「私、サラ・トライデントっていうの。よろしくね」

「よろしく、サラ」

これが私とサラの出会いだった。

それからすぐにクラスメートとも仲良くなり、サラとは親友になりました。

「はっ！ やっ！」

今は剣術の修行中。師匠と離れているから、自主練ではあるけれど、少しでも動けるように木刀で素振りをする。

「リニューケン！ 来たよー！」

声のした方を見ると、親友が少し離れたところから手を振っているのがわかる。

振り返してみると、嬉しそうにこっちに向かって来た。

「余所見しているとコケるよ〜」

案の定、足下の段差に引っかかり、コケてしまった。

「やれやれ…」

と、私はつぶやいて、親友の元へ向かった。

「いったー！」

「足元見ないからだよ」

立てる？と手を貸してサラを起こそうとする。が、

「だ、大丈夫だよ、これくらい…」

と顔を真っ赤にして断られた。なんで？

「それよりも、何して遊ぶの？」

「ん〜ゲーム！」

「…サラ、今までの成績、覚えてる？」

「全部私の勝ちでしょ？」

「逆よ。私が全勝でサラは全敗でしょ」

大丈夫か？さつき変なところでも打ったか？

「じゃあ…チャンバラ」

「男の子か、私たちは？」

「リューケンは男の子、私は女の子」

「…へ〜」

そういう風に思っていたのか…。こうなりゃ、師匠から教わったあの技で…。

「秘技！笑いのツボ！」

首筋に向かって親指を突き出す。

「い…あははははははははははははははは…なにす…はははは…龍  
け…ははははははははははははははは…」

三分は笑うらしいから放置しよう。

そんなこんなな日常を送っていき、二年後…。

私は年相応に恋をした。

初恋だった。

けど……。

「久しぶりだね、太刀形さん」

「お、お久しぶりです、先輩！」

学校の廊下。休み時間に来た先輩 ジェイ・ワンダー と私、サラの三人で話している。

「先輩、久しぶりに帰ってきてどうしたんですか？」

私とサラが何故彼を先輩と呼ぶのかと言えば、サラにとっては魔法の師であり、管理局で嘱託魔導師として働く小学五年生である。まあ、私にとっては初恋の人に当たるのだが…。

「別に…。仕事が一段落ついて、船艦の整備と重なったから休もう、と艦長が」

性格は真面目。容姿は上の中くらいとなかなかの好青年…というにはまだ早い、誰からも慕われる人物である。

ちなみに、艦長とは、艦船の一つ、バルトスという船で指示をしているクフィーユ・アルフィーナという女性である。彼女に関することはわからないが、『管理局の酒樽』と見事に不名誉な称号を持つほどの酒飲みと噂される。

「久々に稽古を付けてくれますか？……龍乾も……一緒にどう？」

「……へ？」

何？

「……」

「む、無言なのは怖いのですが……」

わ、私がどこかに電波を発している間に何か……有ったんだよね……？

「だから、放課後稽古するから、一緒にしない？」

「え、いいの？」

「もち！」

私は肩を震わしていた。

「どうした？」

不思議がってサラが近づいてくる。私はこのとき、サラが近づいてくることに気づかず、

「やったー！」

「げふっ……」

上に向かって上げた手（握り拳）がサラの顎を完璧にとらえ、さらにジャンプした勢いも入ってサラの体が宙に浮いた。

「あり？」

この様子を見ていた先輩は慣れたようで、

「じゃあ、放課後。昇降口で待ってるから」

「あ……。はい！」

先輩との稽古……。放課後が待ち遠しい。

楽しい時間は過ぎていき、十二月。

事件が起こった。

先輩が誰かに刺されて、死んでしまった。

状況とかは聞いただけなのでわからないけど、通り魔に襲われたらしい。

葬式も終え、あとは通り魔の逮捕だけになった。しかし、わかったことはそれほど多くない。町を普通に歩いていた先輩にナイフが胸に刺さり、爆発したということ。そのナイフが簡易ストレージデバイスであること。その二つが九歳の自分が調べられたことである。

それと時同じくして、親友であるはずのサラが学校を休み始めた。

私はそれを何とも思わず、見舞いに行かなかった。

もしも行っていればこの後起こる悲劇は起きなかったかもしれない。

先輩の死から一ヶ月経ったある日。

私の目の前には怪しげな仮面を付けた紅いロングの、多分でしかないが女性と対峙している。

……なんで？

「お前は先月の通り魔事件を調べているらしいな……」

「……だつたら？」

「なに、警戒するな。私とその通り魔だ」

え？

その一言に、驚きを隠せない。

「私を倒せたら、正体を明かそう。どうだね？」

「……それは本当？」

「ふふふ……」

私は持っていたストレージデバイス『カルマ』を持つ。自分の得物は自分には不釣合な両刃剣。対する通り魔はダガーナイフを取り出し、手に持つ。

「……」

無言の中、街灯が点滅する。

カッン

と石が地面に落ちる音がしたのと同時に、通り魔に近づいていく。先手必勝と言わんばかりに近づいていく私に対して彼女はナイフを私に向かって投げる。

「そんなの……！」

まだ落とすほどの筋力はないので、避けて近づこうとした。ナイフ

が横を通り抜ける。そのとき。

「バイバイ……」

パチン

と指を鳴らした。

するとナイフが爆発し、私の体は衝撃波で吹き飛ばされた。

「……くっ……」

爆発する瞬間、とっさに持っていたカルマを投げつけ、自分は左へ、剣は彼女に向かった。

爆風によって加速された剣は彼女の足下を掠った。

軽く当たった足の一部を風が切り、血が流れる。

「ぐ……かはっ……」

私は壁に激突した。

「……もう時間か……。この勝負預けさせてもらっ」

「……逃げる気？」

「またすぐ逢えるわ……」

それじゃあ……。と何処かへ歩いていった。

フラフラになりながらも立ち上がりカルマを拾った。多少ではあるが刃零れをしていた。

一回家に帰ろう。そう思って帰路に就いた。

ミッド郊外の住宅街に私の家はある。

家に近づくとつれて、なにやら赤い点がポツリ、ポツリと道に付いている。

怪しみつつ後を追ってみると、自宅の前に来た。そして点は家の中へと続いている。

「まさか…!!」

最悪の予想が頭をよぎった。  
まだ回復していない体で家内に入った。

玄関からリビングへ、その点は向かっていく。

リビングの扉を開けると、ムツと生暖かい熱と嫌悪感を抱くさびた鉄のような臭いが私の体に押し寄せる。そして私が見たものは…、

「ふふふ…」

赤い二つの大きな血溜まりに無惨な姿の、おそらく父と母であった肉塊と黒い剣を握り、白い髪を血で真っ赤に染めたサラであった。

「龍乾、おかえり」

「あ……な……」

何事もないように私に話しかけるサラに声を出すことができない。

「どうしたの？」

「サラ……」

「私ね…」

私の言葉を無視して話し始めた。

「好きな人がいたんだ…。その人は他の人が好きで、私は友達止まりだった。私はあるキツカケで思いを伝えようとした」

「何…言って…」

「ただど無理だった…。邪魔者を殺しても、私の方を見てくれない。だったら…」

ゆらりとした動きでサラは剣を一閃した。

「…好きな人も殺せばいいんじゃないかって…」

状況が状況でなければ、天使の笑顔と表現できただろうが、あいにくこれではそれは難しいだろう。サラの好きな人…。好きな人〃殺されたもしくは殺されそうな人…。

あれ…。

「もしかして……」

「？」

「サラの好きな人って…」

「うん」

「先輩？」

その一言で、ギアが入り、剣を振り上げる。

「…なんで邪魔者の名前だったの？」

「（先輩が邪魔者？じゃあ誰！？サラの好きな人…）……あ」

「私は誰よりも龍乾を想っているのに…」

どうやら私はサラの初恋の人みたいです。

喋りながら考えながらサラの攻撃を避ける。

だが、じわりじわりと壁に追い込まれる。

「…！」

後ろは壁。前にはサラ（鬼）。

持っているのは破損しているカルマくらい。

「ふふふ…鬼ごっこはおしまい」

私は降参するしかない。

「じゃあね…」

私は目をつむった。だが、いつまで経っても衝撃がこない。目を開

けてみると、

「…くっ……」

数ミリ手前で剣の先が止まって、サラは自身の手を動かさないでい

た。

さて、ちょうどそのとき、声が響いてきた。

「汝、何を求める」

「へ？」

「汝、何を求める」

どうやら頭の中に直接声は響いているようだ。

「汝、何を求める」

「私は」

親友を、サラを助けたいという想い。ならば

「友達を救う力が欲しい！」

“ 了承 ”

私の周りに魔法陣が展開される。

イメージするのは弓、刀、そして……。

「な……！」

サラの驚く声が聞こえる。私だつて驚いている。自分が今、鎧姿で弓を持ち、刀を携えているのだ。

「  
」  
私の記憶はこの後起こったことを知らない。意識が戻ったときには病院にいたのだ。

その後、サラとは連絡も取れずにいた。  
二年後、管理局に入局し今に至る。

第十二話 過去（龍乾編）（後書き）

どうでしたか？

次回はサラ視点になります

第十二話 過去(サラ編) (前書き)

遅くなりました

稚拙な文章ですが、どうぞ

## 第十二話 過去（サラ編）

八年前

退屈だった日常……。

何か物足りない日々……。

つまらない……。

つまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらない  
つまらないつまらないつまらないつまらないつまらない！

すると突然、世界が変わる。

灰色に見えていた世界は赤々とした夕焼けに…。  
有象無象が闊歩する街並みは何もない荒野に…。  
そしてそこには私以外の人影…。  
あなたは……？

視界が暗転し、その人物の顔は見れなかった。  
そしてそのまま底無き闇に記憶が落ちていった…。

目が覚めると学校の教室。

どうやら寝てしまったようだ。

「はい、静かに〜！」

担任のシエラ・スーンがみんなをなだめている。

その隣には見たことのない女の子がいた。

「今日からみんなと一緒に勉強する事になった子を紹介するよ〜」  
転校生…。

「えっと…はじめまして。太刀形龍乾です。よろしくお願いします」  
こう言ってみんなに向けた顔は、慣れないのかハニカんだ感じの笑みであった。

その笑顔に私は引き寄せられる。

「太刀形さんの席は、端の列の一番後ろ。トライデントさん、わからないこととか、教えてあげてね」

「はい〜！」

とっさ、というよりは反射的に返事をする。

彼女に声をかける。

「私、サラ・トライデントっていうの。よろしくね」

「よろしく、サラ」

サラ、と名を呼ばれて、心に優しい風が吹いた。

これが親友との出会いだった…。

時間が経つのは早いもので二年が経った。

「先輩！」

私と龍乾は先輩であり、魔法の師であるジェイ・ワンダーに会っていた。

先輩は管理局嘱託魔導師として、働いている。中遠距離のミッド式魔導師である。私は魔力資質はあるものの、ミッド式の適性がないので、基本座学である。

まあ龍乾からベルカ式の適性があることを聞かされたので、最近は一ストレージデバイス『干将・莫夜』を使って模擬戦で腕試しをしている。

「今日の放課後、修行をするから。ちゃんとデバイスを持って西の森に集合。いいね？」

「はい」

「わかりましたー！」

その返事に納得したのか、先輩は教室に帰っていく。

私たちはその後ろ姿を見ながら会話を始めた。

「先輩ってカッコいいよね〜…」

「そうだね…」

私にとってカッコいいのは龍乾だからわからないけど…。

「私たちもあんな風になれるかな…？」

「きつとなれるよ」

私は無理だけど、龍乾なら、きつと…。

「私さ…」

「?どうしたの？」

「先輩が…好きなんだ…」

パキリッ

と私の何処かにヒビが入った…。

この後、私は家に帰るまで自分が何をしていたかはわからない。

自宅に帰っても、昼間龍乾が言った言葉が頭に響く。

何故？

彼女は何と言ったのか？

先輩が好き？

好き？

好き好き好きスキスキスキスキスキ……。

何故何故何故？

彼女は、龍乾は私だけのモノなのに！！

“ 汝の望みはなんだ？ ”

何処からか声が聞こえてくる。

「 誰？ 」

“ 汝、製作者なり ”

“ 消えぬ者なり ”

“ 討ち貫く者なり ”

“ 力を奮う者なり ”

“ 護る者なり ”

“ 覇道を歩む者なり ”

声は増え、六つの声が別々のことを言う。

「すべてを破壊する力を…」

“ “ “ “ “了承” ” ” ” ” ”

その言葉を聞いた瞬間、頭の中に何かが流れ込んできた。

その何かは意識すら刈り取るような激しさで、それでいて小川のよ  
うに静かさに頭の中に流れ込み、吸収される。

そうしていると、自ら意識が落ちるのを感じた。

一ヶ月後…。

街中で歩いている先輩を見つけた。

私は急いで裏路地に入り、ある小さな事件で手に入れたシルフィを  
起動させた。このときはペルソナがなく、コントロールも利かな  
いので髪の色まで変わった。

路地をでて私は先輩の前にゆっくりと歩いていき、往来の人にぶつ  
かって足がもつれたように見せた。

それに気がついて先輩が私を受け止めようとする。…わざとなのに

……。

先輩は前から受け止めて、

「大丈夫ですか？」

と私の安否を確かめた。

が、そのときが私の望んだときである。簡易ストレージのナイフを  
三本、先輩のカバンとズボンのポケットに入れ、一本を腹に刺した。

そして、すぐにその場を離れ、誰もいないのを確認し、

「……ブロークンブレード」

『Broken blade』

後方からすさまじい爆発が発生し、私はその場を離れた。

私は犯罪を犯したことでなく、龍乾を独占したことしか頭になかった。

口元を弛めることしかできない。

自由に話していいと言われたら多分その場で笑うだろう。

自宅に着いても、その興奮は収まらず、何かを斬りたいと危険なことを考えるようになった。

私の邪魔をするモノは何もかも壊した。

……それがたとえ家族であっても……。

先輩を殺して一ヶ月したある日……。

私は看病しに来ると思っていた龍乾が来ないことに苛立ち、来ないなら無理矢理つれてこようと思い、ナイフとシルフィを持って行くことにした。

そして彼女の前に立った。

「お前は先月の通り魔事件を調べているらしいな……」

「……だったら？」

「なに、警戒するな。私はその通り魔だ」

私は自身のした罪を認めた。だから通り魔であることを伝えた。

「私を倒せたら、正体を明かそう。どうだね？」

「…それは本当？」

「ふふふ…」

龍乾がこの条件をのむと思っていた。予想通り、持っていたデバイス、たしか『カルマ』だったかなあ…、を取り出した。龍乾の得物は不釣合な両刃剣。対する私はダガーナイフを取り出し、手に持つ。「……………」

無言の中、街灯が点滅する。

カツン

と石が地面に落ちる音がしたのと同時に、龍乾が近づいてきた。

先手必勝と言わんばかりに近づいていく龍乾に対して私はナイフを投げた。

「そんなの…！」

まだ落とすほどの筋力はないはずなので、避けて近づこうとしている。ナイフが横を通り抜ける。そのときが私の望んだタイミングであった。

「バイバイ…」

パチン

と指を鳴らした。

ブロークンブレードによりナイフが爆発し、龍乾の体を衝撃波が吹き飛ばした。

「…！！…くっ！！」

爆発する瞬間、とっさに持っていたカルマを投げてきた。龍乾自身は左へ、剣は私に向かってきた。

どうせ届かないだろう…、と思っていたら爆風によって加速された剣は私の足を掠った。

軽く当たった足の一部を風が切り、血が流れる。

「ぐ……………かはっ…！」

龍乾は壁に激突した。

私は軽くだが切れた部分が外気にさらされて痛むのが、なんだか気になっていけない。

「……もう時間か……。この勝負預けさせてもらおう」

まあ、口実ではあるが……。

「……逃げる気？」

それに対して、睨むように私を見る龍乾……。正直言って可愛い。持ち帰りたいけど……。我慢。

「またすぐ逢えるわ……」

それじゃあ……。と何処かへ、というよりか龍乾の家へ歩いていった。予想だと軽く見積もっても五分は動けないはずだ。

それまでにできるだけ早く龍乾の家に着いてなきゃいけない。

数分後……。

私は龍乾の家でケガした足を治してもらっている。龍乾の母は回復系の魔法が得意な人だ。軽く切った程度なら楽に治せる。

「最近物騒ね……」

「そうだな……」

そう返すのは龍乾の父だ。こっちは逆にバリバリの前衛タイプ。斬撃や居合いなど剣にゆかりのあることしかしない（らしい）。

「そうですね……」

私は話を聞きながら、後ろ手でデバイスを取り準備をする。

「通り魔だつてまだ捕まってるじゃないんですよ。早く捕まえてほしいわ」  
そこら辺の主婦がするようなことを言い、あからさまにため息をす  
る。

二人が後ろを向き、私から目を離している。

「……コンクエスタシックル」

小声でデバイスを起動し、父親を一閃。

「がっ……」

その音に母親が気がついて、夫を殺した娘の友人を見た。その目には驚きと畏怖の色が見えた。

「な……なんで……」

私は今できる最高の笑みを浮かべて、

「邪魔だから」

彼女に剣を突き刺した。

それから龍乾が帰るまで死体を斬っていた。

斬る度に血が飛び散り、私の顔に、体に、服に、髪についた。

これなら髪染めるのが楽だ。そう考えてしまう。

その途中でガチャリと扉が開いた。

振り向いてみると、体に傷がある龍乾が立っていた。

「龍乾、おかえり」

「あ……な……」

「どうしたの？」

なんで驚いているの？

「サ……ラ……」

「私ね……」

龍乾が何か言いたそうだけど、私はかまわず話を進めた。

「好きな人がいたんだ……。その人は他の人が好きで、私は友達止まりだった。私はあるキツカケで思いを伝えようとした」

「何……言っ……」

「……ただ無理だった……。邪魔者を殺しても、私の方を見てくれない。だったら……」

ゆらりとした動きで私はコンクエスタシックルを一閃。

「…好きな人も殺せばいいんじゃないかって…」

とびきりの笑顔で龍乾に言った。

このとき、気持ちの高ぶりから攻撃が単調になっていったのか、それともわざとやったのかはわからないけど、龍乾に避けられる。

「もしかして……」

龍乾が何か気がついたみたい。

「？」

「サラの好きな人って……」

「うん」

この言葉をずっと待っていた。私の気持ちに気がついて……

「先輩？」

くれなかった。予想外の答えにコンクエスタシクルで斬る速さを速くした。

「…なんで邪魔者の名前だったの？」

「……………あ」

「私は誰よりも龍乾を想っているのに……」

もう少しロマンチックな状況だったらよかったなあ……………。

そうこうしていると龍乾を壁まで追い込んでいた。

「ふふふ…鬼ごっこはおしまい」

どうしよう……。怖がる龍乾もまた何とも……………。

しかし、それはもう終わる。私の腕の中で消えて、永遠に私のモノに……………。

そのとき、頭の中に直接声が響いた。

“ やめろー！！ ”

「……………！！！！」

驚きとはまた違った、表現できないような感情が私の中で芽生える。

自身の深層意識にまで沈めた何かが浮き上がってくる。

突きつける剣が龍乾の目の前で止まっている。

数秒、いや数分かもしれないが頭に響く声は止むことなく、響く。

「……………！！」

龍乾の足下にベルカ式の魔法陣が展開されるのを見た。

光が部屋を包み込み、龍乾の姿が変わっていた。

黒い武者鎧に身をつつみ、手には黒を基調とした刀、背中に青い弓を携えて立っていた彼女は先ほどまでの逃げ腰ではなく、戦う気味にいることが伺える。しかし、唯一違和感を感じるのは鎧の黒よりも黒い籠手である。鎧、刀、弓を和で固めているのに対し、西洋を思わせる籠手がひときわ目を引いていた。

私は能力の一端より、それらのモノが何であるかを知ることができた。

「（刀は玉響<sup>たまゆら</sup>、弓は与一の弓……………。籠手は…不明？しかし、勝てる！）」

相手がどのような状態であろうと、自身の優位は変わらない…。そう判断して剣を構えた。

「……………」

龍乾は小さく何かを呟いた。至近距離にいたにも関わらず、何を言ったのかを知ることができなかった。

龍乾は刀を構えて、動く気配がない。

不審に思ったその瞬間。

「……………」

刀がいつの間にか振り下ろされた。刹那と表現することのできる早さであった。

ギリギリではあったが、コンクエスタシクルで何とか防いだ。しかし、知っている強さと違い、小学生女子が出すのは不可能な力の攻撃に四苦八苦しながらも、何とか逸らした。

このままではマズい。そう思いコンクエスタシクルの黒い鎌を出した。鎌と剣の一对である武器であり、名前の通り、鎌を主にしているため剣は付属物である。

龍乾の攻撃はある程度パターンがあり、さらに予備動作もあったのですぐに見極めていなしていくことはできた。しかしパターンを崩されたら必殺に値する一撃を喰らうのは間違いないだろう。攻撃を避けていき、壁とは逆の窓のそばに追いやられる。

「！」

叫び声とともに放たれた一撃を最低限の動きで避けたが、衝撃波により、吹き飛ばされる。

飛ばされた先にはソファーと血の付いたカーペットがあり、私はソファーに激突した。

「くっ……」

そして窓ガラスはヒビが入り、一部から外の光が差し込んでいた。あそこまで行ければ……。

イレギュラーな事態に逃げの思考に回った頭で、なんとか考える。

そして今まで使っていたコンクエスタシクルを待機状態にし、干将と莫也を取り出し、構えた。側には魔法陣を三つ展開し、アクシヨンに備える。

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ【しんぎ、むけつにしてばんじゃく】」

干将と莫也を投げる。が、龍乾も馬鹿ではない。刀ではじいた。二剣は空中にとどまる。

そのとき、魔法陣の一つが壊れ、ストレージデバイスが出てきた。それは白と黒の剣がクロスした形のキーホルダーであった。

魔力が流れ込み、干将と莫也となり、

「心技、泰山ニ至リ【ちから、やまをぬき】」

再び投げる。しかし、狙いがズレていた。この二本は少し左に逸れた。

二つ目の魔法陣が壊れて、同じキーホルダーが出てくる。

「心技、黄河ヲ渡ル【つるぎ、みずをわかっ】」

干将と莫也として、三度目。今度は龍乾に向かう。

ガキン、と刀ではじかれたが、最後の魔法陣が壊れた。

「唯今、別天二納メ【せいめい、りきゆうにとどき】」  
剣はまっすぐ龍乾に向かう。ただ単調に刀ではじいたそのとき、  
「両雄、共二命ヲ別ツ【われら、ともにてんをいだかず】」  
はじいた剣がいきなり向きを変え、龍乾に向かつていく。それまで  
はじかれた剣も同じように彼女を標的にして背後と横から向かつて  
いく。さすがに不意打ちともいえる攻撃に動作を止めてしまう。  
無抵抗の龍乾に当たる直前。  
「……ブロークンブレード」  
剣を爆破してダメージを与え、窓をその衝撃で破壊した。  
外は薄雲がかかっていたが日の光が射し込んでいた。  
私は爆発により散らばった部屋を横目に窓から飛び出した。

第九十七管理外世界。 現地惑星名称、地球。

あの日から二年……。  
私は世界中を旅している。  
力の制御はこつちに来る前に他の世界でトレーニングをして、前以  
上の力を出せるようになった。しかし、補えないモノがあった。ソ  
レは普通には手に入れやすく、また手に入れにくいモノである。  
現在、中国にきている。  
そういえば、干将・莫也はこの国の剣だっけ……。  
数秒考えたが、今はソレよりも生活をどうするかを考えるべきだ。  
そう思い、空港を後にしようとしたが、  
「その人。ちよつと待て」  
と呼び止められた。  
そこには赤を基調とした服の少女と、紫を基調としたイケメンがそ

こにはいた。

これが紅麗さんと紫苑との出会いであった。

その後、会社を立ち上げるから手伝え、とか幹部として私を雇う、と話が進んでいった。

諸事情により省略。

それから会社 F B W M は軌道に乗って徐々に有名になっていった。

そしてその頃から私は泥棒としての仕事を始めた。

それは今も続けている……。

## 第十二話 過去（サラ編）（後書き）

鶴翼三連をサラが使っちゃいました

前回は龍乾が笑いのツボをしましたね

……パクリました

鶴翼はFate/staynightのアーチャーを、ツボは仮面ライダーディケイドの夏ミカンを……

今後もパクる可能性大ですが、よろしくお願いします

感想、評価をお待ちしています

## 第十二話 過去（話の後で）

「……………と言っ感じですね」

「「「「……………」」」」

先ほどまでのシリアスとした雰囲気から一転して、明るく話そうとする龍乾。

「……………えっと、無理…しなくてもいいよ？」

「無理だなんてそんな……………」

「そうやね…。無理するんはなのはちゃんくらいで十分や」

「にゃ！！何で私がでるの！！！」

龍乾を心配するフェイトと気にしつつも誰かを弄るはやて。

はやては、

こないな湿っぽい空気は嫌やー！

と叫ぼうと思ったが、それならいっそのことその空気ごと壊そうとなのはを弄ることにした。

しかし、これは、

「なのはが、何？はやて」

死神を怒らせた。

「イエ、ナニモ」

恐怖により片言にしゃべってしまうはやて。額から冷や汗が流れる。

「ならいいよ」

「（怖い！怖すぎる！）」

ひきつった笑顔ではやては思った。

「もう今夜は遅い。質問とかは明日にしよう」

クロノがこの場をまとめて、解散になった。

龍乾は、ベットに倒れる感じで入り、そのまま眠った。

夢の中……。

赤い夕焼けの世界に龍乾は立っていた。

「はじめまして……で合っているか？」

背後から声が聞こえ、振り向く。そこには黒色をした西洋甲冑に身をつつみ、鎧と同じ黒の剣を携えている男がいた。

「あなたは……？」

「私の名は 。 しがない騎士さ…、The support  
e of weapons (武器の担い手)」

「武器の……？」

自分に馴染みのない呼び方に対して、龍乾は疑問に思っている。

「そう。武器に対しては使いこなせないモノはない」

この言葉に龍乾の疑問は氷解する。すべての武器が使える、故に武器の担い手である。

「が、必要なモノが足らぬ。故に未熟なり」

「なぜ？」

「武器がない」

「いや、あるでしょ」

ハーメルンがここに……。と続けたが、待機状態のハーメルンが見つかからない。

「あの弓は原初のモノではないから無理だ。ただのデバイスとしてなら良くても、担い手としては紛い物を使うものではない」

「……じゃあ、どうすれば……」

「そうだ。ならば、どうすれば……」

「創り手を探せばよい」

「創り手？」

「そうだ。ありとあらゆる、とりわけ剣に関しては並ぶ者のいない程の者が身近におる。なので、仲間にしたらどうだ？」

「特徴は？」

「か 白 み どう た」

あれ、上手く聞けな……。  
龍乾の意識が落ちた。

「…こんな感じかしら？」

「そうでしたね…」

「懐かしいわね…。会社設立の資金源として頑張ってもらったっけ」

「………」  
言い終わったサラと懐かしんでいる紫苑と紅麗。アリサとすすかは、  
「あれ？」

「固まっています？」

固まっていた。話の内容とサラの豹変ぶりに。

「二人ともー、戻ってこーい」

「………はっ」

「意識が戻ったところで、もう遅いから寝ましようか」

フレイルの言葉で時計を見ると、すでに十一時を過ぎたところ。

「寝よーぜ……」

「あなたは仕事があるでしょ、浪醒」

「あれ？そうだったか？」

あくびをかみ殺しながら、藍姫に尋ねる浪醒。

「ええ。今決まりました」

「な！勝手だ！職権乱用だ！」

今の言葉で目が覚めたようだ。

「ゴチャゴチャウルサイですよ、B部門責任者浪醒さん」

「………わかりましたよ。藍姫副社長」

最終的に渋々納得していた。

「あの… B部門って？」

「さすがフレイルに尋ねた。」

「B部門というのはうちが主にやっている仕事の一つです。全四部門あり、それぞれF、B、W、Mと名付けられています。ここまでいいですね？」

「はい」

「Fはインテリアコーディネイトやファッションデザインなどの美をモットーにしています、私が責任者になっています。Bはペット関係を主にしています。ペットに関するトラブルを受け付けています。責任者は、話のように浪醒です」

「へ〜」

「Wは運送業です。どの次元世界へも運送を行っています。責任者は紫苑さんで、最後のMは盗難品の搜索などを管理局と共にしています、責任者はサラになっています」

「そうなんですか……」

「一応サラが管理局と一緒にしているのをツッコむべきところじゃないの、これ。」

場所が変わって、FBWMの社長室。紅麗が中に入ると一人の人物がいた。暗い部屋でソファーに座っている。

「あら、お久しぶりですね。Mr.」

「その呼び方は慣れないよ、社長さん」

「それはお互い様ってことで」

紅麗が明かりをつけると、その人物は少し眩しそうに手で光を遮った。

その人物は紫の髪で白衣を着ており、黄色い目をした青年であった。

「今日はどのような用件で、Dr.スカリエッティ？」

白衣の人物は七年後にミッドで『J・S・事件』を起こす張本人、ジェイル・スカリエッティその人であった。

サラは部屋に戻っていた。

「あのことを話してよかったのかなあ……」

「君らしくないな」

頭の中に声が響く。

「たまにはいいだろ、驚じょう」

「君は後先考えて行動しないタイプだからそのような迷いが生まれるのが普通だ」

「それは気休め？それとも指摘？」

「さあ……どっちだろうな……」

「それより、何？普段は呼んでも返事もしないあなたが、いったい何のよう？」

「近々戦闘が起こる。そこで彼女に出会える」

「それはカン？」

「さあ……」

しかし、彼の意見は九割は当たる。見過ごせるものではない。対策を考えないと……。

サラはこの夜、遅くまで考えていた。

F B W M内。とある研究室。

武器庫と言っても違和感のない扉で閉ざされた部屋。

その一室、おそらく研究者が寝泊まりするであろう部屋の隣。

専門機器で周りを取り囲んでいる部屋の中央に一風変わった、異質とも呼べる機械が四つ、鎮座していた。中には、三つには寶石のよ  
うな石が置かれ、残り一つは空であった。石は、黄、緑、白の三色  
だ。

石は点滅をする。

『もうすぐ、目覚めの時』

誰にも見られることなく……。

第十三話 最終決戦に向けて (前書き)

終わりが近づきつつあります

### 第十三話 最終決戦に向けて

第九十七管理外世界『地球』日本、愛知県。

三河湾を一望できる山の中腹にある寺院に龍乾の姿があった。手には水の入った桶おけと柄杓ひしゃく、線香とライターを持っていた。彼女は一つの墓の前で止まる。

#### 太刀形家之墓。

そう書かれた墓には最近誰か来たのだろう、綺麗な花が生けてあった。

「……………ユキさんかケイ君のどっちだろう……………」

昔近所で遊んでいた、槍術の天才と遊び人を思い出す。

墓を掃除し終え、線香を供えたとき、

「久しぶりじゃの。太刀形さん」

「……………住職さん」

寺の住職から声をかけられた。

住職は白いヒゲの生えた老人で、彼の孫と龍乾が友人の関係で知り合った。

「大きくなって……………。昔はホントに小さかったからのお……………」

遠い目をしながら、懐かしいモノを見るように過去を振り返っている。

「…そうじゃそうじゃ、忘れていた。君に手紙が来ていたんじゃ」

「……………私に？」

「ほれ」

懐から手紙を取り出し、手渡す。手紙はエメールで、差出人は……………。

龍乾の目に驚きの色が見える。

差出人：太刀形義姫

龍乾の母の名である。

慌てて中を見てみると、チェーンに繋がれている斬馬刀のキーホルダー一つ、丸い石が繋がっているブレスレット一つの計二つと手紙が入っていた。

龍乾へ

この手紙を読んでいるのなら、おそらく、私は死んだのでしょう。

あなたは特殊な力を持っています。

一緒に入っているストレージは手助けになるでしょう。

人を助けるために使ってくれたら幸いです。

太刀形義姫

「う……………ぐすつ……………」

懐かしい母を思い出す。

「……………懐かしいなあ」

住職は昔を思い出していた。

自分が寺を継ぐ前……………。父が亡くなってから見つけた手紙を読んだことを。

「太刀形さん。ワシからの餞別じゃ」

渡されたのはブレスレット。

「これは…？」

少し泣き止んだところで尋ねた。

「御守りじゃ。ケガしないようにな」

その優しさを受け止め、

「ありがとうございます！」

笑顔で言葉を返した。

「もう行くんか…」

「はい」

寺の前から龍乾が去ろうとする。

「上総かすねや六子むしには会わんのか？」

「今日はノブちゃんやカツちゃんに会いに来たわけではないので」

「そうかそうか」

「それでは…」

龍乾は山を下る。

住職は竹箒で寺の前を掃き始めた。

ミッドチルダ、FBWM内では…。アリサとすずかが、スカリエツ  
テイから注射を受けていた。

「これ、ホントに栄養剤？なんか怪しいけど…」

「安心したまえ。怪しいかもしれないが、私は医者さ。社長さんか  
ら頼まれただけだしね」

後の人から見れば、それは嘘になるが、この時点でそう言えるのは  
非常に少ない。

サラは自室でデバイスを作っていた。

“使うことはあるのかな？”

「最悪、コレで相討ちを狙うわ」

“悪い賭だと思っが？”

「運も実力の内って言うでしょ？」

驚はそれつきり言うのを止めた。

「……アレを使うんだから、まだ何とかなるでしょ……」  
驚の返事はなく、無音の部屋に響いた。

アースラ内。

トレーニングルーム内にはシグナムの姿があった。

「はぁ……はぁ……」

他には誰もおらず、模擬戦をしていたわけではない。

左手を何も無い空間に突き出すと、魔力で作られた剣が姿を現す。

剣に魔力が溜まり、炎へと変換される。

「火龍……一閃!!」

剣が振られ、その先の的に一直線に向かう。が、

パリン、と剣が割れ、炎が辺り一面に散る。

「……はぁ……また、か……」

火龍一閃を完成させるために彼女は剣を振るう。

何度も、何度も。

海鳴市。

結界を張った中で、四つの影が舞う。

一つはピンク、一つは黄、一つは白、一つは赤。

「ラケーテン！ハンマー！」

赤 ヴィータ がピンク なのは に向かう。

「サンダースマッシュャー！」

黄 フェイト がそれを撃ち落とそうとするが、

「させへんよ」

白 はやて が邪魔をする。

なのはは、ヴィータの攻撃を避け、フェイトと合流した。

「いくよ、フェイトちゃん！」

「うん！」

「レijingグハート！ノバルディッシュ！」

『Load cart ridge』

ガチャンとカートリッジを排夾し、魔力を瞬間的に上げる。

「全力全開！」

「疾風迅雷！」

「コブラスト・シユート！」

ピンクと黄の魔力の奔流に、はやてとヴィータは飲み込まれる。

「はい、そこまで」

審判をしていたシャマルの声が響く。

「はやてちゃんもヴィータちゃんも、頑張ってください！」

「リン……あたしは病み上がりだぞ」

「ウチはまだ新しいシュベロトクロイツに慣れてへんからなあ……」

リンツヴァイの声に、ヴィータはやれやれと言った風に、はやて

は苦笑しながらも、お互いに鍛えて、力をつけていこうと思う。そ

れは勝った二人も同じである。

模擬戦をし、互いの力量を見極める。『人を知り、己を知るならば、

百戦危うからず』である。

この日から、遅くまで模擬戦を行った。

無限書庫内。

こちらには二人の青年がいた。

「まだ見つからないのか、ユーノ」

「ごめん。古代ベルカ時代の資料はこつちにも少なくなくて……」  
資料を探す司書、ユーノと催促に来た執務官、クロノである。

「僕も急いで探すけど、もう少し人員を増やしてもらえると……」

「こつちからは出せるだけ出したんだから、後は自分で何とかしろ」  
人員は前回の闇の書事件よりも多く、というよりは前回はユーノが  
ほぼ一人で闇の書の資料を探していたが、二、三十人が動員された。  
しかし、探索系魔法を得意とするのは半分にも満たず、足を引っ張  
るのが現状である。

「そうしたいけど……」

「（無限書庫<sup>こく</sup>だけでは心細いな……。今度ヴェロツサにも頼むか……）」

「……あれ？」

「?どうした？」

ユーノが何かを見つけたようで、それをクロノに見せる。

「……これは！」

クロノはその資料に驚きを隠せない。

「……今度聖王教会に聞いてみてくれる、クロノ？」

「……わかった」

無限書庫から出ようとクロノは移動する。

出るとき、

“また何か見つけたら、通信を入れてくれ”

“わかった”

そう念話で伝え、クロノはその場から離れる。

ユーノはそれを見送り、仕事に戻っていった。

龍乾は日本から転移して違う世界にいる。

砂漠しかない世界。サンサンと輝く太陽。

そんな世界で、一人だけ立っていた。

「ナイト・オブ・オーナー……」

その言葉に腕が光る。

光がやむと、黒い籠手が龍乾にはついていていた。

さらに斬馬刀を展開する。持った瞬間、籠手から黒い何かが出て、

灰色の斬馬刀が黒になった。

その魔力の流れに気がついたのだろう。砂の中から蛇のような生物が現れる。

刀を横に構え、

「スタート……アップ」

『Start up!!』

籠手から響く声で、戦いは始まった。

戦闘と言うよりは、虐殺と言った方が当てはまる戦いの中、龍乾は刀を振るうのを止めない。

大きさなどどうでもいい。

強さなどどうでもいい。

ただ、生き残るだけだ。

彼女の頭の中にはそれしかなかった。

先ほどまでいた蛇（仮）も、大半は死骸となり、数えるほどになつた。

その数匹も、恐れをなしたのか、一匹を残して退散した。

その一匹に対して龍乾は同情し、

「逃げ遅れたのか仲間の敵かたきは知らない。けど、苦しまずに逝かせてあげる」

死刑宣告を下す。

斬馬刀を待機状態にし、もう一つのブレスレットを展開する。ぱつと見て、変わったところはない。

しかし、よく見ると右手の側に拳くらいの大きさをした球体が三つ浮いているのが見える。

そのうち二つを握り、

「バレット、セット」

拳くらいあった玉がビー玉くらいの大きさの玉数十個に変わる。が、龍乾の手からは落ちない。

「後より出でて、先に断つもの【アンサラー】」

魔力が球体に貯まり、小さな玉は蛇（仮）を囲むように動き、拳大のが一つ龍乾の手元には残った。

球体が短剣へと変わり、蛇（仮）に狙いを定める。

「斬り決る戦神の剣【フラガラック】！！」

短剣は一斉に発射され、蛇（仮）を貫く。

痛みは一瞬。その後の痛覚などなく、宣告したように、苦しまずに逝かせた。

球体、フラガラックを待機状態に戻すと、その場に倒れた。新たにできた死骸が砂に埋もれていく。それを横目に、龍乾は日本に帰った。

赤い夕焼けの世界。

そこには白い短髪の青年が一人立っていた。  
「もうすぐか……」  
戦いの時は近い……。

第十四話 最終決戦、来る (前書き)

タイトルがリボンっぽいのは気のせいではないです

文章がオカシいです

誰か、書き方教えて……

## 第十四話 最終決戦、来る

アリサ達が行方不明になり三日したその日。アースラに手紙が送られた。

差出人は不明。内容は、

『FBWMミッドチルダ本社にさらわれた二人はいる。助けたくば、エース達と守護騎士、太刀形龍乾だけで来い。武装局員は連れてくるな』

とのこと。差出人が不明なのが気がかりだが、内容が内容なだけあって、なのは、フェイト、はやての三人は大喜び。守護騎士のメンバーも心なしか嬉しそうである。龍乾は少ししか会っていないがそれでも嬉しいようだ。

逆にリンディとエイミィは嬉しいと思う反面、今後の行動が思うようにとれなくなってしまうた。

ミッドチルダ…。魔法発展の地であり、法の守護である管理局の地上本部がある場所。基本的に空（本局）と陸（地上本部）は折り合いが悪い。基本的に陸…、主にレジアス・ゲイツ中将が空が云々レアスキルが云々と難癖を付けてくる。友好的な部隊といえるのはほんの一握り程度しかない。

「けど、私らは何とかなるとして、アースラのみんなはどないするん？」

そう。なのはは武装隊の戦技教導隊所属で基本陸の人間、フェイトは執務官として陸にも顔が利く。はやては候補生時代に陸にも顔を出しており、守護騎士は特別捜査官補佐であるから多少の融通は利く。龍乾も三等空位とそこその地位にいるため、陸でも制限がない。

しかし、アーススタッフはクロノをのぞいて誰一人陸でサポートに携えることができない。

「私たちは容疑者が他世界に逃げたときの中継をするわ」  
リンディがこう伝えると、

「でもかあさ……艦長。それだと……」

「安心しろ、フェイト。僕も残っている」

クロノは残ることにするみたいで、フェイトは納得する。

「そやったら、陸には誰が行くん？」

はやてがそう思うのももつともだ。オーバーSランクの魔導士とはいえ、大きな戦闘はPT事件と闇の書事件のみ。レベルが高いとは言っても経験を積むならば技術面で優れた人物が必要。その役にうってつけなのがクロノである。

「それなら安心したまえ。助っ人を頼んである」

「助っ人？」

「ああ。はやてはよく知っているな」

「は？」

わずかな疑問を残しつつも、八人（七人と一匹？）はFBWMに向かった。

## FBWMミッドチルダ本社

普段は仕事で動いている人がいるはずの社内はひっそりと静まりかえっている。

「なんや静まりかえってるなあ」

ロビーにはやての声が響く。

「誰もいませんね……」

「何かあるかもしれない」

とつさに動けるようにザフィーラが構える。

「お待ちしております」

五台あるエレベーターの前に、一人の女性が立っていた。

髪は淡い紫色のセミロング。目は黄緑色でミッドでは目にしそうな印象を受ける。

「こちらにあるエレベーターには、すでに行く階まで繋がっています。こちらが出す指示に従ってもらいますがよろしいでしょうか」  
無言の中それぞれ、頷く。

「では、一番右のエレベーターには高町なのはさん、八神はやてさん」

なのはとはやてはエレベーターの前に立つ。

「隣をヴィータさん、ザフィーラさん。真ん中を太刀形龍乾さん」  
それぞれ、扉の前に立つ。

「隣をフェイト・T・ハラオウンさん。一番左のエレベーターにはシグナムさんとシャマルさん。以上です」

残った三人がそれぞれ扉の前に立つと、扉は独りでに開いた。

八人はそれぞれ、中に入り、扉が閉まる。そのままエレベーターは上へ上がっていった。

ロビーには女性が一人、残っていた。

カツツカツツ

と誰もいないロビーに響く。

「どちら様ですか？」

足音の主が現れる。

女性と同系色の髪の色をし、修道服を着た人物であった。

「騎士はやてはどちらにおりますか？」

聖王教会修道女、シャツハ・ヌエラである。

「こちらのエレベーターに乗って、上に参られました」  
女性が示したのはヴィータとザフィーラが乗ったエレベーターである。

「本当ですか？」

「ええ…。私は案内役を勤めているだけですから」  
納得したのだろう。扉の前に立つ。

女性も、違う扉 フェイトが入った扉 の前に立つ。

「あなたも乗るのですか？」

「少し、用がありますので……」

ポーンと音が鳴り、扉が開き、二人は中に入った。

先に乗った八人の内、扉が最初に開いたのはフェイトのエレベーターであった。

「え……」

扉の先には色とりどりの花が咲き乱れていた。

よく見ると、場所により様々に変わっており、向かって正面に赤や黄色といった明るい色が、左にはアヤマやキキョウなどの落ち着いたものが、右には小さな和室に剣山に花が生けてある。

足下に延びている石畳を歩いていくと、蓮の花が咲いた池が広がっていた。その場所だけトンボが飛んでいた。その様子にフェイトは見入っていた。

「私の庭園、気に入っていただけましたか？フェイトさん？」

背後から、フェイトに声をかけたのは、フレイルであった。

「なかなかのものです。ここまで作るのには三年ほどかかりました」

「…何でそんなことを？」

不思議に思った。聞いてもいないのに、部屋のことを語り出したフレイルに対して。

「私の最後になるかもしれないから……」

「……？」

「私は」

声を少し低くして、フレイルは語り出した。

「プロジェクトFで産み出されました」

「……」

「驚くのも無理ありませんね……。あなたは、他には会っていないわけですからね」

「……なんで……」

「あなたに語るべきことがあった……からですね」

その顔は悲しそうであったが、表に出さぬようにしていた。

「ジェイル・スカリエッティ……」

「……誰ですか、それは」

「プロジェクトFの基盤を作った人物です。管理局で調べてみると詳しいことがわかると思いますよ」

一段落つき、

「この先にエレベーターがあります。それに乗って、地下に向かってください」

「地下？」

「ええ……そちらにお友達もおりますから」

聞いてすぐにフェイトはエレベーターに向かった。

フレイルには何も見えなかったが少し離れたところでエレベーターが動いた音がした。

「ドクターのことを管理局にリークして、どうするつもりですか？  
フレイル・アルマーク」

フレイルの後ろから声がした。振り返るとロビーにいた女性が歩み

寄ってくる。

「あなたこそ、何でいるんですか、ドゥーエさん」

女性 ドゥーエ の姿が変わる。髪は淡い紫から金髪に、服装はレディーススーツから青のボディースーツに。

「理由はおわりのハズ……」

ドゥーエの右手に刃の爪が出現する。

「信条には反しますが…仕方ありません……」

フレイルもデバイスを起動させる。

フレイルのデバイスは魔導書で、策理の魔導書と呼ばれている。

「ミッド式の、しかも遠距離支援型のあなたが私にかなうとでも？」

「時間稼ぎにはなるでしょ？」

パチンツ！

と指を鳴らすと、爆発音がニヶ所からした。

一つはフェイトが乗ったエレベーターの方から。もう一つは真上の空調から。

「幻惑の亡霊、フレイル・アルマーク！参ります！」

床が陰陽の白黒で塗られ、天井に月のイラストがされた部屋……。

エレベーターから出てきたのは龍乾だった。

「龍乾……」

対峙する人物、サラ・トライデントの音が響く。

「決着をつけよう……」

龍乾の音が響く。

同時にナイト・オブ・オーナーを起動させ、斬馬刀を構える。

一方のサラは、キーホルダーを前に突き出す。

「万物からの攻撃を守りし者。今導きに従い、仇なす者を貫きたまえ……。セットアップ……」  
サラが手に持つは約六、五メートルで、葵の紋の入った大身槍である。

「蜻蛉切……」

戦国時代……。数多くの戦に出陣し、軽装であるにもかかわらず傷一つつかなかつたと言われる本多忠勝が振るった槍。

蜻蛉切がそこにあった。

第十四話 最終決戦、来る (後書き)

いよいよラストに近づいていきます

感想・評価していただけると助かります

第十五話 斬VS斬・打VS打・そして… (前書き)

新年あけましておめでとございます

たくさんの方に読まれるようになんばって書いていきます

なので、感想などをいただけると大変ありがたいです

今回の話は比較的短いです

第十五話 斬VS斬・打VS打・そして…

サラと龍乾が対峙した頃……。

五階、風の間。

エレベーターからはシグナムとシャマルが出てくる。

風の間は構造はバスケットボールのコート約二面、三階ほどの高さ  
で岩が乱立しており、常に風が吹いている言わば荒野。

「お待ちしておりました。シグナム。それに湖の騎士」  
「……紫苑」

風の中の主、紫苑は夫婦剣を持ち岩の一つに立っていた。

「勝負は一本勝負。空中戦はなしで先にノックアウトさせた方の勝  
ち。……どうでしょう、受けてもらえますか？シグナム」

右手に持つ干蔣を突き出し、シグナムに向ける。

「よかるう。私も貴様と再び戦いたかったからな」 “シャマル。下  
がっている”

そう言つてレヴァンティンを構える。

シャマルは少しうなずいて安全な位地まで退避する。

その答えに満足したようで、紫苑は干蔣・莫邪を翼のように横に広  
げ、構える。

「いざ尋常に……」

「では……」

二人の間に風が吹き、砂埃が巻き上がる。巻き上げられた石が落ちてくる。

カツッ!

と地面に当たる音。

「勝負! / 参る!」

二人は飛び出していった。

六階、鳥の間。

エレベーター内にはヴィータとザフィーラが立っており、扉が開くのを待っている。

「誰が来る……」

「……」

扉が開くと、様々な動物の鳴き声がエレベーター内部に響く。犬や猫、鳥だけならまだカワイいところがあっただろうが、それだけではなくライオンや熊などの鳴き声も含まれていた。

とつさのことに目を白黒させるヴィータ達。耳をふさぎながら歩いていると、前方から声がした。

「よー。やっと来たか」

その声がすると、一斉に動物達は鳴くのをやめた。

声の主が姿を現す。しかし……。

「誰だ! テメエ!」

そこにいたのは、黄緑色のシャツにアイボリーに緑のラインの入ったズボンをはいた人物。ここまでなら浪醒と断言できる。だが、着

ている人物はヒゲを生やした三十代ではなく、紫苑に勝るとも劣らないイケメンである。

「いきなりだな！まあ……ヒゲの下がこんなイケメンとは思わないだろ？普通」

「……貴様、浪醒だな！」  
ザフィーラが気づく。

「あたりり〜。どよ、別人だろ？」

浪醒の言うとおり、ヒゲを剃った彼が誰かを一発で見抜くのは至難の業である。

「そんなことよりも……」

彼の手には崔里を構える。

「ここを通りたいならオレを倒してから行  
ドーン！」

という爆発音と同時に何者かに浪醒が吹っ飛ばされていた。

シャツハである。

「誰だ、おまえ？」

「その服装からすると、聖王教会の者だと思っが……」  
このとき初対面であり、ヴィータ達は名だけを知っている状態である。

「お初にお目にかかります。聖王教会騎士、シャツハ・ヌエラと申します。騎士ヴィータと守護獣ザフィーラ、先に行ってください」  
二人はうなずき、下行きのエレベーターに向かう。

「いってー！誰だよ急に殴ってくるのは……。ん？誰だおまえ？」  
吹っ飛ばされた浪醒が起き上がり、シャツハを見る。シャツハも浪醒を見ながらトンファー型アームデバイス ヴィンデルシャフトを構える。

「聖王教会騎士、シャツハ・ヌエラです」

「オレはFBWM、B部門部長をしている浪醒だ」

崔里を再び構え直し、シヤツ八に向き合う。

「いざ！／＼はあ！」

二人の声が、無音に等しい場に響いた。

所代わり、地下一階特殊実験室。

「ここで何するのよ？」

「まあ、落ち着いて。これが終わったら家に帰すから」

「……わかったわよ」

現在この部屋には、アリサ、すずか、紅麗の三人。すずかは巨大な機械の側にあるベッドで寝ており、アリサは寝ようとしていた。スカリエツティが調合したため、失敗してはいない……はず。

アリサ達が寝たのを確認し、紅麗は機械をスタートさせる。

寝ていた二人が痛みでも感じたのだろうか。表情が苦痛に変わる。

側には石に向かってレーザーを照射していた。

二人の苦痛が最大に達したとき胸から橙と青のリンカーコアが飛び出しエタールに吸収されてしまった。

「ふふふ……」

紅麗の小さな笑いが響く。

側の石が輝き始め、白、黄、緑の三色にそれぞれ光り輝く。

『 『 『 Start up 『 『 『

石が一段と輝き、辺り一面に光が満ちる。

「ハハハハ…ハハハハハ！」

紅麗の笑い声が響いた。

第十六話 星と夜天・そして始動…… (前書き)

支離滅裂な文章になってしまいました

それでは、スタート!

第十六話 星と夜天・そして始動…

最上階 社長室

床には赤のカーペットが敷かれ、高級そうな机とイス、辺りにはヴァイオリンやヴィエラ、二胡などの弦楽器や、レイピア、刀が壁に飾られていた。

その中には三人の人物がいた。

白のドレスのようなバリアジャケットを着ている女性 高町なのは  
黒のアンダーに白のジャケットを羽織り、白い帽子に、背中には黒い三対の羽根がついている女性 八神はやて。

対するは青いシャツを着て白いズボンをはいた女性 藍姫。

「お久しぶりですね、夜天の王。そしてお初にお目にかかります、エースオブエース」

「久しぶりやね、藍姫さん……」

軽い会話の後、お互いの得物を構え、戦いに向ける。

「……螢、フルドライブ」

> OK!!! Ignition!!! <

小太刀二本が変わり、手甲と具足になる。

「イクシード・ドライブ!」

> Ignition!!! <

なのはのバリアジャケットがドレス風に、レイジングハートが槍のようなフレームに変わる。

無音の中、動こうとする者はなかった。

階下からは何か激突する音が聞こえてくる。

「アクセルシューター！」

> Axel shooter <

打ち出された桜色の弾は数十個。しかし藍姫はそれを無視して真っ直ぐなのはに向かっていく。

> Protection powered <

藍姫が右ストレートを放つ前に防御魔法で受け止めようとした。

拮抗は一瞬。先に根を上げたのは防御。

ピシッとヒビが入る音が響く。

> Barrier burst <

> Bloody dagger <

バリアが爆発する音と、血の刃が放たれた。

煙が辺り一帯に立ち込める。

煙が晴れると、銀色の盾が藍姫のいた場所に展開されていた。

いや、盾と呼ぶには語弊があるだろう。正確には、手甲と具足だった物が長さ・大きさが倍以上に変化していた。

盾が縮小し、手、足、肩、頭と出てくる。

「やってくれたわね……。今度は……」

足に力を溜め、

「こつちから！」

> ブラストルソニック <

高速の突撃を放つ。

その瞬間、二人は左右に飛び、攻撃しようとした。

しかし、間を通過してこない。

> Master!! <

レイジングハートの声になのははハッと上を見る。

すると、青の衣装がいた。

「流離！絶空！」

右の手甲に刃を作り、なのはに放つ。

> Protection <

レイジングハートのとっさの判断で防御しようとするなのは。

ガキンツと何かがぶつかった音。それより一拍して、なのはに衝撃がくる。よく見ると、プロテクションの左端が傷ついていた。

「（攻撃方法がわからない……。何か手はないの……）」  
なのはは藍姫への警戒を継続しつつ、瓦解策を考えていた。

はやては考えていた。

藍姫の流離絶空がどのように放たれているのかを。

「（攻撃の予備動作さえわかれば何とかなるっちゅうに……）」  
ただ腕を振っているようにしか見えないため、意味がわからないでいた。腕を振る、ただそれだけで攻撃が放たれている。  
顔を少ししかめながらも、相手を観察する。

「（考えててもじゃあない。やるだけやるだけや！）」  
再び戦いに身を投じた。

地下一階。

フェイトがエレベーターホールにでる。

手にはザンバーフォームのバルディッシュ。慎重な足取りで辺りを警戒する。

~~~~~

とある通路の先から風に流されて音楽が流れてくる。所々とびとびで、聞き取りづらいが、ヴァイオリンの音だった。

フェイトがその通路を覗くと、赤いドレス姿の紅麗が何も無い空間で演奏していた。

その姿は可憐、演奏は優雅であり、一時フェイトも見とれていた。

一曲、演奏が終わり、紅麗がフェイトを見つけた。フェイトもその視線に気づき、壁から離れ、彼女の前にでた。

「時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウンです。すみませんが「紅麗」は？」

「FBWM社長、紅麗。あなたの質問は『アリサ・バニングス、月村すずかの居場所はどこか？』かしら。悪いけど、敵に与える情報はないわ」

「なら「捕まえて口を割らせるのは無理よ。私を攻撃したらトラップが発動するかもよ」……くっっ!!」

そう言いながらフェイトの横を通り過ぎ、ヴァイオリンを構える。

「私がかけたトラップのスイッチは五つ。ここにある通路も五つ。

私をどうにかできたら、道を教えてあげる。どう、ノる？」

「……（無視していく……ダメだ。何かトラップが発動する可能性がある。戦う……相手が誘うわけだから、……どうだろう？）」

「ちなみに、スイッチの内四つは『傷が付く』『バインドなどで封じ込める』『複数属性の発動』『地面に三人以上の付加』よ。気をつけないとね」

「……」

> H a k e n f o r m <

無言でバルディッシュをハーケンフォームにし、担ぐように構える。

「傷、付けないでね？」

場違いのセリフを紅麗が言っ、戦いが始まった。

通路奥の特殊実験室。現在は六人の人物　うち二人は寝た状態　がいた。一人は白髪のロングに青の瞳、そこそこのスタイルを藍色のスーツに聖十字のイヤリングという出で立ちの女性。

一人は黄色の髪のセミロングに緑の瞳、若干残念な体を黄緑のワンピースで着飾っている。

一人は緑の髪のショートに赤い瞳、黄色を基調としたワンピースを着ている女性。

一人は右半分が藍色、もう半分が金髪というウェーブがかかったロングに深青色とエメラルドグリーンのおッドアイ、緑と黒のドレス姿。

彼女らは言葉を紡ぐ。

「願う。白き翼を」

「望む。黄の槍を」

「祈る。緑の盾を」

「刻む。黄昏の刃を」

言い終わると、それぞれの姿が変わる。

白は背中に白い大きな翼が、黄は手に黄色の大槍が、緑は腕に緑の六角形の盾が、黄藍は藍色と黄色の双剣がそれぞれ装備された。

「告げる。我等は仕える身に非ず」

「我等は生み出す身に非ず」

「我等が持つは破壊のみ」

「破壊と誕生は表裏一体。ならば我等は駆逐するのみ」

「……我等の名において命ず！力を！」

白、黄、緑、そして黄藍の光が実験室を包み、辺りに満ちた。

第十六話 星と夜天・そして始動……（後書き）

どうだったでしょうか？

改善点があれば、ご指摘の方をよろしくお願いします

第十七話 使い手と剣製 (前書き)

無理矢理感がかーなーりーある話になってしまいました……

しかし、反省はしていない！

第十七話 使い手と剣製

「ハア！」

キーンと剣が触れ合う音が響く。

一方は斬馬刀、もう一方は大槍で一進一退の攻防を繰り返している。

サラが使う、蜻蛉切が振るわれると、龍乾の斬馬刀がそれを防ぐ。なかなか進展しない戦いの中、サラは言葉を紡ぐ。

「I am the born of my sword. (体は剣でできている)」

シルフィを起動させセカンドの槍にし、さらに短槍を取り出す。色は黄色、シルフィよりは短く、一、五メートルくらいの槍を右手に構える。

龍乾はその槍が危険なことを本能で認識した。

「Steel is my body, and fire is my blood. (血潮は鉄で、心は硝子)」

左手の赤槍が龍乾に突きを放つ。純粹な、真っ直ぐな突きに対して、斬馬刀で防ごうとした。が、サラの槍は二本。赤槍は魔力結合の破壊効果を持つ『破魔の赤薔薇』^{ゲイ・ジャルグ}、黄槍は癒えることのない傷を与える『必滅の黄薔薇』^{ゲイ・ボウ}である。

不透明なモノをくらうほど龍乾もバカではない。瞬時に判断を変えて、かわそうとする。放たれてから避けるまでの一瞬の思考により、なんとか槍を紙一重ではあったがかわした。

だが、龍乾の籠手、『ナイト・オブ・オーナー』にあたり、一時的に力が消滅する。

「!!!」

力を失い、刀を扱う腕にその重量がかかる。その隙について黄槍

が龍乾を貫こうとする。

が、それを彼女がまともに受けるはずがなく、体をひねるようにして難を逃れた。

「I have a created over a thousand blades . (幾たびの戦場を越えて不敗) Unaware of loss . Nor aware of gain . (唯一度の敗走もなく、唯一度の勝利もなし)」

そんな龍乾に驚きながらも、呪文が紡がれていく。

「Withstood pain to create weapons . Waiting for one's arrival . (担い手は此処に一人、剣の丘で鉄を打つ)」

サラが描くは剣の世界。何人に犯されない己が空間。

「I have no regrets . This is the only path . (ならば我が生涯に意味はいらず)」

龍乾が力を取り戻し、刀を振り上げる。しかし、遅すぎた。

「My whole life was "Unlimited Blade Works" (この体は、“無限の剣”でできていた)」

瞬間、その空間に赤い炎が周囲を取り囲むように流れ、世界が変わった。

陰陽の床は荒野に

場を狭めていた壁はなくなり、夕刻の太陽が一面を照らし

周囲には様々な剣や槍が突き刺さった。

龍乾は、その世界に圧倒された。

すべての生物がない世界。

唯一人、世界の王を除いては統治すらできない世界。

「 Unlimited Blade Works」（無限の剣製）
無限の剣があなたを刺し貫く……」

サラの言葉にその場に意識を復活させる。

「逝くよ、龍乾。辞世の句の用意は十分？」

サラが微笑みながら右手を上げる。

すると、周囲に刺さっていた剣たち（兵士）が龍乾（敵）を標的に、合図を待つように宙に浮く。

「……」

一方の龍乾は斬馬刀をしまい、無手の状態で迎え撃つ。

サラが手をおろす。

同時に射出される剣たち。

しかし、剣は空を切った。

たった一本を除いては……。

龍乾が飛来する剣を一本掴み、叩き落とした。さらに次々と飛来する剣を回避し、それが無理なら叩き落とした。

一旦剣の雨が止み、それと同時に龍乾の剣が砕けた。 Unlimited Blade Works 内において、突き刺さっている剣たちは無名とはいえ神剣や聖剣、魔剣と言った様々な力を持った剣である。いくらそんなものでも百以上をさばききれば砕けるのは当然である。

「第二射……。発射！」

かけ声とともに二度目の射が放たれた。

しかし結果は同様。すべてをさばききった。今度は二本を使い、一射と同じ本数をさばいたので付加が半減し、形を残している。さすがに三射はなく、サラは螺旋槍を取り出した。形は槍の刃の部分ドリルになっており、ギューイイイイ！という起動音が響いていた。

「『螺旋槍 真桜』。龍乾、ちょっと痛いけど我慢してね？」

ギアが変わり、回転数が上がっていく。

「その速さじゃ触れた瞬間あの世逝きじゃない……。断る。サラには言っていないことがあるし」

その一言がサラを踏み留めさせた。

「何かな？」

「一言だけだけど、いい？」

「最後になるから、いいよ……」

龍乾は軽くうなずき、真剣な表情で言った。

「サラ……、愛してる」

紡がれたのは愛の告白。

「時間がたっちゃったけど、それが私の想いだから」

それは少女の心に響き、反復され、思考を止める毒となった。

手から螺旋槍が落ち。

剣の世界は消え。

ゆっくりと前に歩を進め。

そして二人は抱き合った。

「もう離さない。私はサラと一緒にいたい……」
「使い手は愛を伝え、」

「だけど……、私……」

剣製は罪を言おうとした。

「じゃあ、私が罰を与えよう」

「ふえ？」

剣製の抜けた声に微笑みながら、

「一生私の側にいる。それがサラが私にする罰」

剣製は呆気にとられつつ、

「龍乾はさ……、ズルいよ」

「そうかな？」

自身でも多少は感じていた、とでも言いたそうな顔で返す。

「もういいよ……。龍乾なんか」

「なんか？」

剣製は少しタメラいつつも、

「……龍乾なんか大好きだからもういい」

そう言って二人はキスをした。

数分後……。

長いキスをし終え、頬を紅葉させながら、二人は同時に倒れた。理由は魔力不足。サラは大型の結界展開　実際は固有結界の発動だが　により魔力の大半を奪われた。龍乾は剣の雨を回避する際、肉体強化に『ブリッツラッシュ』を使い自身の底上げをしたためとフェイトのコピーデータを同時展開しながら行動して、魔力の大半を持っていかれたことである。

だが、その状態でも、戦闘ができないだけで、まだ動くことができた。しかし今は倒れて呼吸するのがやっとの状態である。

と言うのも、先ほどのキスの最中にサラは回復のために『瓢丸』ひょうまるを取り出し、治療を行った。その際の魔力残量が二人を回復させるには不足、龍乾に魔力を分けてもらいながら傷を消していった。（ちなみにキスをした状態で）

そのため、精神的にも肉体的にもギリギリまで使い果たし、今に至るのだが……。

「サラ……」

「ん？」

「愛してる」

「ん」

本人達はバカカップルの仲間入りを果たした。

第十七話 使い手と剣製 (後書き)

展開早!!と書き終わって読み返すと思ってしまいました
改善点、ありまくりですよな？

ラストのシーンの一部は「candy boy」を元にし(パク
リ)ました

リアルの話ですが、一応高三なので、受験に近くの県に泊まりに行きました。その日の晩に熱がでて、翌朝測ると39.2……。試験受けれずにそのまま帰ってしまいました。というか今も寝てますが……

みんな、体調管理はキツチリしよう(キリッ!)

そんなことが数日前にありましたが、ほとんど治りかけ(多分)。大丈夫です

〳〳キャラ設定裏話その一〳〳

なぜ裏話を始めようと思ったか。面白そうだからです

もともと、サラは唯髪の白い、泥棒程度の脇役にしか考えていませんでした。唯、Fateとか他のアニメも見ていたので思い返していたら「アーチャーも髪白いや」と思い即採用。そうして組み合わせたら現在の状態になりました。(ちなみにアーチャーは驚として出さしてもらっています)

龍乾は親友で百合にできれば……、と考えていたらニブチンキャラにしようと考えつき、モチーフは衛宮士郎です。能力に関してはZeroバースーカーのランスロットを使って、「信頼できるパートナー」ポクできたらという感じにしました

次回、第二回をやる予定です。それではまたバイ(笑)

第十八話 炎と風 (前書き)

『The BATTLE of Aces』がほしい！
『the movie 1st』が観たい！

などと自身は思いながら、『PHANTOM MINDS』や『Silent Bible』を聞いてます……

第十八話 炎と風

五階・風の間。

キーンという音が響き、シグナムと紫苑が激突する。

「ハアアアア！」

シグナムが袈裟でふるうと、

「ウオオオオ！」

紫苑が斬り上げてそれを相殺し、

「ふっ！」

反対に持っている刃でシグナムを狙い、それをシグナムは鞘で防ぎ、さらには蹴りを与えて離脱する。

「風壁！」

それを知っていたかのように、紫苑は辺りに風を纏って追撃に向かう。

「レヴァンティーン！」

> シュランゲフォーム<

刃を連結刃に変え辺りを切り裂く。しかし、紫苑には風が邪魔して攻撃が流される。

「破魔一閃！」

風をまとった刃をシグナムにむかって斬り上げる。

だがそこは歴戦の将。とっさに魔力で強化した鞘で受け止める。

しかし、

「なっ!!」

ザシュッ!

防いだのはほんの一瞬。風の一閃は鞘を紙のように切り裂き、シグナムの左腕を傷つけた。

「連撃!」

「くっ!」

勢いをそのままにし、回転して二撃目を放つ。

キーン

と何かが弾き飛ばされ、岩に刺さる。

それは折れた鞘だった。

方や片手が使えない騎士。方や未だ無傷の双剣使い。結果は見えているようなものである。

しかし、騎士の目には諦めの色は見られず、双剣使いも油断せず
に構えを解かない。

「……貴様、晋華しんかの息子か?」

四十年前。

主に命じられて闇の書の守護騎士たちが蒐集をしていた頃。
一人の剣士がいた。

魔導騎士として必死に修行していた彼は、自身の強さに誇りを持ち、周りの人々もそんな彼を尊敬し、あこがれとしていた。

そんな中、彼のところにも守護騎士が襲撃してきた。

彼の元にいた三人の弟子がヴィータ、シャマル、ザフィーラの三人の相手をし、シグナムの相手は彼が引き受けた。

彼の戦い方は、その頃主流のミッド式としては珍しく剣を使った戦い方を主としていた。

戦いは熾烈を極め、シグナムと彼は互いの願いを、主従の絆を賭けて戦った。

最終的にはデバイスの差、細かく言えばカートリッジシステムの有無が勝敗を分けた。

「ハア……ハア……」

「これで……終わりだ……」

実質、デバイスの差がなければ負けていたのはシグナムだったかもしれない。

「リンカーコアを頂く」

「ぐっ！」

肉体からリンカーコアが離れ、彼は数刻した後息を引き取った。他で戦っていた弟子たちも討ち取られ、倒れていった。

後に彼等のことは英雄として語り継がれるのは別の話でしょう。

彼の名が晋華であった。

晋華には異母弟がいた。

名を戦華せんかといい、兄である晋華が魔導と剣の両方ができるのに対し、戦華は剣しかできなかった。これには理由があり、もともと父である劉華りゅうかは剣の才に秀でた人であったが、魔導師ではなかった。

晋華の母、胡蝶こてつは絶世の美女と形容され、それを鼻にかけない性格で人を引きつけていった。さらには魔力資質を持ち、管理局に入ればAAランク位の力の持ち主であった。が、旅行先で事故に遭い、当時まだ十にもならない晋華を残してこの世を去った。

劉華の後妻で戦華の母、夕蓮ゆうれんも美女ではあったが、自身の家柄や劉華の力を鼻にかけていたため、胡蝶が築いた関係を壊していった。魔力資質はなく、彼女はことあるごとに晋華と意見を衝突させ、意

見の食い違いから彼は家を出て修行の旅に向かった。

戦華はそんな彼にあこがれる一人であった。同時に嫉妬していた。なぜ兄は自身にはない力を持っているのだ！

この気持ちを胸の内にはしまい込んでいた。

当時は知られていなかったが戦華にも魔力はあったが、魔法概念が違ったため認識されずに彼は過ごした。

閑話休題。

「いえ、ですが我が叔父のことを覚えていただいて嬉しいです」

紫苑は戦華の息子であり、晋華とは叔父と甥の関係に当たる。

「叔父は誇り高き剣士として戦い、そして負けた……」

「……」

「憎んでいない、と言えばウソになりますが、私は憧れを憧れとして残せてうれしく思います」

憧れは憧れとしてあれば永遠の目標となりますし、と付け加えてその間シグナムは黙って自身の罪を心の中でかみしめて、レヴァンティンを強く握る。

「さあ、終わりましたよ……」

紫苑の剣に風が膜のように覆い、シグナムは左手を中空につきだし、炎を出す。

「風王……」

「火龍……」

風の剣はまとう風の密度を上げ、炎は剣を形成する。

カン

とシャマルの側の岩にあった石が落ち、音が響く。

その音に二人は走り出し、カートリッジが排夾される。

「双龍！」

「一閃！」

風の刃と炎の刃。相性からいって炎に軍配が上がる。
当たる瞬間、紫苑は刃をかわし、風を解かずにシグナムに向かおうとする。

一方のシグナムも双剣の一撃をかわし、ある場所に向かう。
紫苑が追撃に来るのが見え、行動を早める。

そして着いた先にあったのは自身の折れた鞘があった。

「何をするつもりかは知りませんが、終わりです！」

勝ちを確信した声に対して彼女は鞘を地面から抜き、魔力で元に戻した。そして、レヴァンティンで地面を攻撃し、砂煙を起こした。
「!!なんのこれしき！」

まっすぐ抜けた先にいたシグナムの顔は勝ちを悟った戦士の顔であった。

> シュランゲフォーム<

「なっ!!?グハッ!!」

一撃を受けて紫苑の体が宙に浮く。

その隙に鞘を剣の柄と合わせてカートリッジをロード。

> ボーガンフォーム<

弓となったレヴァンティンの弦を引き、新たにカートリッジをロードする。すると、矢が精製され、炎をまとつ。

「翔よ!隼!!」

> シュトルムファルケン<

至近距離から、しかも宙に浮いた状態に対する一撃に避けられるはずがなく……。

彼に矢が激突した。

非殺傷設定のため、大怪我と言うほどの怪我はなかったが、最後の一撃による火傷が紫の鎧を貫いて右肩に直接できていた。

シヤマルの治癒を受けながら、シグナムは紫苑に話しかける。

「お前は確かに強い。だが、晋華には劣る。なぜだかわかるか？」

「……」

「お前は無意識の内に晋華の恨みを晴らそうとしていたのだろう。だから私が何もできないと思って接近した」

「……多分、そうでしょうね……」

「油断していたら私が斬られていたかもしれない。だが」

「騎士に負けはない、ですか？」

「どうしてそれを？」

少し得意そうな顔で言った。

「『慢心こそ油断の元凶、日々の鍛錬を怠らずいれば、戦士に負けなし』……叔父の口癖だったみたいで、小さいときによく聞かされました」

「そうか……」

それを言ったら気が抜けたようで、地面に寝転がる。

「奥にあるエレベーターで地下に向かってください。その先にお二人は居ますので」

そう言って目を閉じる。胸が上下するので死んではないだろう。シグナムは軽くうなずき、シヤマルと共にエレベーターに乗って地下に向かった。

「私は父みたいになつていたのかもしれないです……。晋華叔父……」

彼の父、戦華は兄の死に後悔と喜びを得たらしい。そして自身の目標を烈火の将に定め、復讐のために腕を磨き、越えるほどの実力を得た。

だが、人々はそれを認めず、偽りの力と彼をののしった。それは彼のプライドを傷つけ、見返そうとさらなる力を求めた。

そんな中、近くの集落が謎の生物に襲われているという情報を聞

き、仲間を連れて助けに向かった。

結果は集落の人々は救えた。仲間の命を犠牲にして、だが。

彼は人々が言った意味を悟った。いくら強くなっても実戦を体験しなければ自身の器は測れない。自身は慢心していたのだろう。だから仲間を救うことができなかつた、と。

それから彼は、『人を殺める剣』から『人を救う剣』を目指して修行し、旅先で知り合った女性と結婚、紫苑が産まれた。

紫苑自身はそんな経緯は知らないが、彼の顔はつつかえが取れたように晴れ晴れとしていた。

第十八話 炎と風 (後書き)

聞きながら書いたら思いのほか仕事のはかどった。ヤッター！

〜裏話その二〜

紫苑は彩雲国物語よりシ(くさかんむりに此) 静せいらん蘭もとい紫せいえん清苑をモチーフ、というよりは素にしています

言っちゃいますと、オリキャラ声優のCVも勝手ですが、決まっていたりします

サラ・トライデント：堀江由衣 (化物語より羽川翼、咲より福路美穂子)

太刀形龍乾：茅原実里 (涼宮ハルヒの憂鬱より長門有希、咲より龍門 淵透華)

紫苑：緑川光 (魔法少女リリカルなのはシリーズより高町恭也、ゲーム戦国無双シリーズより明智光秀)

他のキャラにもつけていますが、声優さんがわからなくなっているので、次回に書きます

感想・評価の方をよろしくお願いします> () <

第十九話 打（前書き）

タイトルのネーミングが思いつきませんでした……

相変わらずの駄文です

PVが75000超え、ユニークが15000超えをしました
みなさんありがとう

第十九話 打

「ウオオオオオ！」

浪醒が声を上げながら棍をふるう。

「ヤアアア！」

それを右のヴェンテルシャフトでいなし、左のヴェンテルシャフトをカウンターで当てようとする。

しかし、カウンターであつても、素早い動きでそれをかわす。

後ろに跳び、浪醒は棍を構える。

「（なかなかやりやがる……。紫苑だったらこういう時に何か策を考えるだろうが、俺はバカだしな……）」

シャツハも構え直し、「（強い……。シグナムと同等かそれ以上……。なかなか楽しませてくれますね）」

バトルマニア
戦闘狂の魂に火がくすぶり始めた。

「（しようがねえ……） 崔里！」

> OK <

ガシャツ

とカートリッジがロードされ、鉄球が生成される。大きさは大体ソフトボールくらいであり、それなりの重量があるようだ。

さらに二発カートリッジがロードされ、崔里の片側に焰が、形成される。

魔法で属性付加をするときの手段は二種類ある。一つは魔力変換資質があることだ。フェイトが電気、シグナムが炎という例が見られる。もう一つは媒体デバイスに魔力変換をプログラミングしておくことだ。クロノが使うデバイス『氷結の杖』デュランダルがそれに当たる。前者の利点は変換プロセスの短縮で、難点は無属性魔法（アクセルシューターやクロスファイアシュートなど）が苦手なことだ。後者の利点は技のバリエーションが増えることで、難点はデバイスに魔

力変換というプログラムが組み込まれるためによる容量の減少である。

「ハッ！」

鉄球を上空に投げると、棍を片手で回しながら自分も飛び上がった。

「焰ほのおの暴風！」

> Fire tornado <

そして焰を纏った棍で鉄球をシャツハめがけて撃ち出すと、焰が鉄球の周りを渦状に取り囲むように展開される。

受け止めることは無理と瞬時に判断し、上空に退避する。

ドーン！

数秒後にシャツハがいた場所には小さなクレーターができ、周囲には火が飛び散っていた。それだけでもどれほどのものが窺い知れよう。

「崔里！」

> Year . Aggito dragon ! <

崔里の色が鈍色から青色に変わり、先ほどまでとは違い、素早い動きでシャツハに近づく。

「!?!ふっ！」

シユン

浪醒に攻撃が当たった瞬間、塵気楼のように彼の姿が消えた。

「な!?!」

ガン

背後から頭に向かって攻撃が放たれ、それによりシャツハが落ちる。攻撃を受け、彼女は一瞬意識が落ちかけたが、そこは聖王教会の騎士としてなんとか意識をつないだ。

「ほー。今の攻撃がダメか〜（おいおい、今ので落ちないって人間か?）」

感心した声で浪醒は言うが、内心驚いていた。

「なかなかの攻撃でしたが、まだまだ落ちません！（今は流石にきましたね……。あれをもう一発やられたら、保たないかも……）」
シャツハは余裕はあまりないが、それでもまだやれそうである。忘れているかもしれないが、二人が戦っているのは動物たちがいる鉄格子のすぐ側だ。並の攻撃では折ることはおろか曲げることさえ適わないほどの頑丈さを誇っている。

キン

シャツハが背後にあった鉄棒を四五本折った音だ。ちょうどそこには何も居らず、何もない空間であった。

少しずつ下がりながら、オリの奥へと進んでいく。

浪醒という男の過去は赤しかなかった。

小学校に入学して数年後には親を殺され、家を燃やされてしまったからである。

親を殺した犯人に復讐するためだけに、四半世紀を過ごし、復讐し、今もその罪を背負っている。

当時目に映ったのは、血の赤と火の紅しかなかった。

それ以来、彼の生きる道（人生）には、罪という重石おせしが常につきまとっている。

オリの奥は外から見たら暗くてよく見えなくなっている。その暗闇から、葉莢が四発落ちる音がした。

「（位置はちょうど真つ正面……。多分カウンターを決める気だろう……。じゃあ、乗ってやるよ……。！！）」

そう考え、崔里のカートリッジを三発ロードした。

「往くぜ！」

飛ぶ、と形容するような走りでもりに突入する。

鉄格子から奥の壁までは四、五メートルはある。しかし、中には明かりが何もなく、オリの中自体が暗闇と一体化している。

突撃しながら目を凝らす。

四メートル。何も見えない。

三メートル。前方の気配は未だ変化なし。

二メートル。目が少しずつ慣れてきた。

一メートル。オリの壁には誰もいない!?

地面に崖を突き立てて、スピードを遅くしようとするが、慣性の法則（物体が運動し続けようとする働きのこと）により、なかなか止まらない。

壁の三十センチ手前で、何とか止まり、ほっとしているよ、

「烈風一陣！」

浪醒の体に攻撃が当たった。そしてそのまま意識を失った。

シャツハがしたことは至ってシンプルだ。得意としている移動系魔法で壁を通過し外へ出て、浪醒が手前で止まった時を見計らって再び通過し目の前へ。そして水月と顎みそおちに烈風一陣を当てて意識を落とすのだ。

無論、成功する確率が高いわけではない。直感によって正面からの攻撃ではらちがあかないと考えたからである。それに移動系魔法は全体的に使用者が少ないからこの策が成立したわけで、実際の力では今回みたいな一対一では五分であっただろう。

「勝負は私の勝ちですね」

バインドをかけながらシャツハは言う。

「あなたの人生は知りませんが、自分を偽らないでください」

部屋の猛獣が一言も音を発せずにいる中、彼女の声はいつも以上に響いた。

第十九話 打（後書き）

キャラ裏設定 第三回

浪醒

彩雲国物語の登場人物の一人、浪ろう 燕青えんせいがモチーフ。紫苑のモチーフ、紫 清苑とは知人ではあるが、清苑は嫌がっている。バカで棍の使い手。最良の道を選ぶことを心がけている。刃がある武器では手加減すらできず、殺してしまう。

CV：伊藤健太郎（NARUTOの秋道チョウジなど）

誰か感想をください！

改善点などをご指摘していただくとうれしいです
ちなみに、文章量は私の力不足の何物でもないです

感想、評価をよろしくお願いします

第二十話「雷神とトリスツプ」(前書き)

少し遅れた更新です

第二十話 雷神とトラップ

「くっ……」

紅い魔力弾がフェイトに襲いかかる。その数三百。大半が直射型だが、それに紛れて誘導弾が共に放たれているため、不意に弾が急停止して自分に向かってきたり、背後から急加速した弾が襲ってきたりする。

攻めに転じれない訳ではないのだが、紅麗のトラップの発動条件が一つ、『傷が付く』なので、不用意に攻撃ができずにいる。さらには『バインドなどで無効化』することも条件にはあるので、無理に動きを止めるわけにもいかない。

「（長期戦に持ち込めば、魔力切れで確実に終わる。早めに倒したい……けど）」

手がない……。とは考えてはいないが、決定打に欠けるものしかない。

「（無理かもしれない……けど！）」

> Plasma Lancer <

フェイトは天井に向けて四発のプラズマランサーを放った。

「？何をしたいのかしら？天井に放ったところで私には攻撃が」

ピシピシッ！

紅麗が話し終える前に、天井にヒビが入り、小さな石が降ってくる。

「……天井を壊して動きを止めるつもりですか？そんなことしても無意味ですよ」

> Sound wave <

ヴァイオリンから一つの音が紡がれると、ヒビが入ったところから塵のように砕けていき、最終的に天井がなくなってしまった。

> Sonic move <

そのとき、ソニックムーヴで一つの通路に向かって移動していたが、

「裁きの鉄槌」

> Judgment hammer <

通路に入る寸前に上空から砲撃が放たれて、フェイトに迫る。それに気づいたが、速さには自信があるためそのまま直進すると背後で紅い砲撃が通過する。

しかし通路の先からも砲撃が放たれた。

> Protection <

いち早く気づいたバルディッシュがプロテクションを張る。プロテクションに衝撃がかかる。

「くっ！（どうやって放ったの？）」

遠隔操作による砲撃は無理に等しい。レアスキルか何かタネがないと理論上不可能である。

）
）

流れていた音楽が変わり、スローテンポからアップテンポへと変わった。

それと同時に魔力弾が魔力砲撃へと変わり、避けることが不可能に近くなった。

フェイトが砲撃を避けている頃……。

そこに向かっている影が二つあった。

「こつちの方向で合ってるの？……というかフリーウォールって……」

「方向も何も地下に向かつてるんだから……」

向かうは地下。一人は手に白い長刀ちやうとうと白い雪の結晶のような少し大きい盾を持っている。もう一人は、漆黒に月のカップのついたレイピアと右手首に刀のキーホルダーが付いたブレスレットをしていた。

「カギかけトザす総光の門」

ブレスレットが光り出す。

「七惑七星が招きたる由来ゆらいそくごう艸阜の勢

文曲もんくわく零急れいきゅうぎて律令の如く成せ」

キーホルダーが浮かび上がり、周りを漆黒、翠、赤、紫、青白の光が取り囲む。

「千歳のトモガラ、雷切！」

青白い光が輝きを強めて、彼の人の手には電気の帯びた刀が握られていた。

「……ファー・ド・セーテオ・フレッセエン・トラー」

更に右目が輝き、目の色が琥珀色に変化した。

「アイオン却の眼……」

第二十話 雷神とトランプ (後書き)

最後の方に書いた武器が何か分かる人は答えてみてください

あと感想の方を書いてください

来ないのはさすがに堪えます

第二十一話 刺突剣と狩るモノ (前書き)

二ヶ月ぶりの投稿です

遅くなりました

第二十一話 刺突剣と狩るモノ

地下では、数十の魔力砲撃が一曲の音楽にのせて放たれている。

放たれるは紅、避けるは金。

左、右、下、後ろ。

様々な方向から一つの光を墮とそうと放たれる。

「いい加減 墮ちろ!!」

曲が更に早くなる。すると砲撃の密度が上がり、金 フェイトを狙う。

ちょうどそのとき、天井から白い光と黒い光が紅麗に向かっていった。

白は細長く、矢のようなモノ。黒は人が矢のように特効して駆けている。

「スペル・エラー魔術を被いし刺突の剣!」

黒きエペ・ラピエレ（刺突剣）から神速の突きを放つ。紅麗はその突きに反応することができず、右肩に刺突が放たれた。 > Protection <

パリンッ

防御魔法で蒼遙姫 > デバイスクが防ごうとしたが、薄いガラスが

砕けたような音と共に易々と貫き、

キンッ

ヴァイオリンの弓で軌道が多少それたが、左の肩をかすった。

「何故、あなたがいるのかしら？サラ」

「別にオカシイことはないわ。あなたの敵になった、それだけよ、社長」

黒 サラ・トライデント の登場は二人の人間の意識を変えるものとなった。

紅は敵として、金は味方として。

「ふっ！」

再びスペル・エラーを振るい、突きを連続で放つ。

シュシュンッ！

ザク！

二発を左肩と右肩に放つと、左を完璧に防いだが、右は弓で軌道が内側に逸れた。そのため、肩にスペル・エラーが刺さった。

「カハッ！？」

刺突剣の攻撃は西洋槍と同じ線ではなく点の攻撃。一撃必殺を底辺においているため、威力はそれなりに高い。

「クッ 私の、痛みよ」

攻撃をくらった紅麗は罨の発動詩を言う。

「世界を 焼け！」

最終詩を言うと、魔力が周囲から集まり、

不発に終わった。

「は？」

何故？、と言いたそうな紅麗に、何が起こったのかわからないフ
エイト。

「ククク」

そして含み笑いをこらえているサラは何か言いたそうに彼女を見
ていた。

「魔術を被いし刺突の剣。スペル・エラー効果は傷つけたモノの魔力行使の障害。
そして」

サラの左手には朱い日本刀、部類としては太刀が鈍く光っていた。

「この太刀、かしゃぎりひろみつ火車切広光は火を操る刀。発動させる畏は最終詩から
して火。無効化など、さして難しくはありませんね」

「クツ　なら」

> mode third <

ヴァイオリンからギターへと形を変える。

ネックに左手を置き、指で軽くはじく。すると少し低い音が辺り
に響く。

瞬間。

サシユツ！

という斬撃と白い光が紅麗の背後からサラの真横に現れる。

それは人であった。夜闇のような黒い籠手と白い雪の結晶のよう
な盾と長刀を持ち、周囲には白い残滓が舞っている。

「魂を刈り取るもの《ゼーレ・シユナイダー》と銀嶺孤雀ぎんれいこじやく」

黒き使い手、太刀形龍乾である。

「魂を刈り取るもの《ゼーレ・シュナイダー》は斬った相手の魔力を吸収する。」

紅い魔力が白刃に集まり、刃の大きさが膨れ上がる。

パリン

ガラスが砕けるような音と共に、通路の罫を発動するための魔力が壊れる。

身の危険を感じたのか、通路の一つに身を隠した。

「（これならあの剣には当たらない。　　イタツ。右はまだ使えないか。）」

左手でギターの本ツクをタッピングの要領で音を鳴らす。すると周りにバリアが張られる。

広間にいる龍乾の声が響く。

「ゼーレ・シュナイダーは剣じゃない。」

そう言って銀嶺孤雀にゼーレ・シュナイダーをつがえる。

「　　矢だ。」

シュン

紅麗の目の前でバリアが弱まる。

「なっ!?!」

白刃と紅が重なった。

「フエイト、遅くなった。」

「別に良いよ。それより。」

「ええ。サラ、どの道を行けばいいの?」

「えっと 右から二番目　　は一階への階段だし、真ん中は私のラボ。一番左は他の幹部の部屋だし、　　どっちだった?」

「私たちが知ってる訳ないでしょ」

「じゃあ二手に分かれて」

「得策ではない。私とサラならコンビとして最強だけど、単体ではフェイトに劣る。かといってフェイト一人では心配だし」

「ならさくもう一人に任せたら？」

「へ？」

サラの言葉に龍乾とフェイトは固まる。それと同時に着地する音。現れたのは朱いゴスロリ服にハンマーを持った少女と薄紫の狼。

「ここにいたのか、フェイト、龍乾」

「やっと合流できた」

「ヴィータ！ザフィーラ！」

「あなた方は確か、浪醒が足止めするはずだった鉄槌と盾」
急に真剣になるサラ。

「デメエ！？なんで！？」

「ヴィータ、落ち着け！」

「そうだよ。今は仲間なんだから」

「サラ、口調を変えるの止めたら？」

上からヴィータ、ザフィーラ、フェイト、龍乾の順である。

「金色の。プログラムの書き換え、できる？」

「？できる けど」

何か考えができたようで、一つ頷き、

「守護騎士の二人は一番右の通路に行つて。私たちは左から二番目の通路を通るから」

「どういうことだ？」

「えっと、その二つだけどこに通じてるかわからないからこれからどうしようって相談をしていたんだけど」

「ちょうど良いタイミングで二人が来てくれたよ」

「そうか」

「わかった。じゃあ私らはあっちの道、フェイトたちはそっちの道を探索、なんかあったら通信で呼び出してくれよ」

二人も理解できたようで、通路に向かっていく。

「じゃあ私たちも行くこうか？」

「うん」

三人も通路に向かい、入っていく。

グイータサイド

アタシとザフィーラは一番右の通路を突き進む。

「(どうなってるんだ？何の反応もない。ん?)」

目の前に変な看板が吊されていた。右には『進路』、左には何故か『ブラジル』と書かれていた。

「進路　ブラジル」

「」

迷うこと数秒。

「進路だな」

かっかっスカッ

「は？」

足下：なし。

「うわあああ!？」

下へと落ちていった。

ちなみにザフィーラはブラジルを選択して先に行っていた。

サラサイド

「?何か叫び声みたいなの、聞こえなかった？」

「気のせいじゃない？」

悲鳴はおそらく鉄槌。たぶんアレだな。ちょっと前に見たドラマのネタを使ってみたけど、こつもあつさり。クツクツクツ。

「サラ、なんか黒い」

顔に出さないようにしなきゃな。

そうこうしている内に目の前に大きな切れ目の入った扉が現れた。

「!?まさか」

私は驚きながら中に入ると、白い羽が床一面に散っており、アリスとすずかの周りにも舞っている。

「アリス!？すずか!？」

「ちょ!？二人とも!？」

二人が部屋に入って驚きを隠せないでいた。

「金色の、ここに置いてある機械のプログラムの書き換え、お願いできる?」

「え ええ」

金色のにプログラムの指示をしながら、デバイスを一つ展開する。

「映せ、玻璃壇」

八角形の鏡が展開される。鏡には灰色をバックにオレンジ色の地図、その中に点滅する白、黄、緑。そして紫の四つの点があった。位置は現在地に近い点から紫、黄、緑、白である。

「(まずは紫から ん?)」

不自然なことに、紫はすぐ側に点灯している。

「(まさか」

ピ。ピ。

金色のが二人の入っているカプセルのロックを解除した。そのとき、アリスの右腕とすずかの左腕がカプセルを貫いた。

「アリス!すずか!」

「「違う」」

アリスとすずか、いや、二人の姿をした別の誰かが言う。

「「再誕の女神、マリアだ」」

手にした剣を私たちに向けた。

第二十一話 刺突剣と狩るモノ (後書き)

終盤に近づいてきました

感想、評価をよろしくお願いします

第二十二話〈螢墜つ〉(前書き)

久方ぶりの更新です

遅くなりました

第二十二話　螢墜つゝ

「デイバイン　バスター！」

桜色の閃光が青い輝きに放たれる。

「ブラッディダガー！」

それと同時に、血の刃が背後から迫る。しかし、

「螢！」

> Ya! <

ドーン！！

閃光と刃が激突し、煙が上がる。

「やった！」

「題名> Title <！」

響く声には一言のブレもなかった。

シュルシュル！

「は！？」

はやてにワイヤーが巻かれ、天井近くまで引つ張られてから地面に叩きつけられた。

「かはっ」

「はやてちゃん！？」

はやてが墜ちた場所から煙が起きる。

「最後の王」

> Last king <

藍姫はワイヤーを巻き取り、籠手に隠す。

「残り一人」

ザッ

足に力を込め、突撃の構えをとる。

「レイジングハート」

> All right . Blaster system all
green . <

なのはの周囲に桜色の光が取り囲む。

「ブラスターシステム、リミットワン！リリース！！」

アンチマテリアルフィールド

この七年後に起こった『J・S事件』では、AMF内でオーバーSの砲撃にせり勝った一撃を放った。

「ブラストルソニック、オーバーブースト！」

「エクセリオン！」

「「ファイヤー！！バスター！！」」

藍色の流星と桜色の奔流が激突した。

「イタタ。随分と落ちたな」

変な看板（仕掛け人：サラ）によって地下深くに落ちていったヴィータ。

「誰ですか？」

その場には白い翼の生えた天使がいた。いや、実質は墮天使だが。

「ヴィータだ。アンタは？」

「ルイン」

「ルインは何でここにいるんだ？翼があるんだから飛べばいいだろ」

「この翼は飛ぶためにあるんじゃないの」

カチツカチツカチツ

羽の一枚一枚が白い魔力刃を形成し、舞い散る。

「地に落とすためよ」

シュンッ！

「な！？」

>パンツァーガイスト！<

羽が一枚、矢のようにヴィータに放たれるが、アイゼンのとっさの判断で間一髪防ぐ。

「流石。一発では無理でしたね。ならば」

羽が再び宙を舞う。更にニメートル相当のライフル二丁を手に持つ。

「破滅の力を持って排除します」

白い奔流がヴィータに迫った。

「ヴィータはどこだ？」

通路で落ちていったヴィータを探してザフィーラは歩いていた。

コッッコッ

「むっ」

前から足音がし、構えをとる。すると、

「ハワワワ」

どこかのハワハワ軍師のような反応をする緑髪の女性がいた。

「何者だ？」

「ファイ フィーナと言います。アナタは一体？」

「 盾の守護獣、ザフィーラだ（フィーナ 確かユーノが言っ

ていたな）」

「盾」

フィーナの手に緑色の巨大な盾が装備される。

「シールド バツシュ！」

「ぬ」

盾を利用してタツクルしてきた。

しかしそれを受け流そうとするザフィーラ。しかし、女性ではとばすことの不可能（一部を除く）な男性、ましてや盾の守護獣に対して無駄だと思われた。

ドンッ！

鈍い音と共に盾から砲身が展開され、運悪くザフィーラの水月（鳩尾）に激突した。

「かはっ」

不意の一撃に倒れそうになったが、そこはプライドとか誇りとかで堪えきる。

「ぐっ 貴様！」

「滅亡の王女、フィーナです。倒させてもらいま！？」

セリフの途中で口元を押さえる。（+涙目）

「舌を噛みまみた」

FBWM社長室

ドーン！

砂煙を巻き上がり、中から何か突き抜け、床に激突する。

煙が晴れるにつれ、床の人物の輪郭がハッキリしてきた。藍色のチャイナドレスを着、四肢に銀色の防具を装備した女性、藍姫であった。

「やった」

煙の中から、なのはが現れる。バリアジャケットには所々掠ったような痕が付いていた。

「ウーン 何の音や て 何じゃこりゃー!?!?」
はやても気が付いたようで、驚いている。

「それじゃ、行こか」

「はやてちゃん、緊張感を持って」

何もしてない豆狸がお気楽なことを言う。

「?どうしたの?」

「いや、誰かに悪口を言われた気がしたんやけど 。 まあええわ
」!

部屋からエレベーターに乗り、地下に二人は向かった。

ピシッ!

藍姫の気絶している床に亀裂が入る。

「我が 神よ」

最後の言葉が紡がれる。

「彼の者に、祝 福を」
ドーン!

床が砕け、彼女の姿は消えた。

番外〜一周年〜(前書き)

数分で書いたテキトーな文章です

番外〜一周年〜

おめでとー！

「チエストー！！」

ズシャツ！

ゴハツ！？

「極楽鳥！！！」

ザクツ！

ギャー！！！？

「十四日遅れて言うな！！！」

別に良いじゃん。こっちだってリアルが色々大変だったんだから
少しくら

「削除しますよ？」

すいませんでした

「よろしい」

じゃあ、おめでとーってことで

「テキストじゃない？」

「この作者（馬鹿）には別に良いですよ」

聞かれてもいない連絡を一つ。これが終わったら次回作を書くつもりです。そのときも読んでいただけるとありがたいです。ではまた
次回、お会いしましょう

「私たちのセリフ、少なくない？」

「無視するな！？」

番外〜夏休み〜(前書き)

ネタが多い!

番外〜夏休み〜

「夏だ！海だー！」

と言う訳で、今回は無人島（バニングス家所有）に来ています

「どう言う訳？」

「龍乾、気にしたらそこで試合終了だよ？」

「それ、どこの安西先生？」

始まりから変な感じだね〜

「何でこの段階で番外なの、来栖？」

もうそろ夏だし、大学ももうすぐ休みはいるし

「ただ単に休みたいだけだよね〜」

そう言いつつ何で童子切を構えてるの、サラ？

「そうなのか〜」

さらに玉響を首に突きつけないで、龍乾？

「童子よ童子、我が肉を喰らい、魔炎となりて討ち世の大妖を凪ぎ

払え」

ヤバッ！？

「気牙絶刀！！」

グハッ！！

「三段突き！！」

あべしっ！！

「イエーイ！！」

「詰まらぬ者を焼き斬ってしまった」

ふっかーっ

「滅殺！！」

げふっ

>> 今後について<<

現在エターナルなど四機と対決中です。その後、軽い後日談的な話を入れます（予定）

そして『魔法少女リリカルなのはEternal』は完結し、続編に続けようと思います（確定）

「なぜ構成が予定で終了は確定なんだ！」

もともとここまで拡大する気はなかったんだからアヤフヤだよ

「そうかよ」

「サラ、キャラが違う!？」

「んだとー!!」

>>オリキャラ声優について<<

私が考えたのは、

アリス（マリヤ）：川上とも子

サラ：堀江由衣

龍乾：茅原実里

紫苑：緑川光

浪醒：伊藤健太郎

フレイル：浪川大輔

紅麗：桑島法子

藍姫：豊口めぐみ

ルイン：加藤英美里

デニス：沢城みゆき

フィーナ：花澤香菜

です

「見事に最後の三人は化物語だよね」

元ネタは化物語と彩雲国物語、あと好みです

「君がくれたあの日」

「にははははははー」

軽くカオスだ

まあ今後ともよろしくお願いします

「とうかが最後はテキトーな気が」

「ちよお……」

「プツンッ」

番外 新年の挨拶 (前書き)

長らく放置していません

単なる挨拶文に近いです

番外 新年の挨拶

「新年！」

「明けまして！」

「「おめでとつございますー！」」

久々の投k

「「死ねー！！」」

げふつ

「半年以上音信不通のボケには一回地獄を見せましょうか？」

「龍乾！？そんなことしちゃダメだよ！！」

サ、サラさ

「コンクリと一緒に東京湾の潜水ツアーに連れて行くんだよ（黒笑）」

死ぬ！？死んじやう！？

「大丈夫だよ！ロツカーに入れてあげるから」

どこの生徒会だよ！？死ぬ死んじやう死ぬだろっ二段活用！？

「どこの上条さんだよ、アンタも……」

「超電磁砲一発で許そうか？」
レルガン

「アマいわよ、サラ。一方通行と神の拳ゴットフィンガーに直死の魔眼でフィニッシ

ユだつて」

死ぬの確定だつて！？

「私のこの手が真つ赤に燃える！相手を倒せと轟き叫ぶ！！」

チャージ完了してるし！？

「ゴット！！フィンガー！！！！！！」

ギヤアアアアア！！！！

「悪は滅びるのだ！！」

「ハデにやったねえ」

「？どうした、朱い槍なんて持って」

ソロモンよ！私は帰つてk

「刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ホルゲ!!!」

かはっ!?

「もう大丈夫だよ」

「復活しないよな……?」

……

「返事がない。ただの屍のようだ」

「脳内百合の作者（悪）が滅んだところで、バカが他の作品を書き始めたりしたから続きが出来上がらないんだよ」

「最近ではまた新しいの考えてるみたいだよ？」

「中途半端に終わらないことを祈るよ……」

では次回、お楽しみに〜

「「「いつの話だ!」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2930h/>

魔法少女リリカルなのはEternal

2011年1月10日18時54分発行